

浅野誠 沖縄論シリーズ

5. 沖縄の歴史・民俗

2013～2017

先に出した「3. 沖縄の歴史・民俗2003～2013」（本文中p112～6に提示した目次参照）の続編だ。

収録したブログ記事を書いた2013～2017年は、2018年に発行した「魅せる沖縄」（高文研）の準備・執筆作業と重なる時期だったので、その関連記事が多くなった。

また、沖縄音楽教育史の連載など、音楽芸能関連のものも多くなったのが、一つの特徴となっていよう。

2018年11月発行

目次

※ ブログ掲載年月日順に配列

『くんじゃん』一国頭村近現代のあゆみ」を読む	2017年07月13日
沖縄における女性の強さと家父長制	2016年09月14日
『セクシュアリティ』75号 浅井・加藤対談	
1 すれちがい	2016年08月28日
2 ゆいまーる	2016年08月30日
3 両性平等	2016年09月01日
外間守善「回想80年 沖縄学への道」沖縄タイムス社2007年を読む	2016年04月22日
県立博物館美術館 ゲルニカ 「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」	2016年04月02日
湧上元雄「沖縄民俗文化論」など沖縄研究図書を読む	2015年12月04日
比嘉麻「沖縄の人とブタ——産業社会における人と動物の民族誌」を読む	2015年12月10日
大城将保作磯崎主佳画「石になった少女 沖縄・戦場の子どもたちの物語」高文研2015年を読む	2015年08月28日
吉成直樹ほか『琉球史を問い直す——古琉球時代論』森話社2015年を読む	2015年08月07日
波平恒男「近代東アジア史のなかの琉球併合——中華世界秩序から植民地帝国日本へ」を読む	
1. 定説への異議申し立て	2015年05月08日
2. 近世における士	2015年05月16日
3. 就学 近世・近代	2015年05月23日
4. 「琉球併合」の論理 存在しない「琉球藩」 同化主義の分析	2015年05月29日
5. 歴史研究 「琉球処分」 「民族統一」	2015年06月01日
与那原恵『首里城への坂道——鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』筑摩書房2013年を読む	2015年04月14日
小川忠「戦後米国の沖縄文化戦略——琉球大学とミシガン・ミッション」(岩波書店2012年)	
に触発されて考える	2015年04月11日
新垣清「沖縄空手道の歴史」(原書房2011年)を読む	2015年03月20日
比嘉政夫「沖縄の親族・信仰・祭祀」榕樹書林2010年を読む	
1. 比嘉政夫先生と私との出会い	2015年03月03日
2. アジアの多様な地域とのかかわりを考える 10世紀以前	2015年03月10日
3. ハーリーと門中 海外の影響と歴史的变化	2015年03月14日
渡辺欣雄「沖縄文化の拡がりと変貌」(榕樹書林2002年)を読む	
1. 伝統の創造	2015年02月20日
2. 長男中心社会は少ない 沖縄文化の独立	2015年02月25日
古家信平・小熊誠・萩原左人「日本の民俗12 南島の暮らし」を読む	

1. 民俗を歴史的に見る トーカチ・カジマヤーなど長寿祝いと擬死 2015年01月21日
 2. 門中の明治以降の成立変化 2015年01月26日
 3. 沖縄での豚肉を食べる習慣の歴史 2015年01月30日
- 三輪大介「蔡温の資源管理政策」論文を読む 2015年01月11日、01月15日
- 澤田佳世「戦後沖縄の生殖をめぐるポリティクス」(大月書店2014年)を読む
2014年09月17日、09月22日
- 福田晃「沖縄の伝承遺産を拓く一口承神話の展開」三弥井書店2013年を読む 2014年07月31日
- 琉球語賛美歌論シンポ 2014年06月30日
- 安里嗣淳「先史時代の沖縄」(2011年第一書房)を読む
1. 石器時代 2014年03月15日
 2. 先史時代のムラ(集落) 2014年03月19日
 3. グスク時代 2014年03月23日
- 沖縄音楽教育史
1. 芸大院授業で発見し考えたこと 2014年01月16日
 2. 音楽史・音楽教育史の独自展開へ 2014年01月19日
 3. 音楽・教育・音楽教育の独自検討 2014年01月23日
 4. 音楽への2組の対アプローチ 生活と支配 集団と個人 2014年01月25日
 5. 音楽とスピリチュアリティ(祈り、癒し、宗教) 2014年01月28日
 6. 創造創作的性格と音楽教育 2014年01月31日
 7. 音楽指導者 2014年02月02日
 8. 学校音楽と学校外音楽との緊張と交流 2014年02月06日
 9. 音楽教育における内容・方法の史的検討 2014年02月09日
 10. 時代区分 2014年02月12日
 11. 20世紀初頭における沖縄の市民社会成立拡大と音楽 2014年02月14日
 12. 戦前と戦後 断絶と連続 音楽・教育・政治 2014年02月17日
 13. 音楽・音楽教育と身分階層、およびそれらの移動 2014年02月20日
 14. 職業としての音楽教育者 2014年02月25日
 15. 歌詞と曲、楽器と歌唱といった対概念 2014年02月28日
 16. 多様なジャンルの交流協同としての音楽 2014年03月05日
 17. 音楽活動の組織 2014年03月10日
 18. 音楽の場(物的環境) 2014年03月17日
 19. 多様な音楽媒体の登場普及 2014年03月21日
 20. 音楽における沖縄独自性と音楽教育 2014年03月25日
 21. 沖縄独自の音楽の創造へ 2014年03月27日
 22. 音楽教育史研究 2014年03月31日
- 久万田晋「沖縄の民俗芸能論」(2011年ボーダーインク)を読む

1. 注目の本	2014年02月13日
2. 「第二章 神祭りと芸能」 沖縄における旋律など	2014年02月16日
3. 「第三章 沖縄の女性の踊り歌 臼太鼓」 王国支配との関係	2014年02月18日
4. 臼太鼓の地域差異など	2014年02月24日
5. チョンドラー	2014年02月27日
6. 第五章 民族芸能エイサーの変容と展開	2014年03月01日
7. クラブチーム型エイサーと青年会エイサー	2014年03月07日
8. 奄美の民俗芸能論 男女ともに円陣で踊ることの歴史分析	2014年03月13日
三島わかな「近代沖縄の洋楽受容」の書評会	2014年02月23日
黒島精耕「ダートゥーダー探訪の旅—小浜島民俗歌舞の源流をたどる—」(2012年沖縄自分史センター刊)を読む	2014年01月12日
小熊英二「<日本人>の境界」(新曜社1998年)を読む	2013年11月16日
梅木哲人「新琉球国の歴史」(法政大学出版局2013年)を読む	2013年10月18日
上里隆史『海の王国・琉球 「海域アジア」 屈指の交易国家の実態』を読む	
1. 港湾都市那覇を軸にした琉球王国成立という新鮮な学説	2013年07月14日
2. 「外」から刺激で『早過ぎ』の『琉球王国』成立	2013年07月18日
3. 15世紀後半からの対外交渉縮小と第二尚王朝による国家整備	2013年07月21日
4. 内外の様々な組み合わせから琉球・沖縄ができてきた	2013年07月25日
5. 日本中国などの強い影響を受けつつも沖縄独自の宗教・文化形成	2013年07月29日
6. ヒキという同一組織で行政・軍事・貿易を担う	2013年08月03日
沖縄教育史での新しいステージへの芽 我が家での研究会	2013年07月16日
興味津々の学際的研究に参加 文化芸能と教育 沖縄・台湾・日本・アメリカ	2013年06月11日
沖縄文化協会2013年度公開研究発表会	2013年07月15日
「浅野誠沖縄シリーズ3 沖縄の歴史民俗」完成 HIPに掲載	2013年05月01日
グスク時代を英雄で語ること 庶民を語ること	2013年04月14日
當眞嗣一「琉球グスク研究」(琉球書房2012年)を読む	2013年04月04日
※次の二つは、「沖縄の歴史・民俗2003-2013」への掲載漏れ記事	
移民 差別と同化教育 「沖縄県史近代」を読む21	2012年1月26日
武智方寛「沖縄苗字のヒミツ」(ボーダーインク2011年)を読む	2011年7月17日

『くんじゃん』－国頭村近現代のあゆみ』を読む 2017年07月13日

この3ヶ月余り、たまっていた沖縄関係図書を読んでいるなか、何冊もの寄贈本があった。ようやくその寄贈本の読書に着手した。

初めに、本書を読む。国頭村史「くんじゃん」編纂委員会編で国頭村役場2016年発刊である。拙著「沖縄教育の反省と提案」（1983年明治図書）を参照されたとのことで、贈呈された。引用参照の際にも、ご丁寧に許可願いを寄せられた。恐縮する。

編纂委員の方の中に、30年以上前にご一緒された方がおられた。そういえば、そのころ、国頭中学校（だと記憶しているが）で講演したはずだ。

さて、本書は、大判で本編625ページ資料編200余ページで、写真・地図・資料などが大量に入っている。制作に、大変はエネルギーを注がれたことが一目瞭然だ。

質的にも、貴重なものが大量に含みこまれており、国頭百科事典の感じさえする。全字についても詳しく書かれている。村制施行百年記念の出版だが、それ以前のこと、自然のことも含んでいる。

だから、私のような外部のものには、国頭について調べるのに好適のものだし、国頭関係者にとっては、国頭をふりかえりつつ、将来の国頭を考える上でも、貴重な宝物になるといえよう。

明治期の杣山問題、沖縄戦時の住民・避難民合わせての苦難の山中生活、米軍統治下の演習場問題、VOA問題などと、歴史の大問題に加えて、山林保護育成・貴重な動植物の保護問題など、興味深い問題が続出だ。結果として、読み通すのに2週間ほどかけてしまった。こうした書籍は、関心個所を絞って読むのが普通だが、今回はほとんどに目を通してしまった。

広大な自然のなかで、5000人余りの人々がいかに生きていくか、人口減少が激しいなか、今後の国頭のありようには深い関心を持たせられる。世界自然遺産指定問題などもあり、今後訪問者が増えていくことだろう。そのなかで、自然と人間、人間相互の出会い、協同をどのように展開するのか。それには、自然と人間との共生協同というテーマを新しい段階に推し進めるほどの課題追求が必要だろう。と同時に、それを、これまではあまりにも人工的にすすめてきたが、それを「自然」な進行でいかにすすめていくのだろうか。それは、くらし・こころのなかに、どのような物語を生み出していくのだろうか。

国頭の今後が楽しみだ。

9年前に国頭一周一人旅をしたが、もう一度やってみたくなった。

沖縄における女性の強さと家父長制

2016年09月14日

次項に掲載する加藤・浅井対談についてのコメントを書きながら、考えたこと。

沖縄では女性が強いという発言は、対談で加藤さんが触れているだけでなく、よく聞かれるものだ。と同時に、男性が、これまでの「慣習」にあぐらをかいて、「いばるけど、だらしない」という発言もよく聞く。なかには、姉妹が兄弟を守るウナイ神信仰や、聞得大君やノロに象徴される神事での女性の高い位置に触れて発言する人もいる。

「慣習」というのは、浅井さん発言にみられるように、家父長的なジェンダー感覚をもつものだ。それにもとづいて、女性は「弱い位置・役割」に押し込められて苦難をこうむり、それが今でも続いている、という発言も多い。

双方とも、発言だけでなく実際の行動が結びついている。そして、強いと同時に弱い女性も男性もいる、という生活感覚を持つ人は多い。

では、対照的に見えるこの二つの発言をどう理解すればいいのだろうか。

女性の位置・役割を、男性支配、男性に従属するものにしていく上で、イデオロギー的に大きな役割を果たしたのは、儒教イデオロギーといえよう。それにかかわっていくつかのことを書こう。

儒教イデオロギーが沖縄に本格的に導入されるのは、17世紀のことだ。薩摩からと中国からの二つのルートがある。それが、首里王府の支配イデオロギーになっていくのは、羽地朝秀治世を経て、蔡温治世になるころだ。『御教条』が象徴的存在だ。主として士族の中に浸透していくが、地方農村へは、地方役人層を媒介にして浸透させようとするが、王府の思うようにいってはいない。

地方農村を含めて、一般民衆の世界への浸透は、むしろ明治後半期であり、修身教授をはじめとする小学校教育が重要なルートであった。また、明治民法が浸透する中で、家父長的な家制度の浸透も始まった。それらと並行して、士族のみならず、地方農民へも家父長的な門中制も浸透していく。その際、「相談」に応じたユタも家父長イデオロギーの色彩が濃い「判じ」を出していく。そのなかで、女性が継げないというトートーメー問題が広がり始める。

だから、地方農村における共同体秩序が、「昔から」儒教に彩られた家父長的であったとは簡単にはいえないかもしれない、それは、明治後期に形成されたという色彩を多分に帯びるからだ。

こうしてみると、他府県と比べると、儒教イデオロギーにもとづく家父長思想・制度の沖縄での浸透期間は比較的短いといわなくてはなるまい。

そして、それらが、「女性の強さをどれだけ屈服させていったのだろうか、いけなかったのだろうか」という問い、あるいは、逆に「それらからいかにして脱却していったのか、していくのか」という問いかけも必要だろう。そして、そうしたことが、現在の女性の強さ・弱さとどうかかわっているのか、という問いも必要だろう。

以上、儒教イデオロギーを中心にして述べたが、それ以外の視点からの史的研究も近年進められている。たとえば、喜納育江編著『沖縄ジェンダー学1 「伝統」へのアプローチ』（大月書店2014年）、そのなかの赤嶺政信「男系原理と女性の霊威」、豊見山和行「前近代琉球の家族・夫婦・親子をめぐる権力関係」や、あるいは比嘉政夫をはじめとする民俗学研究は、そのあたりにも重要な示唆を与えている。

こんな視野をもって、沖縄における女・男の支配差別関係、あるいは強さ・弱さといったことを考えていきたいものだ。

『セクシュアリティ』75号 浅井・加藤対談のすれ違い

1. 両性平等とゆいまーる

2016年08月28日

季刊『セクシュアリティ』75号（2016年4月エイデル研究所刊）は、「沖縄から学ぶ—「平和と性の権利」の実践をつくる」という特集であり、関連テーマについて沖縄の様々な動向をつかむ上で、大変有益な書だ。

そのなかで、対談「沖縄の子どもの貧困とセクシュアリティの未来」（浅井春夫 加藤彰彦）は、興味深い課題を突き付けている。

それは、「沖縄における両性の平等～「ゆいまーる」とは～」をめぐって、お二人の次のようなやりとりで表れている。

「浅井（中略）沖縄社会における両性の平等についてお聞きしたいのですが、加藤先生はいつも「ゆいまーる」（助け合い、協働）を高く評価されていますよね。戦前にも貧困はありましたし男性にとっての「ゆいまーる」が成り立っていたかもしれません。しかし女性たちにとって「ゆいまーる」は男性たちのものであって、男の下で嫌な仕事をさせられ、男性に支配される関係の中で生きている側面がかなり強くあったのではないかと思います。その典型は戦後にもあった「洗骨」（中略）ですよ。女性たちの手記を読むと嫌なことであるのに、それでもお祝いの席で男性たちは飲んでいったというので仕方がなかったというのです。「ゆいまーる」という地域の人間関係は女性にとってどこまで機能していたのでしょうか。

加藤「ゆいまーる」は相互扶助とも訳されますが、労働なのです。「ゆいまーる」に入るということは、お金を出して助け合うことが一定の決まりになっているのです。そこに付随することは労働の協同体なのです。これは男性が中心です。だから家事労働は女性がやるべきことになってしまった。でも沖縄や南方では男性よりも、女性の方が圧倒的に強いです。仕事が出来なくなった時の男性は日本でもどうにもなりません。でも女性にとっての労働は外で働くことだけではなく、生きていく力そのものです。だから炊事洗濯もする、子育てもする、畑作業もするという、オールラウンドなのです。浅井 そうした女性像もまた男性たちにとって都合のいい沖縄女性像とはいえないでしょうか。女性の自立といっても、子ども連れで家族から押し出されているというのが実際ではないでしょうか。沖縄社会もまた男性社会としての都合のいいイメージを作り上げてきたのです。その点では女性の視点から生活史を辿ってみることが大切であると思っています。

加藤 沖縄は離婚が多いでしょう。男性は仕事がないと何の貢献も出来ないから、追い出されてしま

うのです。女性と同じように仕事が出来ないものですから。女性が一人で子どもを育てていけますし、男性は離婚して家を出ても子どもに会いに来ればご飯を食べさせてもらえるのです。お風呂にも入れてもらえるし、着替えも貸してくれる。別れたからと言って無下に扱われません。そういうことでいうと、女性の生命力の方が圧倒的に強いですし、それは沖縄では誰もが知っていることです。今まで「ゆいまーる」というのは理想的だと考えてきましたが、これはやはり強制力が後ろにあるからなのです。自分達で自然に助け合おうとして生まれる協同性ですよ。協同性ということに引きつけて理想的に解釈をしていましたから、浅井先生の言われる通り実際の「ゆいまーる」には相当強制力があると思います。」 p 42

お二人のアプローチというか、強調点というか、それには違いがあり、一読してズレ、すれ違いのようなものを感じる。相手の論を否定しているわけではないが。

こうしたズレ、すれ違いは、この討論だけでなく、沖縄をめぐる論議でしばしば出会うものだ。

「ユイマール」という言葉を、沖縄の良さを強調して使われることには頻繁に出会う。と同時に、沖縄においても、両性不平等をめぐる問題が多々存在しており、ユイマールにもその問題をはらむことがあることは事実である。それは、いまもなお、日常生活において出てくることだ。

この両者の関係の捉え方、課題解決については、次回書くことにする。

2. ゆいまーる

2016年08月30日

異なるものをもつ二人が対談すれば、意見が一致して発展するだけでなく、異なるものや、ずれ、すれちがいが出てきて、それに対談者が応答する、さらに読者が応答する。こうしたことは、対談にとって大いに有意義なことだ。対談者がお互いに意見をなぞり合うようなものは、対談者個々の著書で読めばいい。だから、対談で意見の違いが出てきたら、それを議論を発展させるきっかけをつくる有益なことと考えたい。

さて、28日に紹介した対談では、両性平等とゆいまーるという二つの問題が、結びつけられて、あるいは入り混じって、あるいは錯綜して語られている。この両者を適切に結び付けつつ、かつ適切に切り離しつつ論じていくことが期待される。と同時に、それは、ここで論じられている以外のことも、議論に呼び込む。そうしたことについて、私なりに気づいたこと、そして、それらが引き起している課題に前向きに取り組むにはどうすればよいのか、いくつかのことを書いていこう。

まずユイマールについてだ。ユイマールは、共通する、ないしは共同であたったらよい課題（仕事・労働）を、それにかかわる成員が、輪番で受益・分担しながら、共同ですすめるものであり、全員参加と平等性を確保しようという意味がベースにあるようだ。と同時に、そうした意味に十分に対応するユイマールは、今では滅多にお目にかからない。

都市では珍しいことになるだろうし、田舎でも少なくなっているだろう。地域の清掃・冠婚葬祭・

行事などに登場しやすいが、ユイマールとはっきり言えるものは滅多にない。とくに「まーる」にからむものがそうだ。

それだけに、その「精神」を大切にして、多様な形で行う共同のことを「ユイマール」とよんで行っている例が広く見られる。数十年前にあった原型的なユイマールとは随分異なったものも、「ユイマールだ」「ユイマール精神でいこう」といって行っている例に、日常的にと行っていいほど、出会う。

それらは、ユイマールを肯定的な意味合いで使用する例だ。

それに対して、対談での浅井発言に見られるように、ユイマールには、男性による女性への差別支配という文脈のものが見られるという指摘が存在する。

それは、同誌のなかの次のような山城紀子発言にも見られる。

「山城 ですから今、ゆいまーるが復活したら山城さんあなた喜んで歓迎しますかって、私はもうノ一なんですよね。そのゆいまーるというものの中には秩序があって、その秩序の中には主としての男性と、台所の役割としての女っていうそういう秩序でバランスが保たれている。だからもしそういうゆいまーるの復活で老人問題や障害者問題を解決しようっていうんだったら、それはお断りです。新しいもっと柔軟なネットワークであれば喜んではいっていきますけれど。」 p 125

ここでいわれる「新しいもっと柔軟なネットワーク」といった形で、ユイマールという用語を使うかどうかは別にして、共同を発展させることが、今は求められていると言えよう。

ユイマールについて、両性の不平等ということ以外のもう一つの問題点が存在している。それは、集団成員全員が、当人の意思にかかわらず、伝統・慣習として参加が決まっていることにある。いかえると、自発的参加よりも、強制としての全員参加という形を取りやすいという問題である。山城さんがいう、「新しいもっと柔軟なネットワーク」は、この問題性の組み替えを示唆しているのであろう。

それは、村ぐるみ、シマぐるみ、島ぐるみ、家族ぐるみ、さらにいうと沖縄ぐるみ、という表現にも表れている。それが自発的参加に基づいて、結果的に全員参加が実現しているならば喜ぶべきことだろうが、不本意のまま強制されて参加するとなれば、問題は大きい。そうした問題については、私は「ぐるみ主義」批判として、1980年代から多様な形で主張してきた。

各地の字単位の世界では、この問題をめぐることが多様に渦巻いている。清掃共同作業への参加と欠席料をめぐる問題、字の自治組織への加入者の減少などがその例である。

3. 両性平等 2016年09月01日

次は、「両性平等」問題である。ここでは、浅井さんが男性による女性差別支配の視点から発言しているのに対して、加藤さんは、主として、離婚問題を事例に女性・男性の強さ・弱さをめぐって発

言している。

その際、男性・女性をおのおの一括りにして二分論で語っていいのだろうか、という問題がある。LGBTと言ったセクシュアリティの多様性の問題だけでなく、日常生活での生産労働・家事労働の分担をめぐって、実に多様なかたちが存在しているからだ。典型的に家父長制的だという事例ばかりではない。それとは対照的な事例さえ存在している。だが、この問題はここでの中心的論点ではないので、それについて論じることは別の機会に譲りたい。

それにしても、加藤さんが出会った事例については、私などもよく耳にすることだ。加藤さんは女性の強さと男性の弱さなどを、とくに生活力と人間関係力について発言している。

離婚した男性をめぐる問題では、養育費を払わない、払えない例とか、親の保護になる例をよく耳にする。そして、そうした時に出てくる女性の強さと苦しみのお話も耳にする。そこには人間関係、つながりの問題がからむだけに、ユイマールの関係・ユイ的關係も関連して話題になりやすい。

その点で、若い人々、とくに男性のなかに、生活力と人間関係力を育てること、加えて結婚・子育てをめぐる責任感と責任能力を育てることが、現実の沖縄社会では、日常的に重要な問題になっている。

脱線するが、そのあたりにかかわって、同誌の南定四郎が「沖縄で生まれ育った同性愛者でカミングアウトをしている人は非常に少数です。そうなる背景には親がかり、親族扶助の恩恵に浴して「黙っていれば、なんとかなる」という経験知が、自己主張を妨げているようです。闘争的な解決法ではなく、親子・親族を他者として分離するのでもなく、そうかと言って異性愛社会に同化することもなく柔軟に生きてゆく人々がいます。」p145と書いていることが、大変気になる。これも改めて論じたい問題である。

本題に戻すと、加藤さんの離婚をめぐる話は、浅井さんの発言をずらすようにして始まり、最後に応答する。加藤さんの指摘についての浅井さんの応答は読み取れない。関心もたれることだけに、今後に期待したい。さて、両性の不平等をめぐっての浅井さんの指摘は正しいこととはいえ、加藤さんの提起への応答が読み取れないこともあって、外からの啓蒙的な指摘という印象をぬぐいきれない。加藤さんが指摘するようなことに当事者としてかかわっている人々が、浅井さんが提起する課題に自発的に取り組むありようについての提案と応援メッセージを浅井さんに期待したい。

私自身に即して言うと、私が沖縄生活を始めた1970年代前半は、啓蒙的な色彩を多分に帯びた発言をしてきたが、そのことが、「進んだ本土一遅れた沖縄」という認識枠組を増幅させているのではないか、などの問題性に気づき始め、当事者自身が事態を前向きに取り組む文脈の中で発言するようになり、大きな軌道修正を行った。これは、別の所で繰り返し述べてきたことなので、繰り返さない。

2016年04月22日

3月末の沖展会場で販売していたものを購入して読む。外間さんの著書には学んだことが多いが、外間さんの人生については何も知らなかった。

著書を通して私が持っていた学術肌のイメージとは大きく異なる、まさに激動体験をくぐったものだった。とくに沖縄戦や妹を対馬丸で亡くした体験、戦後、本土に「出奔」し、働きながら学術の世界に入っていったことなど。あるいは短距離走や空手に優れて、泥棒を捕まえた話などは面白い。

弱弱しい私などとは、全く逆の「活劇」的歩みだ。大田昌秀とともに自らモデルになって、健児の像を作ったことなど、知らない話ばかりだ。

県立芸術大学や名桜大学創設にかかわる「秘話」は、全く知らないことだった。

多様な世界とのつながりがあるので、出てくる話は驚きの連続だ。この世代は、歴史がそうさせているのか、こうした激動と創造の人生事例を目にすることがしばしばだ。現代の時代劇といった感じだ。私たちの世代とはかなり異なる。

ふと、このブログに書いている私自身の人生・生き方の記録を思い起こしてしまう。比べようがない世界といえよう。私などは、真正面に進むというより、弱さのなかでなんとか生きてきたという感じがしてしまう。頑張りすぎた人生前半期、崩れかけながら、なんとか持ちこたえてきた後半期。対照的に、外間さんは一生頑張る、というよりも、自然体で奮闘し続ける姿を見せる。

羨ましいというよりも、こんなありようもあるのだ、と感心するばかりだ。

県立博物館美術館 ゲルニカ 「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」

2016年04月02日

30日、久しぶりに沖縄県立博物館美術館に出かける。のちに書く「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」に誘われたのがきっかけだ。

それが始まる前、ちょうど開かれていたゲルニカ（タピスリ）を観る。タピスリは、タペストリーのことで、ゲルニカの絵画を織物にしたものだ。ゆっくりと2周回ってじっくりと観る。絵画の方は、いつのことも忘れたが観た記憶があるし、写真などでよく目にするが、タピスリは初めてだ。登場する人物、牛馬鳥などを丁寧に見る。

織物なので、雰囲気少々異なるが、やはり圧倒される。

時間が少しあったので、常設展をさらっと見る。2回目だ。常設展とはいえ、模様替えが丁寧に行われており、今回は、3時間ぐらいかけて観なくては、と思う。

お目当ての「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」は、研究報告と当事者の語りで構成されている。戦前の沖縄・台湾、そして戦後の沖縄でのラジオ放送について、イメージ豊かに語られる。いくつか印象に残ったことをメモしておこう。

- ・戦前、貴重なラジオだったが、1938年頃、いくつもの小学校へ卒業生などが寄贈したとのこと
- ・1940年頃、2000世帯の家庭が視聴契約を結んでいた
- ・当時の人気番組として、1) ラジオ体操、2) 地域文化、ご当地巡り、放送劇、3) 国民歌謡（戦後の「みんなの歌」に相当）
- ・戦時下には、ラジオは回収対象になった
- ・台湾では、日本語放送と台湾語放送とがなされた
- ・戦後沖縄では、情報と娯楽との役割をになった。
- ・戦後、米軍による検閲がなされ、瀬長亀次郎報道などは抑えられた

ラジオというのは、支配者による活用・統制、人々による文化形成という二つの流れが複雑なからみあいを見せるものであることを改めて確認する。

湧上元雄「沖縄民俗文化論」など沖縄研究図書の読書

2015年12月04日

依然として、我が家での仕事の半分近くは、読書と読書ノートづくりが占めている。それをこのブログ記事にしていないのは、このところの読書が沖縄関連に集中しているからだ。それらを、「沖縄的なもの」研究、川平朝申研究、南城の民俗研究に焦点化した研究ノートに収録している。それらを論文などの形で公開するには、時間がかかりそうだ。

それにしても、刺激的な書籍が多いので、いくつか刺激が多い点を箇条書き風に紹介しておこう。

湧上元雄「沖縄民俗論」榕樹書林2000年

著者は、船越出身・在住だが、つい先ごろ旅立たれた。著名な研究者だ。1970年代に琉球大学で一度お会いした記憶がある。

イザイホーや斉場御嶽についての次の記述は、「目からウロコが落ちた」感じだ。というのは、首里王府とかかわる以前の久高や斉場御嶽はどうなっていたらうか、という疑問を十数年前からもっていたからだ。

斉場御嶽のギョウノハナについて、

「ここは、聞得大君の御名付所になる以前は、魚付林であり、浦人の守護霊ナーワンダー（ナデルワ

ノ御イベの転訛)が宿る古代祭祀遺跡(巨大な立岩)の屹立する聖地であり、漁撈の神、安座真ウフジチュー(大神宮)を祀るアンドゥンの洞窟墓の伝承のある地で、王府と地元民の祭祀が奇妙に共存する聖地だったのである。」p145

「久高島と歴代の琉球王権とのかかわりは深く、王統の交替や中央の事情などによって、祝女家の廃立も余儀なくされた。次に、久高島における祝女家の歴史について簡単にふれておこう。

まず、察度王の時代に、アマミ親祝女(昔世の古い祝女、の意)と呼ばれる知花小祝女が、古代祭祀を始めたという伝承が伝わっている。この祝女の時代に、島で最古の村祭りといわれる「アマミヤ(昔、またはアマミキョの時代、の意)神加那志」が始まる。

ついで、第一尚氏時代に大里祝女家が現れる。この家から、尚徳王に殉じて縊死をとげた国笠祝女(方音クンチャサンヌル)が出、その跡を継いだ大西銘祝女のころに、イザイホーの祭りがおこったと伝えられている。イザイホーが、大里祝女家のあるかつての久高村の殿(祭場)である久高御殿庭(イザイ庭とも)で行なわれる理由がここにあるとされている。現在の久高祝殿内がその系列に属する。(以降略)」p148

ここに出てくる知花小は、今風にいうと、チバイグラーで、私の知っている人だったので、驚いた。

知名定寛「琉球仏教史の研究」榕樹書林2008年

15~16世紀の首里王府は仏教と深い関係にあり、当時は仏教が盛んな時代であったが、その時代も、それ以降も19世紀中ごろに至るまで、民衆に対する布教活動はゼロに近いものであった。そのためか首里王府が崩壊するなかで、仏教の衰退も進行し、今日に至るのだ。

エイサーなどの芸能が、多少は仏教色を残してきたが、今ではそれさえ希薄だ。

こうした仏教に対して、儒教はどうだろうか、という疑問が登場する。また、近世における在来信仰・仏教・儒教のからみをどうとらえるのか。あるいは、明治以降、天皇制教育体制が推進したイデオロギーは、儒教的色彩を多分にもっていたが、王府が推進した儒教とのとのからみはどうか。

これらの諸宗教が、明治以降の支配イデオロギーとどうからむかといった問題だ。

こんなことにも、関心を持たせられた。

「糸数字誌」2012年

本格的な字誌だ。糸数グスク以降の字の歴史や人々の暮らしを幅広くとらえている。

同じ糸数に属していて、後に独立する喜良原は、「50周年記念記録集」を出している。

これらを読みながら、シマの多様な展開にいつそう深い関心を抱いている。

これらを読むしばらく前には、沖縄の自己決定権にかかわる書籍もいくつか読んだ。また改めて論

じる機会もあるだろう。また、続けて、沖縄関連の興味深い書籍を読書中だ。

比嘉理麻「沖縄の人とブタ——産業社会における人と動物の民族誌」を読む

2015年12月10日

このごろ、沖縄関係の書籍を乱読しているのだが、本書もその一つだ。京都大学出版会2015年で、最新刊だ。

沖縄にかかわる文化人類学・民族学・民俗学関連の若手の研究には、従来とは異なる新しい流れのものが登場してきていることを、本書で実感した。

それは、次のような記述によく表れている。

「本書は、沖縄を「伝統化」する支配的なまなざしに抗して、沖縄で豚肉が好まれることだけに注目するのではなく、その一方でなぜブタが嫌われるのかを問うていく。ブタへの嫌悪と豚肉への嗜好性を同時に扱うことは、沖縄を「伝統化」する従来の研究に対する批判につながる。産業化以降の沖縄では、ブタへの根深い嫌悪がみられるにもかかわらず、先行研究はブタの儀礼的な重要性や豚肉食文化のポジティブな側面ばかりを強調してきた感が否めない（中略）。

それに対して本書では、消費者の〈ブタ嫌い・肉好き〉の態度がどのような歴史過程のなかで形作られたかを示す。それは、沖縄の人とブタの関係を単なる持続のうえに成立する事象とみなさずに、産業化の過程でいかに変化したかを問うことでもある。具体的に本書では、豚肉の大量消費慣行と、養豚場の排斥運動が同じ歴史的プロセスのなかで生じた点を明らかにする。そのために、戦後の沖縄でどのように養豚の分業化と専門化が進められていったかを辿っていく。」 p 14-5

本書は、養豚場、屠殺加工、流通、小売りの現場に直接入り込んで、それらの業務に直接関わることも含んだ研究をもとにしている。そして、「戦後沖縄の養豚は復旧の途を辿り、最終的には戦前型の少頭飼育から多頭飼育へと移行した。こうした歴史的経緯のうえに、現在の人とブタの関係は形成され、豚肉の大量消費の慣行も可能になっている。」 p 28という現実把握をふまえた研究である。そして、「ブタに対する嫌悪と好意という両極端の態度が歴史的につくられた点を論じた。人とブタの関係は、養豚場のブタの領域と、市場の肉の領域を両極とし、前者がブタ嫌い、後者が肉好きの態度と結びつく。」 p 238という状況を明らかにし分析を深めている。

豚との付き合いがとても薄い私にとっては、初めて知ることばかりで、すごく勉強になった。本書でも言及される場で、畜産にかかわる仕事をしている知人に、さっそく本書を紹介した。是非読みたいとのことだった。

9日の新聞報道によると、TPPは、日本の豚肉関税をゼロにする方向ですすんでおり、沖縄の豚生産者にとっては深刻な事態に陥りそうだ。すでにおそらく飼料の値上がりなどにより閉鎖しているところも近辺にある。こうした事態をますます大量生産システムで乗り切る圧力が増すだろう。他方では、対照的にアグー飼育などで打開する動きもさらに広がるだろう。

このあたりは、本書で対象になった豚以外にも、類似の変化が、ここ50年の沖縄の多様な分野で生じているように思う。それらを考察する際に、本書は参考になることが多そうだ。

私の専門である子育て・教育でも、有益な点があるかもしれない。地域・家族単位の手作りの色彩が濃い教育ではなくて、学校を中心に商品・金銭化された教育的な色彩がかなり濃厚になっている。その分析にも示唆を与えそうだ。

また、食と教育、あるいは動物と人間といったことにも重要な問題が存在しているが、それらについての議論が広がり深化することも求められていそうだ。

大城将保作磯崎主佳画「石になった少女 沖縄・戦場の子どもたちの物語」高文研 2015年を読む

2015年08月28日

最新刊である。作者も画者も、近隣に住む知人だ。

本の帯には、こう書かれている。

「沖縄戦終結70年——あの戦場をさまよった子どもたち、引き裂かれた家族、そして別れ、戦後の苦難・・・。沖縄戦研究者が描くこの物語は、若い世代に沖縄戦の実相を伝えるヒューマン・ドキュメントである。」

その通りだ。

作者自身の経験と聞いた話をもとに構成したフィクションということだが、場所が、作者の生まれ育ったところの近く、ということは、我が家の近くでもある。それだけに、場所の描写が、私にも共有できるものだ。フィクションでなければ、登場している場をすべて歩いて見たいくなる。カメ石と人待ち峠などは、実在であれば、我が家から徒歩10分のところだ。

主佳さんの画は、リアルさに暖かみというか優しさというか、そんなものが合わさっている。近年、戦争と平和にかかわる絵本づくりにたくさんかかわっておられることが、豊かを増しておられる感じだ。

そして、物語もフィクションとはいえ、同様のことが実在したとあっていいのだろう。当時5~6歳の登場人物たちに近い年齢の近隣の方に聞いた戦争体験と共通するところかなりある。

その方たちは、現在70代半ばから80代初めだ。

そうしたなかで、生きてきた人死んでいった人、その方たちの体験と気持ちが文章のなかからひたひたと伝わってくる。心動かされる本だ。

大人も子どもを読めるお薦めしたい本だ。

吉成直樹ほか『琉球史を問い直す——古琉球時代論』森話社 2015年を読む

2015年08月07日

著者たちの本は、これまで数冊読んだ。今回同様、20年前までの古琉球時代の琉球史の中心的な捉え方を大きく変更する問題提起に満ちている。

その主因は、喜界島の城久遺跡群の発掘などの進行により、琉球列島史を塗り替えることが迫られてきたことにある。本書では、たとえば次のように述べる。

「縄文時代までは沖縄も本土も共通の文化圏にあったが、縄文時代後期以降、徐々に独自の道を歩み始め、弥生時代以降は本土から決定的な影響を受けていないとし、「変種になった日本人」は一六〇九年の琉球国に対する島津侵攻まで続いたと考えるのである。こうした常識が古琉球を考える際の強固な準拠枠として存在していたのである。しかし、この常識自体が、もはや維持できないことは、近年の考古学研究の成果から明らかであろう。

復帰後の沖縄考古学の成果と、高良（倉吉のこと—浅野補）の「“外国史”としての古琉球史」の立場が相俟って、本土に連なる島嶼世界との関係をほとんど考慮しない傾向を強く後押しすることになった。こうした流れの中で、古琉球史像の独自路線は決定的になり、中国以外の他の地域への目配りは、そうした歴史像を補強する役割しか果たさなくなったのである。

結局、復帰後の沖縄考古学が形成した「神話」にしたがって、古琉球は独自性、独立性の強い時代であり、その時代の琉球に、現在にいたる沖縄の個性が形成されたと考え、そこに大きな価値を見出してきたのである。そうした志向を促したのは、戦中・戦後を通じての沖縄の人びとの経験であり、そこに起因する「日本」との違いや、沖縄の独自性、独立性を強調する心情であったということになる。この点を改めて整理すれば、①古琉球の扱いをめぐる日本史の潮流に対する反発、②復帰後の考古学的な蓄積に基づく強固な歴史観の構築、③戦中・戦後の沖縄に対する処遇への心情的反発、の三つが従来の古琉球史像をどのように考えるかという方向性を与えたということである。」 p15-16

これらを記述を含めて、本書、そしてここ十年近くに読んだ本などを通して、私自身の認識・問題設定も変更深化を迫られている。

古琉球時代とくに15世紀以前について、それらを並べてみよう。

1) 当時を国イメージで語るよりは、多様な諸勢力が交流・対抗・移住する場としての沖縄諸島・琉球列島というイメージで語る方が妥当であろう。

その諸勢力は、沖縄地域内に限らず、朝鮮半島・九州・琉球列島・大陸中国・・・など、環東シナ海圏内外というイメージで把握した方がよいだろう。

それらは、流動的な存在という性格が色濃く、長年にわたって沖縄に在住していた人は、それほど多くないかもしれない。

2) それらはいくつかの群を作って、交易・交流・移住し、時は戦闘をとまなう対抗的な性格をもつことがかなりある。倭寇などもその例だろう。そして、それらに伴い、多様な言語・文化もまた、交流・対抗しあう。沖縄語形成も、移住ということを踏まえて考える必要があるだろう。

3) 「沖縄的なもの」は、まずもって多様な交流・対抗などが盛んに行われるということそのものに、特性が見いだされる。「沖縄的なもの」として、まとまった形で、あるいは継続的なものとして存在する何かを、古い時代に遡るのは難しいものが多い。

4) 農業地域を基本とするイメージではない。採集狩猟経済が稲作を中心とする農業経済へと移行していくというイメージで語られることが多かったが、稲作が導入されたとしても、稲作などを中心とする経済へと移行することを、かなり遡って考えることは難しい。

では、食糧自給はどうしていたのだろうか。どんなものを主食としていたのだろうか。

5) このように歴史が塗り替えられることが繰り返されてきたので、こうした歴史把握自体も、今後塗り替えられていく可能性がありそうだ。

萩尾俊章「泡盛の文化誌」、新城明久「沖縄の在来家畜」を読む

2015年05月22日

このごろの私は、「沖縄的なもの」についての基礎作業をすすめるのに、かなりの時間を割いている。数年続きそうだ。

その作業の一つとして、私にとって未知に近い世界である分野のこの両書を読んだ。萩尾俊章「泡盛の文化誌」（ボーダーインク2004年）と新城明久「沖縄の在来家畜」（ボーダーインク2010年）である。両書とも多様な研究の成果を集約したもので、とても参考になった。そのいくつかを紹介しよう。

・中国の福建ルートあるいは東南アジアのシャムルートで伝わってきたものをもとに、おそくとも15世紀後半には、泡盛が沖縄で作られ始めた。その後、飲むためだけでなく、交易品としても製造された。18世紀の蔡温時代には、泡盛の製造禁止措置をとるかどうかについて、王府のなかで議論があり、禁止されたこともあった。明治中期には、個人の酒製造が禁止された。

・沖縄では、野生動物で家畜化までにいたったものはない。家畜類は、海外から持ち込まれた。古い順に並べると、犬、鶏、牛（8世紀）、馬（11世紀）、山羊・豚・かんのんアヒル・チャーチンなど（15世紀後期）、猫（不明）といった具合のようである。

それらは、農耕用、食用、交易品用などに飼育された。馬のように、近世では士族専用のもの、あるいは交易用に使われたものもあった。

こうした人々の日常生活に深く位置づいているものを、どのような社会背景で、どのような社会的個人的必要にもとづいて、どのような社会的位置にある人々が、どのように営んでいたか。また、そこには、海外交流がどうかかわり、「沖縄的な」ありようが生まれ維持され変化消滅していったのか、こんなことを知りたいと思う。

たとえば、泡盛の個人製造の許可禁止が、どのようなことを意味しているのか。ペットとしての「家畜」は、人々の暮らしのなかでの精神のありようと、どのような関係を結んでいたのか。

また、泡盛とか家畜とかは、食事・音楽芸能・スピリチュアリティなど他の生活の諸分野にかかわりをもつ。たとえば、「ウンサク」と呼ばれる口かみ酒のことが出てくるが、私が住む字中山の大きな行事の時、それが登場する。今では、何かで代用しているかもしれないが、酒は、人々のスピリチュアリティ、民俗行事で大きな位置を占める。

また、家畜などは、その時代の産業、とくに農業や運送業では重要な位置を占める。沖縄の自然環境のなかで、どのような家畜が活用されたかは、「沖縄的なもの」を構成する。

こんなことを考えながら、今後もこの種の本を読んでいきたい。

波平恒男「近代東アジア史のなかの琉球併合——中華世界秩序から植民地帝国日本へ」を読む

1. 定説への異議申し立て

2015年05月08日

岩波書店から2014年に出された大変意欲的な本だ。従来の定説的なものへの異議申し立てが大いに盛り込まれている。この分野は私の専門領域でないにしても、多少なりとも歴史にかかわる仕事をしてきた私にとっても刺激が大きい。とくに、1980年代における私の「沖縄県の教育史」の仕事は、本書が検討対象ともしている戦前戦後の歴史研究を参照しつつ展開してきたから、なおのこと強い刺激があった。

いくつか紹介コメントをしていこう。

上に書いたような本書の課題設定は、本書冒頭の次の箇所にとめられている。

「琉球・沖縄と朝鮮の近代史には、併合後の「同化」と「皇民化」の政策や、併合やその事実の正当化説としての「日琉同祖論」や「日鮮同祖論」の形成など、多くの共通性や類似性がある。特に注目したいのは、アジア・太平洋戦争での日本の敗戦によって、朝鮮半島は当然ながら独立を果たし、日鮮同祖論も一夜にして説得性を失って放棄されたが、日琉同祖論は戦後にまで生き延びたこと、むしろ戦後の時期により熱く唱えられ、より広く人口に膾炙したことである。(中略)

戦後の沖縄の状況を「民族の分断」として、復帰運動をその克服を目指した民族運動として理解した上で、日本と沖縄が同一民族であることの根拠として、戦前以来の日琉同祖論が引き合いに出され、琉球併合の史的意義の評価についても、復帰運動やそれを支える日琉同祖論と整合的であるべきことが要請された。戦後の「琉球処分」研究、ないしはそれに依拠した「琉球処分」をめぐる今日の標準的な、歴史記述は、沖縄の復帰運動とその余熱が続いた一九七〇年代から八〇年代始めの頃までに、右のような学問外的要請の下でその骨格が形成されたといつてよい。(中略)

個々の史実解釈では、その時代に確立され、しかも往々にして学問外的動機によって歪められた解釈が、今なお通説として無批判的に流通している場合が多いように思われる。本書の論述は、それらに対する根底的な批判を企図している。」 p 19-20

「琉球を中華世界の一員の座から引き降ろし、近代日本へと併合した「琉球処分」の歴史も、右に述べた近代日本による伝統的中華世界の解体の一環をなしていた。そして、これらの「前近代」から「近代」への移行にまつわる諸々の出来事は、まさに歴史の進化に随伴した現象として、基本的に肯定的な評価を付与されてきたといえる。だが、前近代の中華世界に内在した「合理性」を明らかにし再評価する近年の研究動向は、当然ながら、従来の「琉球処分」をめぐる歴史観の見直しを要請するものとしても受け止める必要があるのではなからうか。それは同時に、例えば近代国際法の概念のように、「近代的」なる形容詞のついた事柄なら直ちにプラスの価値づけをしがちなわれわれの惰性的思考に、根底的な反省を促すものでもなければならぬだろう。」 p 26

このような課題設定をもとに、本書は「琉球処分」をめぐる一連のものを、「琉球処分」用語ではなく、「琉球併合」用語でもって、論述していく。

2. 近世における士

2015年05月16日

「琉球併合」の前史をなす近世における士についての指摘には興味深いものがある。

「琉球では工・商は独自の身分としては発達せず、士と百姓の区分が社会構造の骨格をなしていた。(中略)

日本の武士とは異なって、刀剣を身に帯びることもなければ、武芸の鍛錬に励むなどといったこともなく、ほとんどの者には世襲の家禄(世禄)という制度もなかった。こうした非武の特徴は、近世では

薩摩の武具統制下にあったことの結果でもあっただろうが、たとえそこに強い要素があったにせよ、近世の琉球が武ではなく、文に価値をおく政治社会だったことは疑いなく、そこには中国文化の色濃い影響を認めることができる。あえて較べるなら、琉球の士は日本の武士ではなく、中国の士大夫や朝鮮の両班（における文班）に近い存在だったといえよう。

第二の特質は、士の身分の総人口に占める割合が著しく大きかったことである。（中略）「琉球処分」の時点で言えば、琉球の士は総人口の四分の一にも及んだ。日本の武士がせいぜい総人口の五～六%にすぎなかったのと較べると、この点も著しい相違をなしている（中略）。このことは、近世琉球の士分（士の身分）を日本史からの類推で単純に「支配階級」と呼ぶことがいかに誤解に満ちた、または誤解に導きがちな表現であるかを示していよう。」 p 62-63

——ここで書かれている事実についてはすでに知られていることだろうが、著者がこのように分析することは、意義深いことだ。

「日本史からの類推で単純に「支配階級」と呼ぶ」ことについての指摘にも注目したいが、著者が「支配階級」をどのように定義するか、それにもとづく「支配階級」、ないしは別の用語で示されるとしたら、それに該当するのは何か、などへと論を進めていただけるとありがたい。

「「琉球処分」期のことを先取りして言うなら、これら人口の四分の一を超える士分層に加えて、後述の地方役人層までもが、明治政府の併合を志向した諸政策には最後まで抵抗した。歴史書ではこの強制的変革に対する琉球の士分層の抵抗を、日本史における「不平士族」からの類推で「旧支配階級」の反抗運動と同等視するような記述がなされることが多いが、そうした安易な類推は根本的に誤っていると行ってよい。」 p 63

—— 「不平士族」の類推による分析の誤りは理解できる。ただ、「地方役人層までもが、明治政府の併合を志向した諸政策には最後まで抵抗した」と書かれると、日清戦争期以前においても、明治政府＝沖縄県庁の施策に関与した地方役人層の存在を見る時、どうかな、と思う。「最後まで抵抗した」ものもいただろうが、「すべて」と書いているわけではないが、「抵抗」した部分、「関与」した部分などに分け入った記述を期待したい。同様に、屋取層、下級士層などでは、すべてにせよほとんどにせよ、「最後まで抵抗した」ことに含めることは難しいのではなかろうか。

「琉球では士・農とは別に、工・商の身分が独自に発達することはなかったが、その理由の一つは士分がその種の活動を担っていたからだった。また、近世も後期になれば、町方から田舎下りをして屋取と呼ばれる集落を作り、そこで農に携わった士分の者たちも少なくなかった。」 p 64

—— 工・商を身分としてではなく、士として担ったものたちの存在への注目は重要だ。無論、それは町方百姓、さらには、農村にあって、そうした業務を担ったものたちの分析へとすすむことが期待されよう。そして、王府時代におけるこうしたありようが、明治政府＝沖縄県庁の施策下において、

どのような変化が生じ、その後の工・商（産業）の展開にどうつながったのか、つながらなかったのか、へと興味関心はふくらんでいく。

3. 就学 近世・近代

2015年05月23日

前回記事の続編。近世の士（士族）の特質について。

「第四の特質は、琉球における科挙の制度と士分の教育である。士の子弟が王府内の公職に仕官する場合には、多くの場合、科や科試と呼ばれた試験制度で選抜された。ただし、その対象は筆者や大屋子と呼ばれた下級事務職などが中心で、王府の高職に就くための高等文官試験のようなものはなかった。王府の官職を上昇していくには、功績のほかに家格（家筋）の原理も併用され、その点で中国の科挙の制度に比すれば、中途半端な制度だったことは否めない。しかし、日本の武家制度、世禄制度の下ではほぼ家格のみで官途が決まり、学問を試す国家試験がなかったのと較べると、この科試の存在も大きな特色といえよう。」 p 64

——— 近世教育史分析においても意義深い重要な指摘だ。こうした士たちのための学校の整備が、ごく一部を除いて、なぜ19世紀になってから、という検討分析にもつながる指摘だといえよう。

「近世の琉球では、教育の普及は相当に高い割合を示したものと推定される。「琉球処分」の頃で言えば、士の身分の比率が人口の四分の一を超えたほか、地方の諸間切にも百姓身分に属した地方役人を育成するための教育機関があったことを考え合わせれば、確実に成人男子の三割以上は識字階層に属したと見なしてよいであろう。

（中略）沖縄における近代学校教育の歴史では、「琉球処分」直後にほぼ零から始まった男女の就学率のうち、男子の就学率が三割を超えるのは日清戦争の頃のことであった。沖縄教育史の研究では、この就学率の上昇の遅々とした歩みを貧しさや教育への理解の無さなどによるものとして様々に解釈してきたが、むしろそれ以前に肝要なことは、琉球から沖縄への世替わりに伴う教育の断絶、すなわち就学率の三割から零への急落であり、その後の歩みを上昇の遅さというより、回復の遅さとして捉えていく視点の方ではなかろうか。」 p 65

——— 同様の問題は、他府県の寺子屋と近代学校との就学者層についても検討されるべき問題だ。近世の諸学校と近代の諸学校との連続性と断絶性とにかかわる。この引用でいう「教育の断絶」という表現をさらに掘り下げたい。

識字者の量でいうと、引用の指摘が該当する部分があるだろう。質で見えていくと、学習目的・学習内容における大きな差異、というか断絶が、「量」以上に明確なのだ。

同じ三割であるにしても、王府時代は、王府のためにしろ、間切・村業務にしろ、役人事務のため

の読み書き算の習得であり、一部は漢学につながる、ないしは王府の採用した儒教イデオロギーの伝達につながるものであった。明治政府が追求した近代学校の場合は、まずは、日本国民への統合をはかる、いわゆる同化＝ヤマト化があり、加えて、初級読み書き算（ならびに、時代が下ると多少の実学が加わる）があった。

だから、識字としては同じであるとしても、全くと言ってよいほど異なるものであった。近代学校への対応は、士・地方役人層は、近代学校への対応、旧学校への対応を、両刀使いのように見なして対応し、様子を見て切り替える・切り替えないを行ってきた。そこで、たとえば近代学校の一時期には、旧学校の内容を採用したことさえあったのだ。だから、「零への急落」というのは、対応・切り替えの問題として登場していたのだ。

それ以外の農民たちは、就学の必要性が希薄であった。それだけに「お上」の命により、就学させられたのである。とくに女子については、その傾向は強い。女子については、士・地方役人についても、そういえそうだ。だから、1910年ごろまでは、実質就学率が重要な意味をなす。就学を形式化させている実態を把握しなければ、検討分析が入口止まりになるか、あるいは誤りを生んでしまう。

「形式」就学率が90%を超えるころからは、事態が別の構造へと移る。そこでは、一般農民にも、読み書き算への必要性の認識が成立しはじめ、あるいはまた、「上」からの就学強制が徴兵制などとのからみを含んでくるからだ。

少々、余談に入りすぎたか。私の1970年代末から80年代にかけての沖縄教育史作業の一つは、こんな課題意識を持って進めていた。

4. 「琉球併合」の論理 存在しない「琉球藩」 同化主義の分析

2015年05月29日

今回は、私が注目した記述のいくつかを紹介しよう。

「近代日本は（中略）天皇主権の国家として成立したが、その集権化の過程は、「王政復古」の理念の下に、天皇が全国の土地人民の本来の所有者であるというきわめて特殊な思想を梃子として進められた。だが、それは日本ではそうだったという事実にすぎないのであって、近代化一般に不可欠のものでもなければ、近代に向けた成熟度が測れる規矩として規範化されるべきものでもないだろう。いずれにせよ歴史に内在して理解すれば、古代大和朝廷の支配権が琉球を包摂していたことが当時の人々に自明視されていたのでない限り、「版籍奉還」の原理が琉球に適用されること、つまり、琉球の土地人民も島津氏から天皇政府に返還された（されるべきだった）との解釈は成り立ちようがないし、ましてや独自の国家形成の歴史、自らの建国神話や独自の文化を持っていた琉球王国の側に、自国琉球の土地や人民が皇国日本の「王土王民」に包摂されるとの思想が成立し、あるいは受容される余地のなかったことは言うまでもないであろう。」 p 127

—— 天皇制国家の「琉球併合」の正当化論理の急所を鋭くついた指摘だ。

「確かに、藩王冊封後の琉球の呼称として、明治政府は「琉球藩」の語を用いた。しかし、当時の明治政府の令達の類いでも、また当時の人々が書いた文書の類いでも「琉球藩の設置」などと記述された例は存在しない。歴史的には、文字通り「冊封」や「封冊」の語が用いられ、「勅して藩王と為し」とか「詔して藩王と為し」というように、あくまで天皇と尚泰王の関係設定の行為として理解されていたのである（換言すれば、最初に君臣関係の設定行為があり、その結果として「藩王」の統治機構や統治領域が「藩」と呼ばれたのであって、その逆ではなかった）。」 p 423-4

—— 琉球王国が「琉球藩」にさせられたという俗説（通説？）に対して、琉球藩というものが、実体としてだけでなく、形式としても存在しなかったことを明示した優れた指摘だ。

「琉球併合から韓国併合に至る東アジアの近代史は、清朝を基軸とした旧来の中華帝国体制に代わって、日本が新たな植民地帝国として擡頭する過程であり、新旧帝国の交替と呼びうるものであった。

（中略）

近代の西洋諸国は、資源を求めて遠く離れた非西洋の諸地域を植民地にし、多くの場合、現地住民の立法権を認め、彼らの参与する政府機関の設置も認める「自主主義」（「自治主義」とも呼ばれる）の原理により統治した。しかし、日本は琉球を含めて台湾や朝鮮など、本国に近いところから同心円的に支配地域を拡大し、本国すなわち皇国内地の制度文物を強制的に移入・模倣させる「同化主義」を、新たに領土になった諸地域における統治原理として採用した。

（中略）本来の華夷思想における華夷の違いは、文化文明の高低によって弁別されるものと観念されたが、しかしそこでは、それゆえに中華の高度な文化は自ずと周辺から募られる形で、周辺を王化・徳化していくものと考えられた。中華は自文化を周辺に押し付けるのではなく、周辺の国や地域から崇慕されること（「慕華」）によって、中華の実を示さねばならない。それが本来の中華思想であろう。事実、そのようなものとして東アジア地域は、中華の漢字文化・儒教文化の大きな影響下にありつつ、各国家・地域にはそれぞれに固有の文化が発達し、共存するという多文化世界でもあった。

それに対して、日本の植民地支配の基本となった同化主義は、そのような旧来の華夷思想すなわ中華世界秩序の理念からまさに「慕華」の理念、周辺が自ずと慕ってくるという自発性の契機をかなぐり捨てたものだった。すなわち「王道」や「礼」、「王化」「徳化」などの理念ではなく、それらを「霸道」による統治、つまりは軍事的暴力を後ろ盾とした支配と自文化の押し付けによって置き換えたものだったといえるだろう。

こうして、近代日本は、自らが東アジアの漢字・儒教文化圏に属しつつ、本国に距離的にも文化的にも近い「同族同祖」「同種同文」の諸地域・諸国家から支配地域を拡大していったが、その過程で、皇国イデオロギーと、少しだけ早く西欧文明を導入した実績や成果に基づいて、日本型華夷思想と呼ぶにはあまりにデフォルメされた、過度に自己中心的な意識を昂進させていった。そうした支配

の拡大と尊大な自意識に対応していたのが、日本語の押しつけを始めとした「同化」政策であり、それが昂じた「皇民化」政策であった。そこでは、まさに同祖同源のゆえに民族としての資質は日本本国（内地）に近いほど高いとされつつ、他方では、日本本国（内地）と周辺の民族・地域との現在の文明的開化度の落差が強調されるという矛盾を伴いながら、それゆえにこそ同化が可能であり、かつ必要でもあるのだという形で、植民地支配と同化主義による統治の正当化が行なわれていったのである。」 p 351-3

—— 「同化主義」分析において、極めて鋭く優れたものがある。私も大いに学ばされた。

5. 歴史研究 「琉球処分」 「民族統一」 2015年06月01日

この連載も今回で終わる。

歴史研究には、研究が行われる時点での課題意識が重要であり、それが研究内容にも投影する。そして、時として、それが研究対象とする歴史時点での事実把握に過剰に投影し、歴史把握を誤らせることがある。その問題にかかわって、著者は鋭い指摘を行う。

「日本の「戦後歴史学」の一部でも、講和後も日米安保条約下での対米従属が続く中で、真の「民族独立」を説く声があり、またそのモチーフが明治維新史研究にまで投影されたりもしたという事情も、「民族」や「民族統一」のタームが選好された背景として指摘しうるだろう。

重要なことは、そこでは「民族統一」というのが何らかの形で肯定されねばならない当為命題として前提されていたことである。これは、沖縄近代史では、明治後期以降の「同化主義」の政治文化のなかで、伊波普猷が琉球処分を「奴隷解放」と「国民的統一」の端緒として捉え、「日琉同祖論」を唱えだしたことに始まり、戦前から戦後にまで継承された前提、というより民族分断的状况と復帰運動という特有の政治的事情から、まさに戦後においてより強化された形で具有されていた前提であった。」 p 114-5

「少なくとも琉球処分期には「民族」の概念や、その概念と結びついた「民族統一」の規範意識もいまだ存在してはいなかったのである。このような架空の目的を明治政府の意図のうちに措定し、それを解しえなかった人々、というより、そもそも存在しないが故に解しうるはずのなかった人々を、遅れた存在として最初から予断し裁断していく発想の構えこそが、それ自体歴史的に形成されたものとして、本当は問題にされねばならないだろう。」 p 115

「日本史の専門家が「琉球処分」を論じる場合には、日本の近世社会との単純な類推で近世琉球を理解ないし誤解する傾向や、徳川日本と明治日本を同じ日本として連続的に考えがちな傾向が認められるように思われる。また、琉球・沖縄史の研究者について言えば、歴史用語だけでなく、問題意識そ

れ自体が日本史研究からの借り物であることが多く、特に「琉球処分」については、明治維新との単純な類比が行なわれ、近世についてもその延長上で問題の発想がなされてきたように思う。」 p 42
1

「戦後の研究では、「琉球処分」を「民族統一」という視点から論じるというのが研究者に共有されたパラダイムとなった。しかしながら、今日では沖縄や日本を取り巻く問題状況も大きく変わり、そのパラダイムは崩壊ないし雲散霧消したとあってよい。だが、個々の史実解釈では、その時代に確立され、しかも往々にして学問外的動機によって歪められた解釈が、今なお通説として無批判的に流通している場合が多いように思われる。本書の論述は、それらに対する根底的な批判を企図している。」 p 20

一連の叙述を読んで、沖縄史研究をめぐる新たなステージが生まれつつある印象を持つ。そのなかで、私自身の研究はどう展開していくのだろうか。模索中である。

与那原恵『首里城への坂道——鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』筑摩書房 2013年を読む

2015年04月14日

これまた「沖縄的なもの」について検討する作業の一環として読んだ本だ。紅型を中心に沖縄の工芸美術などにかかわって貴重な仕事をした鎌倉芳太郎と、彼がかかわった主に大正昭和戦前期の群像にかかわるノンフィクション風の読物だ。研究書とっていいほど、大量の情報をもとに、かつ物語的な興味をそそる書き方で綴ったものだ。

美術工芸の世界で全くの素人である私が知らないことが続出するので、興味深く読んだ。
プロローグの一節を紹介しよう。

「鎌倉が沖縄にやってきた大正末期、琉球王国時代の建造物はまだ残っていたものの、急速にうしなわれようとした時代でもあった。「琉球」の痕跡が消え去ろうとしていた。政治的状況ではヤマト（日本）との一体化が加速している。

けれど同時に彼が会ったのは、琉球王国の時代を祖先の足跡とともにいきいきと語る人たちだった。おもてだってはヤマト化につきすすんでいるようだが、胸のうちには「琉球」があざやかにきざまれていた。つぶやくように語りはじめ、問われるままに話はふくらみ、ふいに記憶がよみがえってゆく——。手をのばせば、そこにいにしえの琉球人のぬくもりを感じることができた時代でもあった。そんな時代に立ち会った人間ならではの、いま、何としても記録しておかねばならない、そう覚悟をきめた迫力が感じられるのだ。

鎌倉が沖縄でのフィールド調査をしたのは、断続しながらも約十六年間におよぶ。驚異的な力で膨大な史料をあつめ、ノートに記録し、写真を撮影した。それらをもとに、東京で大規模な展覧会がひらかれ、昭和初期に巻き起こった「琉球ブーム」のきっかけをつくることになる。」 p 7-8

登場人物は、沖縄では旧王族を含めた上級士族が多く、その「文化・生活」の香りが漂う世界が多様に登場する。もう一つの間である東京では、美術学校（現東京芸大）で美術の頂点にある人々が相次いで登場する。双方とも、文化が生活感あふれる形で書かれているが、いいようによっては、「お上品な」というか「格式のある」というか、そうした世界の物語といえよう。たとえば話題の中心の一つの紅型が、歴史的には上級士族の世界のものだから当然のことともいえよう。

旧士族を中心に首里の人々が、琉球王国の崩壊と、そのシンボルである首里城が荒れていくなかで、王国文化を保持しつつ、時には懐古する姿、と同時に、沖縄（琉球）的誇りの世界を持ち続ける姿が描かれている。そして、そうした「伝統」が持つ美術工芸などの保存に力を尽くした鎌倉芳太郎の行動と交友関係が生き生きと描かれる。加えて、そのなかに、鎌倉なりの型絵染の創出へと至る戦後の世界が描かれる。

これらの過程は、琉球王国時代の文化が傾いていく時代であったと同時に、逆に士族占有のものが、士族外、地方へと拡がり、新たな創造を迎える時代でもある。民衆世界とは別世界であった文化が、新たな展開を示していくのだ。その点にも少しだが触れられている。

興味深かったのは、鎌倉が民芸運動とは距離をおいていたことについての叙述だ。「沖縄的なもの」への対応の違いを示唆しているようだ。この点も掘り下げたくなる。

ついでながら、沖縄に深く入り込んで、「わんにん、ウチナーンチュドーヤー」 p 352 とまで言った鎌倉が、「結局、私は本土からの旅人」 p 367 との思いにいたったと書かれるあたりを読んで、私自身はどうなのだろうか、改めて考えてみたくなった。

小川忠「戦後米国の沖縄文化戦略——琉球大学とミシガン・ミッション」(岩波書店 2012 年) に触発されて考える

2015 年 04 月 11 日

ここ数年間の私の中心的仕事の一つの「沖縄的なもの」についての作業のために、関連する文献を乱読している。その一つとして、本書を読む。内容はサブタイトルを含めて書籍名通りだ。

私自身、琉球大学に17年間在籍しながらも、本書には知らなかったことが多くだけでなく、本書のような視点から深めて考えたことがほとんどなかった。

米軍の関わりが中心であるだけに、本書の中心は、琉球大学創設前史と創立後10数年間である。

そこでは、次のような課題が検討されている。

「第一に、大学の研究者の協力を得て実行された軍政学校における軍政要員の育成は、米国内において軍と大学の関係緊密化をもたらし、戦後の米国において巨額の国防予算が大学等高等教育機関に投入される契機の一つとなった。米陸軍がミシガン州立大学に琉球大学への支援を委託契約したミシガン・ミッションは、最も初期に開始された軍学協力の代表例である。

また研究職から軍に身を投じ海軍の軍政学校に学んだジェームズ・T・ワトキンス（中略）、ウィラード・A・ハンナ（中略）ら「学者軍人」は、戦争終結直後の初期沖縄占領期において民主化、教育行政、伝統文化の保存・修復等の分野で活躍し、「沖縄の文化、教育に理解のある米軍」という沖縄社会に後年まで残る米国に対する好イメージの源泉となった。

第二に、軍政要員のためのマニュアル作成には、ジョージ・P・マードック（中略）ら当時における一線級の文化人類学者が関与し、さらにマードックらは、文化人類学の知識を軍政学校において講義した。マードックらの沖縄に関する文化人類学的研究によって完成した『民事ハンドブック』は、沖縄戦に投入された米軍幹部と将校に配布され、彼らの沖縄理解に影響を与えた。一九五〇年代と一九六〇年代前半において、米国軍政当局は、沖縄の日本復帰運動を鎮静化させるための「離日政策」を琉球大学の設立等によって教育・文化行政においても推進するが、「離日政策」を推進した軍人たちは、「琉球人は日本人とは異なる民族」という認識を有していた。このような認識が米軍内に形成される上で、マードックら文化人類学者の研究が果たした役割は少なからぬものがある。」 p 15 - 16

米軍政、とくにと教育と大学にかかわって重要な検討事項ばかりだし、また「沖縄的なもの」について考えるうえで示唆するところ大の叙述の連続だ。本書についての検討は、改めて数年後に仕上げるつもりのもに委ねる。

本書は、私自身が、琉球大学でしたこと、あるいは、31年間の専任教員時代を中心に大学についてしてきたこと、考えたことは何であったかを、改めて考え直す機会を与えてくれた。

「復帰」以前の琉球大学は小規模であったし、米軍との緊張感のなかで、問題のテーマ性がかなり鮮明であったし、それを在職中の大学人がかなり共有していたようだった。そしてそれは、「沖縄をどうするのか」というテーマと直結していた。

しかし、「復帰」後、国立大学となって以降はどうであったのか。1972年の「復帰」直前に非常勤、73年からは専任として勤務した私だが、当時、日本の国立大学の経験しかなかった私には、大変新鮮な衝撃を与えた。当時の琉球大学は、施設を始め、不備があまりにも大かったが、教育への構えは、日本の国立大学とは大きく異なっていた。私の大学教育活動へのその後の取り組みの原点は、日本の国立大学ではなく、この琉球大学であった。

それ以降、私は、教育活動を中心に、大学改革に長期に取り組んできた。専任大学教員時代の前半の中心の一つはそこにあり、勤務先であった琉球大学教育学部での教員養成に実践的に深くかかわるだけでなく、多様な発言を続けてきた。専任大学教員時代の後半も、大学に関してかなり積極的に関与してきたが、管理職となって大学行政に関わるようなありようを意識的に避け、大学教育、わけて

も授業のありようにかかわって発言と行動を続けてきた。

そうしたことのまとめをそろそろしなくてはならないな、という思いを、本書が刺激し始めた。

新垣清「沖繩空手道の歴史」(原書房2011年)を読む 2015年03月20日

空手について全く無知な私だが、沖繩のなかで根強い人気をもっているだけでなく、軍事とスポーツとからむ世界としても興味をそそられる。加えて、「沖繩的」ということを考えている今、「沖繩的」なものの重要な一つとしての空手について無知のままではいけないと思い、いずれ関連書の学習をしなくてはとと思ってきた。

まずは、目に留まったのは本書だ。おそらく多様な書籍が、多様な立場から出されているだろうから、いずれ何冊か目を通さなくてはならないと思う。本書が沖繩空手界を代表する書であるかどうか、まだわからないからだ。

それにしても、空手知識ゼロの私にとっては、重要な示唆を含み、初心者学習としては、読んでよかったと思う。示唆を受けた点をいくつか記しておこう。

1) 古琉球時代の沖繩は、軍事がきわめて重要な位置を占めていた。それは日本武術の枠内で展開していた。

2) 薩摩統治が始まり、沖繩の武装解除がなされた近世では、武術の類も薩摩・大和の強い影響下に置かれ、剣術を中心にした大和武術文化のなかにあった。と同時に中国との交流のなかで入ってくる文化も存在した。

3) 近世末期のアジア情勢の展開、とくに政治軍事の緊張のなかで、空手に先駆けるものが盛んになる。それらは、基本的に士族が担うものであった。その中で、首里奉公していた知念の志喜屋のものが、棒術の類を学び、村に持ち帰ったことは興味深い。

知人によると、その話は志喜屋で今でも語り継がれている。

4) 明治期になると、学校のなかに持ち込むなかで、教育として、あるいはスポーツ的性格をもつ空手が作られていく。学校では軍事とのかかわりも深い。

そのなかで、旧士族以外にも空手が広がり始める。「沖繩独自」のものが学校とのかかわりで展開されたという点で注目されよう。

5) 大正期昭和戦前期になると、流派が成立し始め、道場も生まれていく。本土にも広がり始める。

4) 5) にかかわる記述を二か所紹介しておこう。

現在われわれが修業する空手という武道は、糸州安恒という先見の明をもち、優れた指導者として

の資質をもった沖縄の武士がいなければ、存在していなかったであろう。

空手の技術以上に糸州が優れていたのは、教育者として優れた弟子を数えきれないほど育成した事と、時勢を観る目に非常に長け、来たるべき近代の足音を聞きながら日本社会の中で存在価値のある空手を創作して、将来へ対して布石をうった事にある。

それは学校教育へ唐手を導入するために平安の形を創作したのみならず、従来の形を安全にやさしく習得できるようにするために改めていった。そして古伝の形を大として、糸州の変えたものを小とするなどである（その大の形も古伝の形からは、大きく変えられてしまった）。さらに糸洲は自ら師事した長濱や、東恩納寛量の新旧の那覇手を、心身思想の異なる首里手に混交させるという行為も行なっている。

p 371

当時の沖縄においては、西洋身体文化であるスポーツの影響を受けた空手の近代化がはかられていた。さらには日本武道を思想の基幹とした首里の手、あるいは沖縄手とは異質である、新興那覇手の普及が盛んに行なわれていた。そのために父親である義珍と、息子の義豪の手は異質なものである。

それと同時に、多くの高等教育を受けた若者たちが、当時は最高の身体思想だと思われていた西洋スポーツの影響を受けて、船越の移入した形の多くを変化させ、あるいは他の異なった思想で修行された形をもとりいれていく。不特定大多数の人間を、一時期に教えなければならない教育制度への導入、安全な組手競技への模索など、時代の趨勢として仕方のないことではあり、これらの改革がなければ空手はここまで社会一般に普及することはなかったはずである。しかしながら純粋な武術としてみれば、世界最高峰にあった日本武術（剣術）を基盤とした、素手の拳法である空手の牙を（無意識のうちに）抜く作為でもあったのだ。

p 388

比嘉政夫「沖縄の親族・信仰・祭祀」榕樹書林2010年を読む

1. 比嘉政夫先生と私との出会い

2015年03月03日

このところ、沖縄についての民俗・民俗学・人類学の本を読み続けている。私に取り組んでいる「沖縄独自」にかかわる示唆が多いからだ。

この分野での第一人者の比嘉政夫さんの本書を読む。専門書であるが、とても読みやすい。示唆するところ大だが、次回以降、いくつか絞って紹介コメントしていきたい。

その前に、私と著者とのかわりについて、少し振り返っておこう。全く専門外での付き合いだが。

初対面は、1970年代半ばのことだ。琉球大学教授職員会という教員組織がある。その役員は、輪番制的なものだが、1年間ほどその役員をご一緒した。私がおなかで担当したのは庶務係というもので、比嘉さんが責任者だった。今は「有名人」になっている比嘉照夫さんも、同じ任期の役員だった。

当時の琉球大学は国立移行間もないころで、国立大学とはいふものの、諸施設はきわめて不十分な状態だった。私の研究室を例にとると、トイレへの通路を木枠で仕切った「部屋」だった。仕切りが格子状で、「トイレ付」(壊れていて使用不能だったが)だったので、独房雰囲気だった。それでも個室だったが、多くの方は二人部屋三人部屋だった。

そんなことがいろいろとあり、施設の緊急改善のために文部省折衝に行ったのが、比嘉先生と私だった。実に世話好きで、よくお働きになる方で、私は「おんぶにだっこされる」状態だった。

私が沖縄の民俗行事に関心を持っていると話すと、「一緒に行きましょう」と声をかけていただいたが、結局実現しないままだった。

2000年代半ばに、沖縄大学でばったりと再会した。かれが。国立民族歴史博物館を退職なさった後、沖縄大学教授になられたからだ。70年代と変わらぬ笑顔が印象的だった。また、なにかとお世話になるかもしれないな、と思った。

しかし、2009年4月急逝された。

本書は、すでに準備されていたものをもとに関係者が出版にまでこぎつけられたものだ。

本書を読んでいると、私が居住する玉城中山の事例が沢山出てくる。かれの修士論文の研究対象が中山の祭祀と「ハラ」だったのだ。2000年代にお会いしたときに、私が中山に住んでいると聞いて、驚かれていた。

中山についてお聞きしたいことが多かったので、修士論文をもとにした著書を探そうと思う。

本書では、沖縄の民族・民俗は多様な地域との交流の中で形成変化されたものだ、という視点が強力に提出されていて、私の「沖縄独自」研究に大変示唆的だ。それについては、次回紹介コメントしよう。

2. アジアの多様な地域とのかかわりを考える 10世紀以前

2015年03月10日

前回記事で「本書では、沖縄の民族・民俗は多様な地域との交流の中で形成変化されたものだ、という視点が強力に提出されていて、私の「沖縄独自」研究に大変示唆的だ。」と書いた。

これまでの日本本土や中国の漢文化だけでなく、アジアの多様な地域との関係での探求がなされている。今回は、グスク時代以前の貝塚時代における交流にかかわる指摘をみてみたい。

「歴史をふりかえれば、沖縄の人々の文化的アイデンティティ、自文化認識の深層にはつねに本土（ヤマト）との関わりがつよく意識されていたように思う。「日琉同祖論」すなわち琉球列島の文化は日本本土の文化と系譜的に同じものであるという観念が、人々の文化的アイデンティティを強く支えてきた。そのような状況のなかで、日本本土以外の地域との文化的親縁関係を想定することは、ときによって反発も予想されることであった。（中略）

しかしながら、琉球列島の文化の研究が細分化され深まるにつれて、日本以外の地域との文化的・歴史的つながりを見極めようとする視点が不可欠であることが強く認識されるようになった。」 p 162

「とくに戦後初期までの沖縄民俗研究は日本の古代文化の残存を沖縄の文化に見つけようとする姿勢が顕著であった。しかしながら今日では、沖縄の文化が日本本土の文化と源流や系統を同じくすることを論じるだけでなく、沖縄の文化的歴史的に育んできた独自性に目を向け、日本文化が豊かな多様性を持つ文化であることを表す個性的な地域文化として、あるいは日本本土文化に対峙する文化として沖縄文化を位置づけようとする考え方も出てきている。」 p 241

「私たちが目を向けなければならぬのは、いわゆる漢民族の文化だけでなく周縁部の少数民族の文化も含まれるのである。それは少数民族の文化のなかに琉球列島の民俗文化との親縁性を見つける可能性があるだけでなく、漢族文化の受容のあり方が、中国の少数民族と琉球もしくは沖縄のあいだにどのような共通性と違いが見られるかということも、文化の比較の視点として大切ではないかと思うからである。琉球列島の文化は日本文化周縁としてみることができるが、漢民族または漢文化の周縁にあるものとしてみることによって、アジアの文化としてより広い視点でとらえることが出来ると考える。」 p 259－260

「とくに雲南、貴州など中国南部の諸民族の文化についての調査研究が片しく進捗している今日、その成果が期待されるが、近年の報告の中に示唆に富むものが少なくない。たとえば、中国南部、貴州省の彝族の村のツォトンジという一種の来訪神儀礼について記述した報告のなかで、伊藤清司は南部琉球のアカマタ・クロマタやマユンガナスなどの祭祀儀礼との類比を指摘していて興味深い。」 p 262

近年、考古学・歴史学・民俗学などいろいろな分野で、急速な研究の進展により、10世紀より前の人間の移動も含めた交流と、さらにそれにもとづく文化形成変容について、多様な問題提起や仮説が出されている。そうしたことへの先駆的な提起が、上掲の比嘉さんの文にあらわれているといえよう。

ところで、近代国民国家形成以降、国家単位で把握思考することが過剰になっている。とくに「単一民族論」が強い日本ではそうだ。国家がない時代において、沖縄のような地域では、強い国家をもつところと、そうしたものがまだないところ、そのいずれに対しても、付き合いを上手く進める知恵

と技、つまり文化を持っていることが重要になる。

また、沖縄という地域がひとまとまりであるわけでもない。当時は、沖縄本島内であっても、居住地以外の人々とは、共通のまとまりをもつことは少なく、島外との交流に似た様相があったのではなかろうか。なかには、交流の拠点として他地域の植民で成立している地域があったかもしれない（これは、まったくの推理だが）。

いずれにせよ、現代の視点を投影して考えるのは避けなくてはならないだろう。

こうした柔軟な、というよりも先入見なしで考えることが、この時代の把握の必要条件だろう。こうしたことを考えるうえで、示唆の多い本書である。

3. ハーリーと門中 海外の影響と歴史的变化 2015年03月14日

前回記事で、「日本本土や中国の漢文化だけでなく、アジアの多様な地域との関係での探求がなされている」と書いたが、それをハーリーや門中に関わって述べている箇所を紹介しよう。

「那覇や糸満のハーリー行事がすべて外来文化の受容によって成り立っているとは考えられない。周知のように五月四日のハーリーは漁民の祭りとして知られ、宮古、八重山にも糸満漁民の移住とともにこの祭りが広まったといわれている。

漁民の祭りであり、ときには「海神祭」として呼ばれる行事であるが、この祭りの基底には琉球民俗社会独特の世界観ないしは神観念に支えられた農耕儀礼の要素がみられ、女性司祭者ノロを中軸とする村落または村落連合の祭祀体系に組み込まれている。だからこの五月四日に各地で行なわれる「ハーリー」を大陸系だとして、無視することはできない。琉球列島の人々の信仰には、はるかな海のかなたから神が村を訪れ、豊穡をもたらしてくれるという、いわゆる「ニライカナイ」からの来訪神への信仰を表現する祈りが大きく息づいている。ニライカナイからの神々がシマ（村落）にユー（豊穡）をもたらすという観念、そして海のかなたの楽土からのユーを乞う人々の想念は、後述するように舟漕ぎの催礼となって沖縄各地の他の年中行事に表れている。」 p 249-250

ハーリーは見るだけで、このような事情に無知な私には、すごく勉強になった。

他地域との関係だけでなく、歴史的变化として論じている点も注目される。門中についての記述をいくつか紹介しよう。

「沖縄の「門中」は単なる中国文化の移入や模倣ではなく、そのなかには日本本土の生活様式や、韓国の文化も受容されたことが考えられ、さらに沖縄の土着的な文化のもつ外来文化に対する自律的な收拾選択の仕組みも働いているとみななければならない。」 p 158

韓国とも絡んでいることは、全く知らなかった。さらに詳しい叙述を紹介しよう、

「少なくとも十五—十六世紀頃までの琉球の社会は、尚真王の頃までは、仏教が国の宗教政策の中軸としてあったわけです。薩摩が沖繩に入ってきたのが。一六〇九年ですけども、その頃から国の施策が儒教中心になってきます。そういうことから男性中心の一つの倫理が広まっていったんじゃないかと考えられます。これは父系に血筋で結びつく、社会人類学の用語では「父系出自集団」、門中というものの生成の歴史・文化的過程を考えると、隣の韓国における社会史と比較できる興味深い視点が出てきます。ご存知のように韓国にも門中というものがありますけれども、仏教から儒教へと変わった国家の宗教政策が、また門中生成をめぐる同じような歴史過程がみえてきます。儒教倫理で、社会関係・人間関係が枠組みされた首里とか那覇の中心地と比べると、他の地域はそれほどの枠組みではなかったのではないかという感じがするわけです。」 p 26—27

士族の中に儒教倫理が入り込んでいくのが近世だとすると、士族外ではどうだろうか。よく「御教条」の読み聞かせなどを例に挙げて、近世にすでに儒教倫理が入り込んだという文を見かける。読み聞かせがあったにしても、実質的に儒教倫理、そしてそれに影響された家族倫理が一般民衆に入り込むのは、明治期後半以降であろう。そのことでは、とくに学校が重要な役割を果たしたと、私は考えている。比嘉さんのこの文もそれに近いのではなかろうか。

そして、比嘉さんは、支配者の施策とからめて考えている。

「沖繩の社会の親族組織の基盤は、ウェーカ、ハロージ、あるいはウトウザなどとよばれる父方母方双方をたどる、双方向的な血族と姻族を含む自己中心的な枠組みをもつ親族関係のネットワークである。そのような双方向的な親族は奄美から八重山まで存在し、琉球列島全体の社会の基本的な原理を構成しているとみることができるが、門中のような父系出自集団は地域的に偏在し、その組織の発達程度合いも地域によって異なることから、門中が十七世紀半ばの首里王府における系図座の創設、それにもなう家譜作成など男系的系譜観念の強化や中国的な「姓」制度の模倣的受容などふくめて近世沖繩社会における身分制確立の過程のなかで生み出された制度であり、それが農民の社会にも模倣され伝播したものであるとの考え方が今日大方の支持を得ている。

一方、門中の形成について、首里王府の政策的意図に結びついた外因的要素のほかに、奄美から八重山に至る琉球民俗社会に、祭祀的な中心としての聖域「ウタキ」や村落の草分けの家筋「ムトゥ」などを中心に、ヒキ（中略）とよばれる系譜観念、あるいはヒキを通して形成される集団などが見出されることから、そのようなヒキが門中形成の土着的基盤として、門中の沖繩各地への伝播・普及の受け皿として機能したのではないかとの見方もある。」 p 146—7

「沖繩の社会において、他系養子や家筋継承も許容するような融通性に富んだ社会が父系血筋遵守の厳格な規範で均されて行くのを「門中化」現象と呼ぶことができる。この現象は沖繩でさまざまな論議を呼んできた。沖繩本島周辺離島地域や北部の地域において、首里・那覇地域の都市地域、あるいは旧士族層の門中の原理や組織を模倣する傾向があり、それが「門中化」現象に結びついているの

であるが、それはときによって文化の地域性を敷き均すものと見ることもでき、また、見方によっては都市化と考えることもできよう。

近世琉球の士族社会では、婿養子を許容する家筋継承から父系血筋遵守の継承原理への傾斜もしくは転換、また家譜の形式における本土的和系格から中国的唐系格への移行があった。そのような動きは儒教倫理を国政の基本にしようとした首里王府の施策に則ったものであったし、当時琉球から見れば先進地域であった中国に倣うことは、〈文明化〉〈近代化〉の指標であったにちがいない。そのような施策が十七世紀以降、薩摩の琉球支配下で進行したということは、それが琉球の主体的な選択であったのか、あるいは薩摩の統治策が背景に密接に絡んでいたのかについて歴史学の検証が必要である。」 p 178-9

「琉球の主体的な選択」なのか「薩摩の統治策」なのかは、重要な論点だろう。そうした支配者の施策と同時に、門中化には、地方役人層を中心にした階層上昇志向というのも重要な動因になっていただろうと私は考えている。

その点では、日本政府＝沖縄県庁はどう考えていたのだろうか。風俗改良運動などが、それに絡んでこよう。それにはユタ問題もからみそうだ。ユタはしばしば県庁の取り締まり対象になるが、彼らの「判じ」には、ときの支配者の施策に呼応したものがあらわれてくることがある。その点で、次の叙述に注目したい。

「沖縄の土着的な信仰体系に根ざした霊能者ユタは、さまざまな社会的機能を持ち、ときにはカウンセラーとしての役割も果たしていることは無視できませんが、位牌継承や祖先祭祀について父系血筋遵守、女性排除の観念が厳しい、ある意味で頑迷とも思える倫理規制となって来た歴史的背景の分析が必要で、地域社会における人々の志向や価値観の変動に敏感な霊能者ユタの発言に揺さぶられる人々の心情にも私たちは目を向けるべきだと思います。」 p 36

今なおユタ発言にはかつての支配的イデオロギーにふさわしいものがでてくるという。神がかったユタの発言は超歴史的で絶対的な性格を色濃くもつだけに、それを相対化して批判検討する目を育てる必要があろう。

連載はこれで終えるが、比嘉さんの著作には、さらに学ぶべきことが多そうだ。

渡辺欣雄「沖縄文化の拡がりと変貌」（榕樹書林2002年）を読む

1. 伝統の創造

2015年02月20日

現在、「沖縄的なもの」についての作業を進めている。その一つとして、人々の生活文化における「沖縄的なもの」の歴史についても考えている。そうした分野で蓄積が多いのは、民俗学民族学だ。その一つとして、本書を通読した。

興味深く、そして私が共感できる論点がいくつかあったので、2回に分けて紹介コメントしよう。

「現在、おなじ盆行事の「伝統」を保持しながら、各村落ごとの「伝統」内容はきわだちがいをみせている。つまり「伝統」は変化しているわけだ。あらゆる盆行事の儀礼表現が導入されつづけたとはいえ、その導入とは「模倣」や「ものまね」と同義ではない。文化の導入には必ず意図があり、しるべき知識の学習を通して、以前にあった文化との相対で創意工夫がなされるのである。「伝統文化」の変化とは、決して伝統文化の消滅でも革新文化の創生でもない。盆踊りは今後も変化しつづけるだろうが、盆行事の体系は維持されつづけるだろうからである。」 p 205

——— 人々の意識において、「伝統」というと、「昔から受け継がれてきた固定的なもの」というイメージが強い。だが、それは歴史的に生成変化消滅してきた、そして、していくというものだ。長年固定していたものは無きに等しい。そのことを、著者は端的に語っている。かつて民俗学関連の本を読むと、こうした視点が弱いものにしばしば出会って、困惑したことがあった。しかし、著者はこの文が示すように、全く異なる。

次に紹介する門中に関してもそうであり、鋭い指摘がなされる。

「かような話の例は、これまで数多く報告されてきた。だから今日、「門中」、ことに地方農村土着の父系一族は、明治期以降の《近代》の知的創造物だとされている。「伝統」は、近代100年の間に徐々に形成され、創造されてきた。だから逆に、いまなお自分の系譜がわからずに悩む人かおり、「門中」をもたぬ社会さえ存在する。「門中」こそ、《創られた伝統》の典型なのである。」 p 203

———まさに伝統は「創られたもの」である。だが、それが「伝統」という言葉をつけることによって、強力な権威づけがなされるのだ。そうした権威づけの役割を担う一つとしてユタなどが存在する。

「ヌル以下の神役たちは王府公認の祭司であるのに対して、古くから存在したシャーマンであるトキユタは、王府にとっては淫祠邪教の布教者だった。しかしこんにちユタ（本島）やカンカカリヤー（宮古）、ムヌチ（八重山）などと呼ばれる人たちは、沖縄文化を代表する存在となっており、社会構造を維持・改変しうるほど人びとの日常生活に深い影響を与えている。これらの霊能者たちは、人びとの日常生活の不安や病気を解消しようとするだけでなく、各家の冠婚葬祭の儀礼に関与し助言して、門中の父系化や位牌祭祀をはじめとした親族関係の倫理に深くかかわってきた。生家の位牌は長男のみを祀り次三男は併記せぬこと、娘や他人の位牌は祀らぬことなどのタブーを唱えることによって、ヤーや門中の秩序が再編されてきた。」 p 22

——ユタの助言で、救われる人がいる一方で、苦しむ人が多いことも、よくあることだ。また、ユタなどが神がかって話すことは超歴史的なものだとしているが、実際は、ユタが生きている時代の社会的なものを深く刻印していることも見落としてはならないだろう。

2. 長男中心社会は少ない 沖縄文化の独立 2015年02月25日

前回に続いて、印象的な箇所の紹介とコメントをしよう。

ヤマトも同じなのですが、アジア全体を見渡してみると、沖縄と似ている社会組織をもつ社会はたった五例しかありません。五六三（例 浅野補）の社会をサンプルにあげても、長男を中心とした社会、長男をリーダーとして組織されている社会は五例しかないのですね。韓国、ヤマト、沖縄のほか、東南アジアと西アジア。これだけしかない（中略）。

中国の社会というと、これは平等ですから、リーダーが長男だというんじゃないんですね。むしろリーダーというのは長老であり、年長になって一番の長老が一族のリーダーを担っていくという、むしろ世代のほうを重視していく社会です。個々のイエ自体は、長男だけがイエをもらって、次男は分家していくというシステムではない。むしろ、アジアのなかで一般的なのは中国型の体系なのです。世界には、中国のようなシステムの社会が多い。

じゃあ、沖縄はどこに似ているのか。ヤマトも韓国もそうなのですが、アフリカなのです。（中略）アフリカ社会だというふうに考えれば、沖縄は一般的です。東アジアの一角にあるから、非常に特殊にみえる。もちろんヤマトも韓国も。ところがアフリカを中心とした、長男をリーダーとした、長男が優先的にいろんな親の財産をもらって受け継いでいく、次男は分け前が少ない、そういうシステムをもっている社会はじつはアフリカに比較的多い。 p 1 2 4

——日本人、沖縄人の「常識」を覆す指摘とっていいかもしれない。これに、歴史的変化を重ね合わせると、各地域ではどうなのだろうか。どうなっていくのだろうか。

三〇年あまり前にも『沖縄の独立』が、いかに困難をともなったものであるか教えられた。ならば沖縄文化の独立はありうるだろうと考えて、「たんに日本の一県で終わらない沖縄文化」について、これまで書いてきたつもりである。 p 3 4 7

——「沖縄の独立」と「沖縄文化の独立」との区分は興味深い。だが、独立という用語は政治的ニュアンスが強いので、アナロジーとしてはいいかもしれない、ということになるだろうか。そして、「沖縄文化の独立」は、実際に展開しているものが多いので、そうした意味合いを含んだ、別の表現があるのかもしれない。

沖縄でのシンポジウムに参加していると、沖縄出身者が沖縄を自己表象する特権は、とうの昔になくなったことを感ずる。沖縄研究に、どこの出身かという特権はすでにないのである。それは、わたくしとは異なる外国人研究者とて同じだ。沖縄ほど多くの外国人研究者を受け入れた地域は、日本にはないであろう。p 348

——これまた興味深い指摘で、なるほどと思う。と同時に、沖縄人・沖縄在住人の「沖縄研究」についての権利・責務については、どう表現したらよいのだろうか。

いろいろと考えさせる書籍だ。

古家信平・小熊誠・萩原左人「日本の民俗12 南島の暮らし」を読む

1. 民俗を歴史的に見る トーカチ・カジマヤーなど長寿祝いと擬死

2015年01月21日

店頭で見つけた、古家信平・小熊誠・萩原左人「日本の民俗12 南島の暮らし」2009年吉川弘文館を読む。

古家信平の「あとがき」には、「共時的な調査によって得られた資料から抽出された普遍的理念というものは、果たしていかほどの意味をもつのであろうか。この巻の執筆者はそれぞれの対象に関して、可能な限りの文献も動員して民俗の歴史的把握を試み、現代民俗論として展開しようとしたものである。」P280とある。

私がこれまで出会った民俗関連の本の多くは、叙述してある民俗がいつの時代に始まりいつまで続いたのかを明記していない。そのため「昔からそうだった」という話になる。そのあたりに不満を感じるが多かった。それとは対照的に、本書は「あとがき」にあるように、叙述してある民俗を歴史的に描いている。素晴らしいことだ。これが著者たちだけでなく、最近の民俗研究の全体的傾向であれば、なおうれしいことだ。

本書の中で、とくに興味を引かれたところを紹介コメントしよう。

まず古家信平「年祝いにみる擬死と再生」では、今日盛んに行われるトーカチやカジマヤーという祝いの民俗は、長寿の祝いという性格だけでなく、擬死の性格を持っていたとのことだが、その歴史について、次のように描かれている。

まず、1968年の沖縄タイムスに掲載された源武雄論を次のように紹介する箇所が目される。

「老人を遺棄しなくなったのは食糧事情が好転したことと道徳の進歩のおかげであり、老人を捨てる

という習俗はなくなったが、老人があまり長生きすることは好ましくないという考え方は意識下に残り、一日だけ捨てる習俗として残ったのである。さらに、高齢者は子孫の繁栄のためにある年齢に達したら、早くあの世に行ってもらいたいと祈願する各地の枕飯御願を生み出した。最後のところで述べている長寿罪悪感は食糧不足と人口制限に起因しているが、そこから派生して長寿者には強大な霊力があり、若者からシー（霊力）を奪い取ってしまうという思想が模擬葬式の発生理由と指摘されている。そして結論として、枕飯御願の起源を太古の原始社会における棄老風習にあるとする」P38-39

そして、次のように書く。

「擬死を象徴的に表す模擬葬式は、源の報告とそれ以後に収集された資料によれば、この100年ほどの間に徐々になくなり一九七〇年代には大きな転換点を迎えたことが明らかになった。今日では（中略）長寿を祝賀し、あやかるといふ側面が強くなってきている。しかし、現在のトーカチ、カジマヤーの際に全く死の影がみられないのではない。トーカチに着用する衣装は、「トウタビ（唐旅）に行くときに着る」といわれるように、入棺のときに着せる死衣装であり、トーカチブーブー（斗搔き棒）が満ち足りたことを意味するというように、かなり遠まわしな表現で死を示唆するようになっている。擬死の要素は模擬的な葬儀や葬列といったなまなましさを避けて、控えめに表されているのが現状である。」P85-6

「あやかりを主眼とする長命を寿ぐ儀礼がさかんになる一方で、儀礼としての模擬葬式は姿を消し、死へ向かって後押しするような伝承としてのみ伝えられている。トーカチとカジマヤーに模擬的に葬儀をおこない、本人と近親者が回復できないケガレを体験することは、やがて訪れる死を徐々に受け入れる過程とみることができる。周囲の人々もそれを知り残された生を慈しみ満ち足りたものにしたいと望んだのではなかろうか。」P86

以前、近隣の方に、私が住むあたりにも山の中に高齢者を捨てる場があったという言い伝えがあると聞いたことがある。だから、こうした民俗は、「昔昔」の話ではないようだ。

近年、長寿信仰が一般化し、存命中に死を真正面から受け止める儀式が消滅したことで、失ったものも多いのではなかろうか。擬死に伴う儀式を現代においていかに考え、「継承」したらよいのだろうか。考えたい問題だ。

また、今でいう生年祝いが、王国時代の貢納とかかわりがあるという次のような指摘も注目される。

「正頭の終わりと老いの始まり

一三歳と四九歳の年祝いが、働き盛りの期間の開始と終了に対応した区切りの年祝いであることは、琉球王国時代の現実の貢納のあり方と関連づけられる。租税負担者とされた正頭は一五歳からとするのが決まりであるが、次のような一三歳からとしたことをうかがわせる布達も出されている。（中略）

四回目の年祝いにあたる四九歳は、貢納負担からの解放の年齢なのであり、『宜野湾市史』の記述には老人の仲間入りのトゥシビーとされた。」 P 60-1

国が民俗行事をも統制してきたことには、以前から関心をもっていたが、このような形でもあったことを本書が教えてくれた。次回紹介コメントする門中制度もそうだ。

2. 門中の明治以降の成立変化

2015年01月26日

前回の紹介コメントの続編だ。

今回は、小熊誠「門中と祖先祭祀」のなかの「2. 明治以降における門中の普及と変化」の箇所を紹介しよう。要点をまとめたものとして以下の記述がある。

「ここまでで明らかになったのは、沖縄本島の地方や周辺離島では、従来門中といわれる集団はなかったこと、また、他系養子の存在に代表されるように、家の継承について父系血縁を遵守するという強い規範があったわけではなかったということである。したがって、民間にもともとあった祖先を共通にする集団は、他系養子とその子孫も含んだ本分家関係を紐帯の基本とするヒキ（沖縄本島南部ではハラという）の集団であった。しかも、系譜の記録をもたないヒキの集団は、祖先の系譜関係もあいまいであり、記憶による系譜関係でつながったゆるやかな集団であった。ところが、安波の例のように、明治以降首里・那覇の町方の習慣が情報として地方に入ってくると、ヒキの集団が祖先を共通にした門中や一門として意識されるようになった。門中形成の第一段階として、この旧来の家筋で結びついたヒキの集団をもとにして、門中として大正頃までに形成されていったと考えられる。さらに、その後、座間味島の例で明らかのように、父系血縁であるシジを強調する観念が各地に普及して、シジタダシによって家筋の門中から血筋の門中へと門中の所属を変更したり、祖先の位牌を組み替えたりする現象が戦前から戦後にかけて起きている。」 P 146-7

「沖縄の門中は、近世の士族社会において形成され、明治以降民間に普及した。しかし、近世士族社会の門中制度がそのまま普及したのではなく、伝統的に地方の各地域にあったいわゆるヒキやハラを基礎とする門中から父系血縁としてのシジによってつながる門中へ変化する門中化の動きが各地にみられる。それは、廃藩置県以降、日本という国家の一部として沖縄社会が近代化していく過程の中で表れた社会変化と連動した一つの現象と考えることができる。すなわち、それは社会の基礎となる家はどうかという、その社会の基本的な枠組みと関係する。」 P 147

上記紹介したものの他の記述なども参考にして、私なりに整理・補充してみよう。

1) 士族以外の門中は、明治以降につくられたものであり、100年前後の歴史をもつが、何百年も前から歴史があるわけではない。ただ、士族層の影響が強い地方役人層においては、明治に入る前後の時期につくったところがあったろう。

ユタ・三世相などの判断により、先祖がつくられ、その先祖の家に拝みに行く例があるが、先祖とされた家の方では困惑していることもあるようだ。

ちなみに宮古では門中がつくられていないが、なぜそうしなかったかの解明も期待される。

2) 士族門中の影響だけでなく、明治国家による家制度とのからみで成立している点も注目される。

3) 各シマにあるヒキ・ハラが門中へと再編されたようだ。明治以前にあっては、そうしたつながりとシマ全体のつながりの方が、「家」よりも重要な位置をしめたようだ。だから、再編成立した門中も、独立性がつよいものではないようだ。シマ内部での結婚が、数十年前まではごく普通であり、門中とはかかわりなくシマの人々の大半が親戚関係にある例も多そうだ。門中が合同で墓をもっている例も聞く。

4) シジタダシでユタ・三世相などが活躍したようだが、かれらのハンジも、明治という時代背景と深く結びついてなされている点に注目する必要があるだろう。

5) 士族門中制度の真似をすることで、身分上昇はできなくても、階層上昇したいという願望がかなうという構造が、明治期につくられたのではなかろうか。

その明治期に作られた門中だが、士族や屋取の影響が言われるが、もう一つ、明治30年代に実施される土地の私有化などの改革の影響はないのかどうか。門中形成の時期が、明治初期なのか、明治中期以降なのかどうか、そのあたりを知りたいところだ。

6) トーミー問題が、ここ30~40年来話題になっているが、士族は別にして、歴史の浅い門中制度が、なぜにこれだけの難問を作っているのか検討する必要があるだろう。無論、門中のプラスマイナスを、社会背景と結びつけて検討する必要もあるだろう。

考えたい問題がいろいろとある。

3. 沖縄での豚肉を食べる習慣の歴史

2015年01月30日

今回は、萩原左人「肉食の民俗誌」である。私にとって、日常的に触れながらも、知識がほとんどない分野だ。まず沖縄で豚飼育が広がった時期と背景について、次のように書かれている。

「甘藷が中国から琉球に伝来するのは一七世紀初頭のことであり、以後農民の食生活を支える重要な作物として広く栽培される。甘藷は、芋だけでなく蔓や葉も豚の飼料として利用できる。このような甘藷栽培の普及によって、その後多くの農家が豚を肥育することが可能となり、豚の飼養が広く普

及したものだと思われる。」 P 2 0 1

関連して紹介すると、別のブログ記事で紹介したイチロー・カワチ、等々力英美編「ソーシャルキャピタルと地域の力 沖縄から考える健康と長寿」(日本評論社2013年)のなかの高田勝「沖縄在来家畜とソーシャル・キャピタル」では、次のように述べられている。

「17世紀なかば、琉球王国の摂政・羽地朝秀により構造改革が行われ、勸農政策で、労役に必要な牛馬を屠畜して食べてはならないという禁止令が出された。その後、冊封使節団を接待するため、豚の大量生産が奨励された。この時期に豚肉は牛肉に代わる存在となり、牛を食べることが一般的でなくなっていくた。」 P 1 8 2

昔から豚を食べていたというのではなく、17世紀にこのような事情のなかで広く食べられるようになり、それが食文化のなかで重要な位置を占め始めたということが分かった。

さらに、「祈り」にかかわっての次の記述も興味深い。

「奄美・沖縄の島々の場合は、歴史的にみても本土地域のように稲作に特化した社会が形成されたわけではない。さらに仏教的な殺生禁断や神道的な触穢観なども民俗として定着しておらず、これらによる宗教的な肉食忌避の意識はきわめて希薄である。特定の祭祀において肉食を忌避する例も一部みられるが、一般に肉食行為がそのまま穢れとして忌避されることはない。むしろ本章でみてきたとおり肉への嗜好性が強い食文化が形成されており、さらに肉正月の事例のように肉に対し高い儀礼的価値が与えられてきたのである。

本土地域の餅正月と奄美・沖縄の肉正月との対照性は、原田の指摘をふまえれば、稲作に特化しかつ肉食を忌避した社会の正月と稲作に特化せずかつ肉食を嗜好する社会の正月との違いということになる。肉正月の問題は、単に食生活の違いというだけでなく、両地域間における民俗文化の構造的な差異を考える上でも重要な問題を含んでいるように思われる。」 P 2 7 5 ~ 6

この記述も、私にとっては新鮮なものだ。

幼児期少年期と、餅正月のなかで生活し、20代後半以降の大半は、肉正月のなかで生活してきた私も、実感的にわかる。

このごろ、沖縄での衣食住をはじめとする日常生活のありようを、自分なりの体験をくぐり抜けて考え、その歴史と今後の展望を考えることに楽しみを持ち始めた。無論、このところ考えている「沖縄的なもの」について関心を深めているからだ。

三輪大介「蔡温の資源管理政策」論文を読む

2015年01月11日、01月15日

以前から、この論文があることを知ってはいたが、未読というより未入手のままだった。読書以前の私は、次の二点にまとめられる。蔡温施策について関心を持ってきたが、教育の角度からを中心に考えてきたし、これまでの研究の大枠に沿った認識のままで来た。また、「自然と人間とのかかわり」を統治施策の観点から考えることについては、初心者でありつづけてきた。

そんななか、まさに初心者である私に、多くの示唆というか、考えるきっかけを与えてくださったのが、本論文である。

昨年末、ある出会で、本論文の入手をお願いしたところ、早速届けられ、年始に読むことができた。期待通りの論文であった。

少しばかりだが、2回に分けて紹介コメントしたい。

論文は、次のように修士論文と、それを集約加筆したものとの2本ある。

A, 三輪大介「蔡温の資源管理政策—琉球環境経済史の試み」(京都精華大学修士論文) 2008年

B, 三輪大介「近世琉球王国の環境劣化と社会的対応：蔡温の資源管理政策」、安溪遊地・当山昌直編『奄美沖縄環境史資料集成』の「第3章1節」(pp. 303-333) 2011年、南方新社。

まず二か所紹介しよう。

「羽地の諸改革は、東シナ海交易の終焉と薩摩支配という社会変動に対する琉球王国の社会的対応であり、凋落の一途を辿る琉球王府に活力を与え、一定の繁栄をもたらした。その反面、この急激な変化は近世琉球の環境劣化を加速させる結果ともなっていた。このような状況のなか、蔡温の資源管理政策という新たな局面を迎える。」BのP11

「王国内の資源劣化が、生産性の持続可能性を脅かすまでになった蔡温の時代、自給経済体制の確立という方向性は踏襲しつつも、その生産性を担保する資源管理という問題が非常に大きな重要性を帯びてくる。蔡温が志向した自給経済体制は、厳重な資源管理を基盤とする「資源保全型自給経済」体制であったと位置づけることができよう。その蔡温の資源管理政策は、①資源管理技術の確立(地面格護・杣山法式)と、②資源管理制度の確立(杣山分割・管理体制)の2点に集約することが出来る。①資源管理技術は、地面格護として示された土壌浸食防止の技術と、「抱護」の思想を核とする林政7書に示された森林管理技術である。いずれも、沖縄という地域社会の構造的特質に立脚した技術であり、端的に言えば、生態システムが有する陸と海双方向の環境コントロール・システムを補完する「地域技術」であった。」AのP2

直接的ではないにしろ、本論文の強いメッセージは、現代の沖縄施策は、資源管理という視点が甚だしく欠落し、資源破壊を慢性的に蓄積させる事態を招いていることへの、強い注意喚起だろう。それは、現代というよりも、明治期以降の150年近い蓄積となっているだろう。それは、経済政策であり、軍事・政治政策であろうし、さらにはまた人々の生活に直結した諸政策であろう。

蔡温施策は、その前の羽地施策までの「資源消費型」政策の展開が生み出した「持続可能性」の危機に対して、「資源保全型自給経済」であることに、本論文は注目し、その背景・施策の実際・施策の思想を広く深く分析している。そして、この政策がうみだしたものは、その後も、各地の集落で戦後期まで継承されてきたことが本文中で述べられている。

そこには、次回紹介するが、沖縄の自然環境・生産体制の独自性に適合したものを独自に創出している点で大きく注目されるものがあるとのことだ。

三輪さんは、蔡温施策成立の契機について以下のように分析する。

「近世琉球における深刻な更新性資源の劣化を転換点として、蔡温は資源保全型自給経済体制への転換を図った。その資源管理政策の根幹を成す、これらの「地域技術」と「持続的資源管理制度」の確立が、共的資源、すなわちローカル・コモンズと地域住民の「かかわり」において、非常に大きな意味を持つ歴史上の変動局面であった、というのが本稿の結論である。このように蔡温の施策を位置づけると、羽地朝秀が始動した幕藩体制への編入という近世化を蔡温が継承し完成させた、という構図ではなく、羽地改革の瑕疵である環境被害を契機として、大和社会への半永久的な従属関係といずれ決別することも視野に入れた、強固な自給体制整備を断行した人物、として蔡温の新たな側面を素描することも可能であろう。」A-P 53

「思想面では、後年、蔡温自身が隠者より「実理実用の道、有形無形共其秘旨一々不存致伝授」されたと述べているように、陽明学の影響が非常に大きなものであったことが伺える。また、筆者は別の可能性もあると考えている。琉球は薩摩を通じて江戸幕府の実情をかなり詳しく知ることが出来た。大和社会では1570年代から1670年代の一世紀、タットマンの言う「近世の略奪期」を経て蝦夷地（北海道）より南の森林の荒廃は深刻な状況にあり、その対応が重点的な政策課題になっていた。熊沢蕃山等が活躍したのもこの時代である。蔡温がこの日本の状況を他山の石として、積極的に情報を収集して実践的な対策を練っていた可能性も一つの流れとして考えておくべきであろう。以上から、陽明学の「知行合一」という思想的な背景の上に、風水地理学や大和社会の先例から学んだ技術が具体的な方向性を定めていたものと思われる。しかし、それだけでこの蔡温の森林管理技術が体系化されていたとは思えない。個別具体的な蔡温の杣山管理に関する知識と技術は、徹底的な現場主義、フィールド調査によって獲得され、完成したものであったことは間違いないだろう。」A-P 42~43

「これらは、いずれも琉球王府時代に成立した制度ないし慣習であるが、注目すべきは、為政者である王府が森林資源の安定的な確保を目的として命令あるいは奨励した、農民の側からみると「強制された」諸制度が、1972年の復帰近くまで自立的に維持されてきたという事実である。在地社会においては、「上から」の制度を巧みに利用・改変し、自らの資源管理に役立ててきた形跡がうかがえる。」

B-P 2

よくいわれるような「蔡温は中国の風水学から学んで施策を展開した」という指摘を越えた分析が

なされている。「徹底的な現場主義、フィールド調査」という表現が示しているように、沖縄独自の現実をふまえた追求をしたという指摘は重要だ。それが、「大和社会への半永久的な従属関係といずれ決別することも視野に入れた、強固な自給体制整備を断行した人物」という分析にまでつながるのだろう。

ところで、羽地施策の「資源消費型自給経済」とは異なる「資源保全型自給経済」が追求されるわけだが、明治以降は、「資源保全型」が放棄されるだけでなく、「自給経済」も放棄されていく。沖縄は、収奪対象とみなされるとか、外部依存型経済になっていくとかの事態が広がっていく。こうした事態をどう捉え、どう対応していくのかは今後の重要問題であろう。

人口が蔡温時代の数倍に膨れ上がるなかで、食糧自給などは問題外とみなされている事態、あるいは、中心産業となっている観光にしても、「資源保全型」というよりの「資源消費型」となり、資源の劣化が著しい事態、あるいは蔡温時代の非軍事的環境とは全く異なる、外部的要因による軍事的環境という事態、また人間と自然とのつながりの希薄化が進行している事態。考えるべき問題は多い。

さらに、16世紀以前の経済・資源管理をどう捉えるかについても、関心をひきだす論文でもある。また、蔡温の他分野の施策との関連についても考えさせられる。

以上紹介コメントしてきたように、検討の視野を大胆に広げてくれる論文だ。

澤田佳世「戦後沖縄の生殖をめぐるポリティクス」（大月書店2014年）を読む

2014年09月17日、09月22日

店頭でみつけた本で、「米軍統治下の出生力転換と女たちの交渉」がサブタイトルである。この時期のこれらの問題は、ブラックボックスに近い状況、ないしは推理レベルに置かれてきたが、それを明るみに出した本だ。

また、人口を扱う書籍は、統計処理を中心にしたものがほとんどだが、優れた政策分析を加えるだけでなく、数十人にのぼる当事者へのインタビューをふまえた研究は圧巻だ。そのことで、数字レベルのみならず、当事者の行為というか実践というか、それらのレベルでの解明がなされ、リアリティを豊かにもつ研究となっている。そして、政治政策レベルだけでなく、家族の中で多様なやりとりレベルでの解明が研究の特色を作りだしている。その際、ジェンダー視点で鋭く切り込んで「生殖をめぐるポリティクス」を究明している点が、本書の中心点な特質だともいえよう。

そうした研究は、人口や生殖といった問題だけでなく、恋愛・結婚などを含んだ家族形成・健康・教育・人生創造など多様なレベルの問題にまで照射するものとなっている。このように、いろいろな点で画期的な本であるので、本書の扱う専門分野以外の方たちにもおすすめしたい本だ。

いくつか紹介しつつ、感想めいたコメントをしていきたい。

1) まず政策展開についてだ。分厚い本書の終章には、要約文があるので、その箇所を紹介しよう。

「沖縄が米軍統治下におかれた時代、日本では中絶が実質的に合法化され、家族計画が国策として推進された。しかし、戦後の沖縄は、優生保護法を軸にすえた人口抑制と生殖管理の歴史を「国民国家・日本」と共有することなく、しかしながら日本の後を追うように出生力転換期を迎えることになる。沖縄における優生保護法の立法化と「廃止」の背景には、「過剰人口」を問題視し出生抑制による人口統制を企図する琉球政府と、「過剰労働力」を問題視し移民排出による人口抑制を目論むUSCARとの抗争があった。「本土並み」の経済発展と琉球民族の「質的向上」を目標に優生保護法を希求する琉球政府に対し、USCARは、中絶に反対するUSCAR婦人クラブや米国世論、および人口抑制という新たな植民地支配の技法を批判する国際世論を前に、沖縄人口に対する「軍事的中立主義」を貫き優生保護法を「廃止」した。こうしたUSCARの「軍事的中立主義」は、ヤミ中絶を戦略的に「黙認」することで、実質的には出生抑制による沖縄人口の抑制に「加担」していたといえる。USCARと琉球政府間の権力関係の非対称性は、出生力転換期沖縄の人口と生殖をめぐるポリティクスを左右した。戦後沖縄は、中絶および避妊・家族計画に関する日本の国内的潮流に与することなく、妊娠しない／出産しないための手段と権利へのアクセスが法的・社会的に制限された、優生保護法なき固有の出生力転換過程を経験することになったのである。」P332

「その後、沖縄の出生力転換は、優生保護法なき「民間」主導の家族計画への道のりのなかで展開した。その道程には、ヤミ中絶の蔓延や多産、不妊手術の多用による女性の「健康被害」を問題視し避妊普及に奔走した助産婦たちがおり、各種女性団体や職業団体の女性リーダー、およびIPPFや日本の家族計画団体の支援による沖縄家族計画協会の設立があった。沖縄家族計画協会の主要事業として受胎調節実地指導員が養成されると、指導員たちは、沖縄の長男願望や男性・年長世代の抵抗、くわえて身体に対する女性自身の無関心さとむきあい、集団指導と個別指導を組みあわせながら受胎調節実地指導を行っていく。沖縄において家族計画の知識と手段は、こうしたジェンダーや世代などの権力関係と対峙しながら、助産婦を中心とする受胎調節実地指導員、医療関係者を含む沖縄家族計画協会関係者、および各種メディアや家族・友人ネットワークを介するなかで普及していった。

こうしたなか、優生保護法なき沖縄の出生力低下は、一九五〇年代はヤミ中絶を主な出生抑制手段として、六〇年代半ば以降はその手段を徐々に避妊に転換させながら実現した。」P333

沖縄教育史に関心をもち、さらにそれに不可欠だと思っている産育史・人口史にも関心をもつ私だが、本書で示されたことは、100%新鮮な情報だ。今後の私の作業にとっても有益だろう。

ここでも触れられている、この時期の助産婦をはじめとする医療福祉関係者の尽力は並のものではない。そして、それを中心的になった女性たちが、その後の沖縄女性像形成に強力な財産を残し、今日に至るまでの沖縄女性パワーの豊かな源流の一つだといえよう。

だが、それが意外と過小評価されている。その点に関わる記述も含めて、紹介コメントをさらに続けたい。

続けて注目点を紹介しよう。

「日本の家族計画の国策化が一九五一年に開始したのに対し、沖縄家族計画協会の設立は一九六五年と、その差は約一五年となっている。一方、TFRが2.0を割りこみ「少子化」時代が幕開けしたのは、日本では一九七五年、沖縄ではその一五年後の一九九〇年である。家族計画普及開始の「遅れ」と同じ年数をもって、沖縄の出生率が日本を追って低下していることは示唆に富む。

(中略)

日本では、「適正人口」の実現に戦前は移民が、戦後は出生抑制が重用された。一方、沖縄では、戦前も戦後も移民によって人口調整がはかられている。こうした米軍統治下沖縄の家族計画と移民政策との関係性、さらに家族計画よりも移民政策が主張される背景には、戦後冷戦体制下において、沖縄が日本および米国を中心とする国際政治の最周縁部に位置づけられたことが影響している。」P334-5

「近代社会では再生産の制度としての家族に対し、国家は国民の再生産を、市場は労働力の再生産を、家族は家の継承者の再生産をその機能として期待する。しかし、日本から「切り捨て」られ米軍政下にある沖縄の家族と生殖の場に、「国民」や「労働力」の再生産は期待されていない。そこに期待される機能は、家の継承者の再生産に収斂される。沖縄の生殖の機能は、家父長制的な家族編成原理をもつ家族の領域へと疎外されていくことになる。

米軍統治という政治体制は、中絶と避妊の法的・社会的制限を通じて、沖縄の女たちの子産みの営みを規定した。米軍政下の沖縄で、女たちは中絶と避妊へのアクセスを法的・社会的に阻まれながら、厳格な父系継承主義のもと男児出産の強固な役割期待を生き抜いた。戦後沖縄の女たちは「あたりまえ」に孕まなければならない、産まなければならない、より正確には男児を産まなければならないのである。」P335

「女たちは教育・就労・結婚・出産・育児といった各ライフ・ステージで、自らの人生を交渉のうえに「選択」し多種多様な人生行路を生きながら、子産みをめぐる意識と行為を多様化させている。戦後沖縄では、女性をとりまく社会構造が変化するなか、高学歴化と被雇用者化を背景に、少産動機をもち「少なく産む」ことを実践する女たちが徐々に増加した。また、米軍統治と米軍基地の存在が、沖縄の女たちに構造的暴力としての望まない妊娠を強要した。そこには、婚姻内外での出生抑制に対する切なる需要が確認される。一方、生産年齢の男性が「不足」した戦後、強固な父系継承主義と明治民法の存続を一背景に、沖縄における男児の社会的価値は高まりを見せた。こうしたなかで、沖縄の女たちは、「男児を産まなければならない」という男児出産の性役割や「子どもをもつことはあたりまえ」とする子産み規範と交渉し、ヤミ中絶や不妊手術、避妊による出生の調整を「選択」してきたのである。」P335-6

専門外なので、正確なことを言える資格はないが、優れた分析だと思う。いくつかコメントをしておこう。

「強固な父系継承主義」の分析は興味深い。では、これがいつから始まったのだろうか。士族の場合、家譜とのからみで、17世紀末より明確な形をとってきただろう。では、士族外ではどうだったろうか。地割制下にあった農民の場合、家の子どもという要素をもちつつも、シマの子どもという要素を多分にもっていた。家や門中といった要素が高まるのは、地方役人層にあっては19世紀だろうし、一般農民にあっては、土地整理や明治民法とのからみで、20世紀へと移る時期であったのではなかろうか。

さらに、首里王府による宗教支配策の展開のなかで、母系制システムが父系制システムへと軸足を移していくことも、視野に入れなくてはならないだろう。

だから、沖縄は「強固な父系継承主義」をもともともっていたとはいいがたいだろう。時代時代の政治支配が、深く絡んでいたのだろう。このあたりも専門外ではあるが、沖縄教育史を考える上では、最低限の検討理解が必要だ。こうした点にもかかわって、澤田さんをはじめとする方々が研究に手を付けていただけると嬉しい。

また、「戦後沖縄では、女性をとりまく社会構造が変化するなか、高学歴化と被雇用者化を背景に、少産動機をもち「少なく産む」ことを実践する女たちが徐々に増加した。」は、学校教育での成功を支える家族という「教育家族」の成立と普及の問題でもある。私は、沖縄では1960年代に広がり始め、1980年代には一般化したとみている。

と同時に、本書が明らかにしているように、他府県の「教育家族」のモデルとなった核家族・専業主婦というあり方ではなく、働いて現金収入を得つつ、母親・主婦役割も展開した女性たちのありようが、沖縄における教育家族の特性を作りだしただろうことをいかに解明分析していくか、という課題にもつながっていくだろう。

その点では、117ページあたりの、沖縄では専業主婦が成立しがたい事情についての分析は興味深い。

もう一点、引用のなかの国家が「国民」や「労働力」の再生産を期待していないという叙述にかかわってだが、国家が期待しないとしても、沖縄住民が「国民」や「労働力」の類を期待した面が、「男児を産む」ことを含みつつ存在したことの検討も必要だろう。

福田晃「沖縄の伝承遺産を拓く——口承神話の展開——」三弥井書店2013年を読む

2014年07月31日

著者たちが半世紀近くにわたって、収集し研究してきた沖縄の説話・神話・伝説・昔話などと呼ばれるものを総括する書だ。専門分野が全く異なる私には、教えられることの多い書だ。いくつか

紹介コメントしよう。

「沖縄においては、公的なノロと私的なユタとは、きわめて近い性格を保有しているのである。つまり公的祭儀をつかさどるノロにも、無意識世的世界に分け入る想像力が求められていたということである。」P17

事情に詳しくないのだが、そうだろうな、と思う。そして、王府によって、この両者を分離し統括統制されてきた歴史に、かなり無理があったことが投影しているように思う。

八重山諸島の昔話にかかわっての叙述の中には、こういうものがある。

「移住された方、田舎芝居などによる話の運搬があるように思えるのです。特に気になるのが、学校の先生の関与です。明治以来の学校の先生が、昔話の類を子ども達に語って聞かせたり、積極的に昔話を語る会を作って子ども達に話させたりしておりました。(中略)八重山地方では、その時に語られた昔話が、子どもが聞いているものに、相当交じっているのではないかと感じられるのです。」P294

おそらく、20世紀前半のことであろう。そのあたりは斉木喜美子さんも研究しておられるように記憶している。昔話の歴史と性格をめぐっての検討だけでなく、戦前沖縄教員層の分析のうえで示唆が得られるようにも思う。

以下の指摘は、現在「沖縄的なもの」をめぐっての論考執筆中の私にとって、大いに共感でき、示唆的なものである。

「私は文化のとらえ方を地域の固有性という形でのみとらえるのではなく、複合の固有性という面で理解すべきだと思っています。つまり色々な文化を吸収し、それを複合させることによって、その地域なりの文化を作っていくということが、その土地が保有する固有性であると思うのです。八重山は、沖縄の中でも特にそういう色々な文化を吸収して、それを複合させて、自らの文化を築く力をもっている地域のように思われるのです。」P322-3

ここでいう「色々な文化を吸収」する例として、次のような記述がなされる。

「「ミルクとサーカ」は、きわめて神話的なものです。そして、これは韓国の巫歌にみえるものです。勿論、これは八重山に限定できるものではありませんが、この昔話は、その方からとり込んだものと思われまます。また沖縄は、すぐ隣りに古く大きな文化の国であります中国を持っている訳ですが、龍の登場する話などは、比較的多くを中国からとり込んでいると思います。たとえば、南島でしか採集例のみない(中略)「龍の昇天」などがそれです。しかし、実際の伝承においては、これは伝説化して、あの家はいったん豊かになりながら、竜の秘密を明かしてしまっって落ちぶれたというよう

に語られております。(中略)「犬聳入」については、(中略)元来この説話は、中国の華南地方の少数民族に伝承されるものでありますし、東南アジアの各地に伝播するものです。沖縄の伝承事例としては、与那国島のもがよく知られておりますが、この説話の伝播は、幾度か「海上の道」を経て南島に運ばれ、あるいは一旦本土にたどりついたものが、再度南下するなど、複雑な伝承状況が考えられるものです。

さらに比較の地域を遠くに求めてみますと、八重山の昔話には、ヨーロッパの昔話とかなり近いものも少しく見えております。たとえば、(中略)「按司と姉妹」は、いわゆる「偽の花嫁」と題されるもので、ヨーロッパで大変人気のある昔話ですが、日本ではほとんど採集例がありません。しかし南島では各地に採集例がありますから、決して書物から直接よったものではなさそうです。(中略)「捨て子の成功」や(中略)「虎島のバンサン王」なども、ヨーロッパでは多くの伝承例をもちながら、日本ではきわめて稀なものです。」P323-5

アジア各地からの吸収は想像がつくが、ヨーロッパからの吸収が見られるとは驚きである。

さらに、琉球王府が先島・奄美など各地の制圧にともなって、

「琉球王の文化政策が、漸次、その支配を島々に及び、それぞれに文化複合を生じせしめたということです。昔話の伝承も、それに応じたものと予想されます。」P328と指摘される。これまた「沖縄的なもの」の生成に関わって、重要な示唆である。

ともすると、昔話は、その地域に「昔から」伝わってきたものにとらえがちになるが、実は、多様な交流の中で生成変化発展してきたものだという把握は重要な指摘である。

琉球語賛美歌論シンポ

2014年06月30日

誘いがあって、29日沖縄キリスト教学院チャペルで開かれた会に参加した。3回連続だが、第一回の今回は、「洋楽の歌唱曲として伝来した賛美歌」というサブテーマで、興味深い内容だった。

講師は、手代木俊一さんと三島わかなさん。フロアからの発言も興味深かった。

私にとって印象的だったことをいくつか書こう。

1) 近代日本の歌唱は、欧米からもたらされた賛美歌に深いかかわりがある。というより、そこから出発したとっていいかもしれない。賛美歌をそのまま唱歌にしたものが多い。儒教関係者が支配していた当時の文部省関係者の眼をごまかすために、賛美歌であることを隠したり偽ったりさえされた。

2) 賛美歌の歌詞を和訳するうえで多くの試行錯誤がなされたが、86調の歌詞を75調に変えることでの無理が存在した。「汽笛一声」を「きーてきいっせい」と歌わせたのが、その例だ。その点

で、86調の琉歌はなじみやすい。

3) 1908年に伊波普猷は、「琉球語賛美歌」を作っている。

「うまんちゅのきみぬおみぐわや・・・」という具合に。これは、伊波普猷、新垣信一によってその後さらに工夫されていく。

会の冒頭に、「明治版賛美歌」の「たとういるむぬねらん」「とうゆむわがどうしぬ」の合唱が行われた。歌詞と曲がとてもなじんでいることを実感した。このところお会いする機会の多い神谷智子さんの素晴らしい声にも聴きほれた。

4) 「言語の土着化から、楽曲の土着化へ」(三島わかな)と進む沖縄での賛美歌の展開がよくわかった。

そのなかで、ノロからキリスト教信者になった大城カメさんにかかわる資料紹介もあった。神谷さんからうかがっていた話だ。そのなかで、賛美歌を「ウスデーク調」にしたところ「沖縄人の魂に深く迫るものがある」という箇所は、大変興味深い。

5) 賛美歌が替え歌として歌われている現状を超え、沖縄らしい新しいもの創造していることが紹介され、これまた大変興味深かった。

6) 沖縄における信者が、「本土出身者層」であったのが、「首里や那覇の旧士族」の「地元青年層」へと広がり、さらに「地元の婦女子層(地方の農村在の農民)」へと広がっていくが、この分析は興味深い研究として発展していきそうだ。

「首里や那覇の旧士族」の「地元青年層」へと広がり、明治末であり、「地元の婦女子層(地方の農村在の農民)」へは大正期のような。知識人層への広がりだけでなく、農村部への広がりがみられたことの背景分析、そしてその過程で生じた「沖縄的なもの」の展開についての分析などは、重要な研究課題になっていきそうだ。また、知識人層についての分析も重要な課題だろう。

安里嗣淳「先史時代の沖縄」(2011年第一書房)を読む

1. 石器時代

2014年03月15日

長い間、沖縄考古学をリードしてこられた著者による総括的著書だ。「先史時代の沖縄」の概観を知るうえで大変有用だ。その概観的指摘のいくつかを紹介コメントしていこう。

「これまでの資料の状況をふまえると、沖縄には旧石器時代の人と文化は存在しなかったという結

論も念頭においておく必要があるのではないか。」 P 35

「旧石器時代については不明な点が多く、沖縄における存在そのものまであいまいであるが、新石器時代の人と文化の存在はきわめて明確である。沖縄のほとんどの島々で新石器時代の遺跡が発見されているのである。新石器時代の頃の沖縄はすでに島嶼地域であるが、そこへ磨製石器と土器を製作使用する集団が海を渡ってきた。(中略) 当時の沖縄は南北琉球に源流を異にする二つの文化圏があったが、いずれも外部から新たに渡来してきた集団であった。」 P 35

これらの指摘のなかで、最近年のサキタリ遺跡などの発掘成果はどう分析評価されていくのだろうか。まだ発掘最中なので、発掘が完了するしばらく後にならないと、はっきりしたことは言えないだろう。といっても、新発掘が続くそうなので、定説といった姿になるのは、何年後だろうか。

「沖縄諸島新石器時代は約六五〇〇年前に遡る歴史を有している(中略)

沖縄諸島に人々が居住活動を始めた頃は未知の島々への渡来活動の時期で、先住地の文化をほぼそのまま持ち込んでいる渡来期。

そしてある程度適応に成功すると、先住地の文化をもとにしながらも新たな土地で個性的な独自の文化を生み出してくる適応期。

さらにいっそう適応、定着が進むと周辺各地や近隣の島々への拡散が活発になり、沖縄諸島のほぼ全域に展開するとともに、より独自性の強い文化が形成されてくる拡散期。

これがやがて人口の増加と集落の発達をうながし、サンゴ礁における生業活動の活発化とともに、外部世界との貝交易活動をおこなうようになった発達期にわけてとらえることができる。」 P 36

上に紹介した「渡来」→「適応」→「拡散」について

「それを実現したのは、かれらが海洋民であり、島々の間を自由に往来する航海技術をもち、海を「回廊」として活用していたからである。」 P i

サキタリ遺跡では、貝器の発見が注目されたが、後年の貝の活用にかかわっての、次の指摘も注目される。

「特に貝殻を利用した製品が豊富に見られることから、生業の基盤とあわせてかれらの暮らしのスタイルは「サンゴ礁文化」と称することができる。

日本が弥生時代の頃には、沖縄産大型貝が腕輪用素材として珍重され「貝の道」の交易ルートが開かれた。それは九州弥生人の来訪に応える「対応型・受け身型」の交易であり、対価として鉄器を得るなど一定の影響を受けてはいただろうが、先史沖縄の社会・経済生活に変革をもたらすものではなかった。かれらは弥生社会の最大の特質である稲作を導入しなかったのである。しかし、縄文時代には断続的な交流にとどまっていた九州との関係が、弥生時代並行期の貝塚時代後期にはかなり接近し、共通の情報圏としての基盤が形成されていったことであろう。

ところで「海の回廊」が効果的に機能していた島嶼社会ではあったが「海の障壁」という、海洋のもつもうひとつの面も作用した。沖縄島と、宮古島の間には横たわる海の障壁を越える航海技術や動機、冒険心を、南北の先史人たちはもっていなかったのである。」 P ii

ここに書かれた「サンゴ礁文化」とか、「対応型・受け身型」の交易とかにも注目したい。海を隔てた島・陸に出かけて行って展開する積極的的交易は、グスク時代を待つことになるのだろう。

2. 先史時代のムラ（集落）

2014年03月19日

当時の集落立地についての叙述は、とてもわかりやすい。

「沖縄貝塚時代前期つまり縄文時代後期並行期までは、沖縄では集落は形成されていないようです。既に日本では縄文時代中期には大きな集落跡が発見されていますが、沖縄の場合には、縄文時代の後期並行期においてもなお集落を形成するに至っていません。

次に、沖縄貝塚時代中期、大まかに縄文時代晩期に平行する時期ですが、この時期には、丘の上の広い範囲に遺跡が形成されています。台地があって、その崖に近いところの平坦地、そこに複数の住居跡が見つかります。形態としては竪穴式住居と配石住居です。（中略）沖縄における集落の出現は、二千数百年前、二五〇〇年から三〇〇〇年ぐらい前の間に登場するのかなと理解しています。」 P 92-3

「各地の海岸は湾入と小さな突端部（岬）の繰り返しです。その湾入部には一般に砂浜があり、そこには古いムラがあります。ああいう集落が、先史時代後期の原風景に重なる立地です。次のグスク時代には農耕社会として内陸部の田畑開発を進めますので、海浜のムラは主要なムラではなくなると思います。グスク時代以降にあらためて海浜集落が形成されるのだろうと理解しています。

先史時代後期の海浜集落（ムラ）の前面には、サンゴ礁のラグーンが展開しています。これは非常に重要なことで、海浜のムラと前面のサンゴ礁のラグーンはセット関係になっています。ひとつのサンゴ礁湖にひとつの湾入部砂丘ムラが存在しています。前面のイノーは、その海浜ムラの生業の場、いわば縄張りです。後期遺跡の分布にはそういう状況が見られます。沖縄の砂丘は、片側に小さな岬があって、そこからカーブをして湾入し、向こう側にも岬があって、この湾入したところに砂丘があるというのが基本です。そのような地形の繰り返しです。そして、ひとつの砂丘に同じ時期のふたつの貝塚があるということは、ほとんどありません。ですから、砂丘プラスサンゴ礁の海が彼らの生活圏だというふうに理解しないといけないと思います。」 P 94-5

「ムラの居住地は海とのかかわりを視野に入れながら、湧水や小川に近く見通しのよい地点にするなどの適応戦略のもとに選定された。」 P iii

「水源は必要不可欠ではあるが、それへの近さよりも台地の上や微高地という地形であることが、居住地選定にあたっての優先度が高かったことを示している。それは周囲がよく見渡せるという安全

性や崖下に比べて明るく湿気が少ないという快適性を求めての選定であろうと推定される。それを満たした上で、それに次ぐ条件が水源に近いことであったと考えられる。それは、台地、微高地であっても中央部にはほとんど居住地（遺跡）は分布していないこと、非砂丘系の遺跡の多くは崖下の泉を控えた台地縁辺部に形成されていることによる。」P80

こうした記述を読むと、私が住む南部の海岸地域は、ムラ立地に絶好の場だったようで、貝塚などの遺跡が多い。ラグーン（イノー）があり、見通しもよく、カーもある我が家近くにも、新原貝塚、百名貝塚などがいくつもある。私自身が住む中山集落にはないが、新原貝塚に近すぎて、「ひとつの砂丘に同じ時期のふたつの貝塚があるということは、ほとんどありません」というわけだろうか。

3. グスク時代

2014年03月23日

紹介コメントの最後に、先史時代からグスク時代へと移る時代についての記述をいくつか紹介しよう。

「貝塚時代後期に九州弥生人との交流があった（中略）これによって形成された情報ルートの伝統に沿って、数世紀後こんどは中国唐代の銭貨「開元通寶」が奄美から沖縄諸島にかけて流布する動きがおこり、それは八重山諸島にまで達した。遣唐使との関連を指摘する説もあるが、私は海洋商人の活動を想定している。」P iii

「開元通寶」をめぐっては、定説に集約されるほどには考古学資料が出ていないようだ。今後の調査研究の進展を期待したい。

グスク時代をめぐって、以下のように概括的な提起がなされている。

「① 拠点としてのグスクが造営された時代

（中略）グスクと呼ばれるこれらの地形と建造物の構造は、これまでの新石器時代終末期の海浜における生活形態とはかなり異なる。これは単なる集落ではなく、砦としての機能を確保するために高い位置を選んでいる。グスクは石垣をめぐらすものもあり、多くは敵との戦闘に備えた防御や反撃のための地形選択、地形造成、城壁などの構造物造営がなされている。それはやがて大型化し、館の基壇と庭、アーチの城門などを備えるようになる。（中略）

② 鉄の道具が普及した時代（中略）

③ 農耕・牧畜が普及・定着した時代

グスク遺跡から米・麦・牛馬骨が検出される。農耕と家畜が普及・定着していたことを示している。すべて外部から導入されたものである。自然の再生産力に頼る暮らしから生産経済へと転換し、琉球史上の大きな社会経済的画期となった時代である。

④ 内陸部の開発が進んだ時代

農耕の普及・定着にともなって耕地と水利への需要が高まり、これまで狩猟と植物採取の場にとどまっていた内陸部が耕地として開発されるようになった。耕地や水源の占有は土地の所有、領土を生み出していくことにつながったと考えられる。

⑤ 階級社会へ転換し、王国形成へと進んだ時代 (中略)

⑥ 海外との交易が展開された時代 (中略)

⑦ 琉球圏が形成された時代 (中略) 」 P 47 - 50

グスク時代とそれ以前の時期との間の大変化、ないしは段差の解釈についての仮説的なものに出会うが、まだ確定的にはなっていないように思う。考古学研究の進展に期待したい。

「一三七二年の公的関係成立以前の琉球列島の遺跡から出土する中国産文物は、九州を主とする日本の勢いが琉球に及んだ時に、その流れにのって間接的にもたらされたものがほとんどである。

一三七二年に中国の使者が琉球に対して朝貢を促したのは、このような状況を整理して、中国を中心とする秩序を構築したいとする動機によるものであろう。しかし、公的関係成立後も日本の文物の招来は続いていることから、その関係はきわめてゆるやかなものであったと考えられる。一方、日本の側も琉球が中国との朝貢関係をもつことに異議を唱えるほど、この地域を掌握していたわけでもなかったのだろう。」 P 204

中国・日本と琉球との関係についてのこのような記述に注目したい。

そして、このところマスコミ話題にしばしばなる「海底遺跡」については、次のように大変シビアな評価を下している。

「八重山諸島の与那国島近海に「海底遺跡」があるということを主張する人々がいる。事實は、岩石の性質や自然の作用によって形成された、平面構成をもつ幾何学的な巨人地形を人工とみなしているだけのことである。あれこれの思いつきの想像によって解釈、説明し、あるいは著名人も現場を訪れたなどという権威主義的姿勢はもはや科学的方法とはいえないので、相手にする必要はない。」 P iv

沖縄の生成にかかわる研究は大変興味深いので、このブログでいろいろと読みコメントしてきた。これまでほどのテンポでないにしても、これからの続くことだろう。

沖縄音楽教育史

1. 芸大院授業で発見し考えたこと

2014年01月16日

昨年9月からスタートした沖縄県立芸大大学院での「芸術表現比較総合」授業は、いよいよ最終盤を迎えた。授業と言っても、私がレクチャーするというよりも、ゼミ的な流れで進んでいる。人数も私を含めて3名であり、お一人はすでに大学で教えられており、研究会出席的な形である。

芸大院の博士課程では、在籍院生の希望をもとに設定される授業があり、私が御指名の榮譽に輝いたわけだ。音楽素人の私だが、「沖縄県の教育史」（1991年思文閣）を発刊したことをきっかけにして、沖縄音楽教育史を追究したい受講生の希望に合ったのだ。

「沖縄県の教育史」には、様々な文化関連のことを書いたが、その一部に音楽関連のものが含まれていた。といっても10数箇所ほどだ。だから、音楽教育史としては、入り口の前を通りかかった程度であり、沖縄音楽教育史作業は、その後に託されていた。その中で、この授業に参加されている方々が、本格的な沖縄音楽教育史に着手なさったというわけだ。

ということで、授業は、まず私の「沖縄県の教育史」の検討、そして、参加者の博論・修論の検討、沖縄教育史における戦前と戦後の関係についての私の提起の検討、中内敏夫「新しい教育史」の検討、沖縄音楽史の史料検討という形で進行している。

そのなかで、受講者だけでなく、私にとっても、発見することが大変多く、今後追究していきたいことが次から次へと生まれてきている。とはいうものの、年齢上のこともあるし、そもそも専門外分野なので、本格的追究は遠慮するしかない。

それでも、追究したいと思う事を並べていくことは許されるだろう。それらを、これからの沖縄音楽教育史を担う若手研究者を期待することも許されるだろう。

ということで、次回以降、連載で書き綴っていくことにする。

ところで、私が大学院の博士課程を対象に授業担当するのは、ほぼ10年ぶりのことだ。中京大学大学院で「健康科学セミナー」と言う科目を、数年間にわたって担当した時のことだ。その際も、「健康教育」領域を中心に、多様な問題についての討論を展開した。その成果を受講生と共著の形で、大学紀要に執筆したこともあった。受講生たちは、今では大学や中学高校で教員として活躍している。

こんな風、異分野の授業を担当することは、私自身にとっても、大変触発的だ。

それにしても、この間、授業準備も兼ねて音楽関連書、とくに沖縄関連書を何冊も読み、いろいろと学び発見するところが多いという副産物もあった。それらのいくつかはこのブログでも紹介した。

私は音楽専門ではないが、学校内外の文化活動については多くの関心を持ち、実践創造に関与し、1970年代末から90年代初めにかけて、いくつかの論文を書いてきた。今回の授業を契機に、久々にちょっと書いて見ようか、という気分にもなっている。まだはつきりしないが。

2. 音楽史・音楽教育史の独自展開へ

2014年01月19日

沖縄音楽史・沖縄音楽教育史のこれまでの研究はしばしば、王朝史・統治史・施策史のなかの一分野という形で、政治史を軸にした一般史の応用として展開してきたと思われる。

沖縄音楽史や沖縄音楽教育史よりも、研究蓄積がかなり多いと思われる沖縄教育史については、それ以上にそう言える傾向が根強い。1991年刊行の私の「沖縄県の教育史」もその傾向を多分にもっている。執筆当時、教育史として独自のものを追究したいという志向はあったが、余りに未熟だった。その記述に含まれている文化史・音楽史・音楽教育史にかかわるものは、なおのことその傾向を色濃くもっている。政治史・一般史の応用と言うことに加えて、沖縄教育史の一分野としての沖縄音楽教育史という傾向さえ持っていたためである。

こうした傾向は、時代区分などにあらわれやすい。たとえば、グスク時代—近世—近代という時代区分、あるいは、琉球王国の成立—薩摩支配開始—琉球処分などを区切りにする時代区分は、一般史政治史として有効であるにしても、沖縄教育史、沖縄音楽史、沖縄音楽教育史としては、未熟といえよう。無論、教育政策史、音楽政策史、音楽教育政策史なら妥当であろう。

無論、教育にしても音楽にしても音楽教育にしても、政治・政策に強い影響・支配を受けているのは確かだ。そうだとすると、音楽自体の歴史を描くとするなら、不十分といわざるをえない。

そうではなく、教育史、音楽史・音楽教育史を、それ自体の独自展開として描いていくことが求められる。その点で、三島わかな「近代沖縄における洋楽受容の歴史的研究——伝統の再編をめぐる」（沖縄県立芸術大学博士論文 2014年単行本として刊行予定）は、重要な問題提起を含んでいる。その一部を紹介しよう。

「音楽観にもとづく二区分

音楽観の推移に着目すると、近代沖縄社会での展開は以下の二期に区分できる。

前期：「音楽外的側面」による評価期（琉球古典音楽）	明治 35(1902)～明治 45(1912)年
後期：「音楽内的側面」による評価期	大正元(1912)～昭和 20(1945)年
後期-1（琉球古典音楽）	大正元(1912)～昭和 20(1945)年
後期-2：（八重山音楽）	大正 11(1922)～昭和 20(1945)年

これらの区分は、ひと言でいえば「前近代的価値観」から「近代的価値観」への推移を示したものである。ここで注目される点は、「音楽外的側面」に視点をおいた評価が前期の特色であることに対して、後期の特色は「音楽内的側面」に視点をおいた評価へと、音楽を評価する際の基準がドラスティックに変化した点にある。これを言い換えると「音楽外的側面」を重視した態度は、前近代的価値観に大きく支えられていたとすることができる。これに対して「音楽内的側面」を重視するようになった態度とは、すなわち近世の身分制度や近世から引き継がれた社会通念を近代人が乗り越えた態度である（過渡的な態度も含まれる）。したがって、そこには事実上の近代的価値観への移行を読みとることが

できる。(中略)

沖縄での事例をふりかえってみると、(中略) 宮良や山内が沖縄の伝統音楽を五線譜化していった基礎的な作業の積み重ねがあった。これは前述した「直接的な摂取」の段階を経て、そこで獲得した方法を自文化に応用した行為であることから、すなわち洋楽受容の「反転現象」として受けとめられる。そういった「反転現象」としての五線譜化の作業ののち、五線譜化された沖縄の伝統音楽の実態を分析的にとらえ、その特性を解明し、ひいては(中略) 山内の実践のように、琉球音楽の音階論として新たに体系化し、理論化する行為があった。体系化や理論化という行為は、洋楽受容の最終段階としての「クロスオーバー」の段階である。

以上のような諸手法をたずさえたことによって、近代沖縄人は音楽の周辺的事象を根拠として音楽の価値を論じるといった旧来の水準から脱し、音楽そのものの特徴を根拠としてその価値を論じることのできる水準へと移行したのだった。これを言い換えるならば、科学的な知識や技術ならびに洋楽にもとづく諸能力が獲得できないうちは、音楽の周辺的事象である「音楽外的側面」に対するアプローチでしか、音楽を評価することができないということになる。音楽的な価値観の形成や推移は、一見、無関係にもみえる科学的知見や技術の進歩と、ひじょうに密接な関係にあったことを指摘しておきたい。そして、洋楽にもとづく諸能力を獲得した沖縄人は、新たに楽理的な探究心を高め、そこからまた新たな展望をひらくことができたのだった。ただし、その境地に至った沖縄人は、山内ただひとりだった。

したがって明治末に至るころまでには、沖縄での洋楽受容が「直接的な摂取」の段階(唱歌の体得、洋楽理論や知識の習得)を終え、そして大正期以降は「反転現象」の段階(伝統音楽の五線譜化)に到達していた。さらにいえば、昭和10年代なかば以降の山内は唯一「クロスオーバー」の地平(琉球音楽の理論化)にあったと言える。」P253-4

沖縄音楽史研究・沖縄音楽教育史研究において、新たなステージを作り上げる貴重な問題提起といえよう。

3. 音楽・教育・音楽教育の独自検討 2014年01月23日

前回紹介した三島論が示すように、音楽においては、約100年前に重要な歴史的踏み出しがあったわけだが、沖縄教育においては、対照的に「外的側面」に主導される状況が、いまだに続いている。その象徴としての「本土(他府県・日本)」に追いつけ」といった発想が、標準語教育(方言矯正教育)、そして学力テスト問題などをめぐって繰り返し登場してくる。

そこには、「本土」という「外的性格」を多分に潜ませ、外的標準に合わせる思考があるし、点数と言う形での量的視点が強力で、質的視点が希薄なことに特質が見られる。また、「追いつく」対象として、アジアや欧米などの世界の多様な動向、つまり「本土」以外の視野が希薄なこと、さらに重要なことは、「追いつけ」以外の発想、とくに「創造」という発想が希薄なことがある。

教育以外の政治経済社会の諸分野にもこの特徴はみられるが、教育界は際立って強い。対照的に、音楽の世界では、独自の世界創造の歴史的蓄積は大きい。その両者がかかわる音楽教育の世界では、両者とは微妙な差異をみせている。

こうしたことを考えるとなお一層のこと、教育史、音楽史、音楽教育史における、以上提起した諸問題の探究が重要性を帯びてくる。

ところで、独自と言ってきたが、独自追究にも多様さがある。と同時に、独自というけれども、音楽と他のものとの境界が鮮明だというわけでもない。教育と他のものとの境界も鮮明だというわけではない。〇〇と音楽との関係、〇〇と教育との関係と言う形で、あるいは、△△と言う角度から音楽とか教育とかを検討するということになり、その論じ方にもとづいて、音楽、教育、音楽教育が定義される。その意味においては、本質主義的ではなく、構成主義的なものである。

重要なのは、政治支配といった他のものの道具として、音楽・教育・音楽教育が扱われることに對抗し、音楽・教育・音楽教育の側から、独自の視点をもって論じるという、自主的思考を強調する点である。三島論文を例にとれば、明治国家の統治の道具として音楽を活用すると言う「音楽外的」なものから、「音楽内的」なものへの転換、音楽を自主的に追求する動向に焦点をあてたことに貴重な問題提起のひとつがあるのだろう。

近代日本でいうと、政治支配の道具として音楽とか学校が使われてきたことを批判的に見て、政治から相対的に独立し、「音楽独自」「学校独自」の世界をいかに創造していくかが、重要なテーマとなる。

こうしたことを踏まえて、研究は、音楽と〇〇、教育と〇〇、ないしは、△△という視点からの音楽・教育の検討という形で、音楽・教育を検討していくことが、有効なアプローチとなるろう。

例をあげよう。

祈りとしての音楽・・・シマにおける祈り（癒し）と結合した音楽と、個人の祈り・癒しとしての音楽の関係性（あるいは独自性）

学校におけるエイサー、歌三線の教材化の音楽教育史的意義

工工四とか五線譜とかいった楽譜の成立・変化と音楽表現との相互関係性、そして音楽教育史とのかかわり

学校における教育と学校外における教育との関係性の史的变化

親による子育てと制度としての教育との関係性・・・教育親（教育パパ・ママ）の成立とその性格

音楽家族の成立変化と音楽教育とのかかわりの史的検討

4. 音楽への2組の対アプローチ 生活と支配 集団と個人 2014年01月25日

ここで、音楽への2組の対アプローチを考えてみたい。まず、次の1対がある。

1) 人々の生活生産、祈り、楽しみとしての音楽

人々が暮らしのなかで、音楽自らの気持ちを表現し、音楽それ自体を楽しむという流れ

2) 社会支配（統制）としての音楽 政治に使われてきた音楽

そして、1)と2)の両者の間にある、マスメディア・学校を舞台・媒体とする音楽がある。また、1)と2)とは複雑に絡み合っている。両者のせめぎあい・からみあい・ゆれが出てくることが多い。とはいえ、2)が主導的だろう。

もう一つの1対のアプローチ。

3) 共同体をはじめとして、集団（組織）のなりわいとしての音楽

4) 個人のなりわい[教養・娯楽・感情表現（含む癒し）]としての音楽

これらを組み合わせると、以下のような研究テーマ例が出てくる。

- a. 3)のシマ・マツリの音楽のなかから、4)の個人の楽しみとしての音楽の分化成立を史的に検討する。
- b. 1)3)と関わって、＜音楽サークル、合唱団＞を史的にどう位置付けるか。
3)のなかにも、コミュニティとしての音楽と、アソシエーションとしての音楽とがある。すっかりとはわけられないだろうが、この視点からの検討も興味深いものがある。学級合唱とクラブ合唱の違いの検討もその一つだろう。
- c. 1)と2)とがからみあう、マスメディア音楽の歴史的展開の研究
それには、ラジオ視聴、コンサート・音楽発表会参加などがある。
- d. 1)と4)がからむが、教養・趣味としての音楽の成立の史的検討。そして、そのことへの2)の関与
- e. 2)に関わって、学校音楽の史的検討。
にもかかわらず、学校音楽に存在する1)の要素についての史的検討
- f. 3)と4)にかかわって、独奏独唱と合唱合奏についての検討
- g. 3)シマ行事にかかわる音楽の集団表現における年齢階梯組織の意味 子ども 若者
そのことと1)4)とのかかわり

5. 音楽とスピリチュアリティ（祈り、癒し、宗教）

2014年01月28日

前回述べた問題には、「音楽とスピリチュアリティ」がかかわる。というのは、音楽は祈り・癒しと結びついているし、それには集団レベルと個人レベルとがあるからだ。

たとえば、シマでの祈りは音楽的な性格が強い。また、エイサーも史的にみると、宗教的な色合いが濃い。自然の音に耳を澄ます、などということもスピリチュアルな要素を多分にもっている。

そうしたスピリチュアリティ感覚・行為の維持継承には、無意識だとしても教育的営みがあり、音楽教育史的な検討があつてよいだろう。というよりも、教育的なものが、スピリチュアリティ・宗教的な様相を強く帯びつつ展開され、そこで音楽的なものが多用された時代が長く存在したことに注目して探究をすすめる必要がある。

拙著「沖縄県の教育史」では、「宗教と教育」に絞ると、次のように何カ所かに記述した。

- ・近世・近世以前における寺院における教育。文字・大和学問。久米村における「儒教教育」
- ・共同体におけるカミゴトと産育習俗にみる教育機能
- ・神治から徳治へ（P 46）の移行の教育史的意味の検討（第二章）
- ・儒教における家族。家譜・門中の重視。共同体からの移行。
- ・神治の基盤になるものは縮小しただろうが、排除されてはいないから、併存状況があつたろう。
- ・ノロなどの女性祭祀者が儒教をどう受け止めていったか。
- ・地方役人層における展開。士族よりやや遅れての移行と推理される。
- ・近世末期からの浄土真宗布教と教育 P 128
- ・明治期以降の、キリスト教・仏教布教と教育。日曜学校など。 P 240
- ・宗教組織による学校設立
- ・共同体の神・ノロ・ユタと国家神道とのせめぎあい P 240

「国民教育」「国民統合」のイデオロギー的機能の推進ともからむ。

これらに加えて、次のような検討すべき課題・テーマもあるだろう。

儒教イデオロギーと天皇制ナショナリズムというテーマの追求。明治期の儒教イデオロギーは、主として修身に象徴される学校を媒介としたものに転換していく。それ以前は、王府一地方役人層という経路であつたが。この両者の内容・方法・担い手の差異についての検討が必要。

これらは、明治民法の家制度ともからむ（P 224）し、門中ともからむ。と同時に商品経済浸透ともからむ。その点では、たんに保守的なものというよりも、時代を作り上げた側面すら存在するのかもしれない。それは風俗改良運動とも結合し（P 227）、沖縄独自のものを弱める動きとも連動する。女生徒の沖縄芝居見学禁止など。

修身授業や徴兵教育における展開など、儒教イデオロギーと天皇制ナショナリズムとが結合したものの展開について一層深める必要がある。

現代人がスピリチュアリティに強い関心を持ち、そのなかで音楽が重要なものとして位置付けることをしばしば見るが、それらと、以上の歴史的検討とをかかわらせた研究課題も存在していよう。

6. 創造創作的性格と音楽教育

2014年01月31日

音楽における教育を検討する際、音楽の伝達継承と音楽の創造創作という二つの側面を見る必要がある。

学校のなかで、他教科に比べての音楽の特質の一つは、美術などの芸術関係教科についていえることだが、創造創作的側面が強いことに見られる。実は他の教科でもそういう要素があるが、芸術関係教科では、そのことが誰にでも分かるように見えやすいとも言える。

明治期にスタートした学校唱歌は、伝達継承的側面を前面に押し出した注入訓練として始まったが、音楽特性として創造的側面を必然的に伴うことに直面する。指示通りに歌うにとどまらず、生徒が自分なりの自己表現をすることを介して、注入訓練の結果も表れてくるからだ。こうした「唱歌」のみならず、音楽演奏においては、指示通りというわけではなく、創造とまでいかないにしても再創造的要素が高いのだ。

増井愛華「近代沖縄における唱歌教育の実態」は、軍歌に象徴される注入訓練的なものに止めないで、子どもたち・住民たちが持っていた音楽文化とからませる取り組み動向に触れている。宮良長包・山内盛彬・野里千代達が、大正・昭和前期に試みたことも、そうしたことと関わる。

だが、創造創作的契機に自覚的でない傾向が広くみられる。

たとえば、歌三線の安富祖流の祖安富祖正元による「歌道要法」は次のように述べる。

「折ふしの情を心におもふてうたへば、おのづからその情、音声に彰る」「歌を学ぶの道他なし、只放心を求るのみ。」「こころを歌にとどめて、全くうたひ終れば、おのづから其妙いづるものなり。これ歌をうたふも要法なり。」と述べ、音楽の創造的契機に間接的に触れている。

と同時に、「師伝を受る事、辛勞しみづから工夫を加へて、漸次に増長して終に其奥を得る。是下学上達の理なり。」というように、「師伝を受る事」ということで、指示（指導）が存在しているのだが、それを指導論として意識化せず、学習論として書くことに特質がある。事実と意識の乖離とでもいいえよう。

こうした特質は、他の音楽分野でも一般的であり、長い期間続いている。

それは、指導論の意識化の問題としてだけでなく、音楽教育において、伝達継承の契機が基本とされ、創作創造の契機の意識的 pursuit が希薄であることを暗示している。

こうしたことは、現代においてはどうなっているだろうか。音楽指導者のなかに、楽譜通りに演奏することを重視するタイプと、生徒の自主的表現を重視するタイプとを見かける。実際は、両者を並存させ、両者の間を揺れる例が多いようだが、しかし、この両者の関係に意識的であることはなお少ないように思われる。

こうした問題がどのように展開してきたのか、史的に検討することは、音楽のみならず、教育とくに学校教育全般に対する、新たな問題提起をするという点で、重要性をもつ。

7. 音楽指導者

2014年02月02日

音楽指導者には、多様なものがある。だが、音楽指導をしているという意識を持つ人は多くはない。そこで、事実上、音楽指導をしているという人を含めて考えたい。

1) まず、子守唄をはじめとする親子などの親族関係の生活・産育のなかでの音楽にかかわるものがある。また、祈り・祭りなどシマ行事のなかでの音楽がある。また、シマでの多様な人間関係の中で歌われるものがある。童謡もそうだろう。また、歌掛けを含め、若者たちの歌がある。

そうしたところで、プロ意識をもって指導を行う人がいるわけでないにしても、そうしたことに長けている人が、積極的に指導をすることがあろう。

そうしたことにかかわる史的研究は、未開拓分野だろう。

2) 施策統治手段として音楽が活用されたことはしばしばだ。戦前の軍国主義教育のなかでの行事・集団訓練などでの音楽の活用で、その典型例の一つである明治期の「唱歌」は、音楽そのものを楽しむというよりは、施策統治手段そのものであった。時には、音による航空機識別のために絶対音感を養う役割を音楽教育がになうことさえあった。

そうした所では、子どもにしろ大人にしろ音楽志向の強弱・嗜好の差異にかかわらず、全員が音楽指導の対象となった。その指導役割を担う多くは、学校教員であった。そこでは、音楽は伝達継承原理に基づく訓練として展開された。そんななか、音楽指導を忌避しようとする動きさえ生まれることもある。その指導は、強制に限りなく近いし、創造創作的側面が著しく縮小する。

そうしたところでの学校教員の指導についての史的研究が求められる。

また、施策統治への対抗として展開された社会運動などでも、音楽が活用された。それも検討対象となろう。

さらに、近代学校以前に、そうしたことがあったのかどうかも含めた研究が求められるだろう。また、戦後において今日に至るまでも、そうした事例が登場することがある。そうしたことを視野に入れた史的研究が求められる。

3) 高収入を伴うかどうかは別にして、「業」＝職業として音楽指導を担う人が存在してきた。

近世以前においては、音楽芸能表現を任務として行うものへの指導の役割を担う者がいた。御座楽などではそうだ。

と同時に、近世では、士族の教養として音楽を嗜むこともあり、それを指導する人の存在が考えられる。その場合、「業」としておこなったのかどうか、などを含めた検討が必要だろう。

多様な海外文化との接触交流、海外からの文化技芸保持者の移住、海外での沖縄人の技芸文化の修得などかかわって、そこでの技芸修得はどのように行われたのだろうか。たとえば、「見よう見まね」「ワザを盗む」「徒弟訓練」といったものがあつたらう。それらは、主として、学習修得しようとする側の「努力」で行われたであろう。

しかし、中には意図的な文化知識技芸の伝達、あるいは学習者の訓練として、指導意識の萌芽的なものの発生がありえたかもしれない。

その点では、当時の中国における教育機関の展開、あるいは日本の寺院などにおける教育的活動のありようが、これらにどのような影響を与えていたのか、も検討の対象にしてもいいだろう。

このような海外の人からの修得ではなく、沖縄人→沖縄人の関係で、教え・学びが成立した際には、後継者育成的意識が強まろう。ウチナーグチの書き言葉表記などに見られるように、文化創造的なものがある場合には、とくにそうであろう。それは研究創造的な性格が強いが、そこから教育的活動が分離していったらうが、その意識化はどうなっていたらうか。

また、こうしたものが、家業・家学として、親から子への文化技芸の伝達訓練として成立した場合は、それらはどうおこなわれたのだろうか。家譜にそのようなことにかかわる記述が存在するだろうか。

近代になると、音楽の多様化大衆化が進行し、教養娯楽として音楽を楽しむ人口が激増する。また、とくに戦後に著しいが、教養娯楽の場合と並行して、できればプロとしての成長を志向して、音楽教室・音楽研究所・音楽系学校・学科に通う人が増加する。そうしたことを指導する人も激増する。

それらでの指導の実像、さらには指導意識の実像についての史的研究が必要だろう。また、それらにおいて、沖縄外からの影響と沖縄独自の展開などの検討も必要だろう。

8. 学校音楽と学校外音楽との緊張と交流 2014年02月06日

本連載で繰り返し紹介コメントしている三島論文では、連載第二回に紹介した沖縄音楽の時代区分とは別に、音楽教育にかかわる時代区分を提起し、両者の時代区分にはズレがあることを指摘しつつ、重要な問題提起をしている。

まず、音楽教育の時代区分だ。

「唱歌・音楽教育の実態にもとづく四区分」

「前期：唱歌教育の時代

第1期：唱歌教育の揺籃期 明治37(1904)以前

第2期：唱歌教育の進展期 明治37(1904)～明治44(1911)年

後期：音楽教育の時代

第3期：社会音楽の確立期 明治44(1911)～昭和5(1930)年

第4期：郷土教育の実践期昭和5(1930)～昭和20(1945)年」 P 249～

このなかの、第1期から第2期へ、にかかわって次のような指摘をする。

「明治期の学校教育では、近代国家にふさわしい国民づくりのための一つ的手段として「唱歌」が教授されたので、そこでは徳育の涵養や標準語の獲得が教育の主眼とされた。したがって、日本各地のそれぞれの地域が育んできた歌（伝統音楽）などは、明治期の（唱歌）教育の手段にはなり得なかった

のである。その後の近代化のなかで、一定の水準の国民づくりが達成され、その一方で「音楽」という用語そのものが近代日本で概念化されていったことと連動して、学校での唱歌教育も変質した。それが、前期と後期を区分するポイントとなる明治末だった。このように考えるならば、「唱歌」という用語がさす範囲は、近代化当初の教育界の理念に根ざしたきわめて限定的なものであり、それに対して、明治末に概念化された「音楽」という用語のさす範囲は幅広く、そこには「唱歌」はもちろんのこと、日本そして沖縄の伝統音楽も包括されていたと考えられる。」P249

第3期については、こう書かれる。

「ここでいう「社会音楽」とは、日本の各地の人々によって生まれた音楽のことをさしており、前述したように人為的かつ政策的に作られた「唱歌」とは対極のものである。教育界において「社会音楽」の確立がめざされた時期には、同時に「地域性」が重視されはじめ、そういった態度のもとで日本各地の人々のアイデンティティの形成が促された。したがって沖縄では第3期以降、園山の実践を皮切りとして山内、與那嶺、金城などの学校教員たちが地元の伝統音楽である琉球古典音楽に大きな関心を抱くようになり、そして彼らはみずからの教育論や音楽論においても、琉球古典音楽をさまざまな方法でとりあげた。さらに琉球古典音楽は、教育関係者が主催した「沖縄音楽会（第二期）」のプログラムにも導入されるようになり、その際の演奏は、従来の「琉洋調和楽」スタイルのように改良されることなく、伝統的な演奏様式を重んじたものだった。」P252

第4期は、次のように分析される。

「第3期に再編された琉球古典音楽につづいて、第4期には宮廷音楽以外の種目、すなわち沖縄各地の「民謡」が再編されることとなる。つまり近代沖縄の教育界では、地元の伝統音楽の再編が二段階に分けておこなわれたのだった。これを言い換えれば、最初の再編が「宮廷音楽」であり、その次の再編が庶民の音楽としての「民謡」だった。それは、現代いうところの「古典音楽」と「民謡（民俗音楽）」というように、伝統音楽を二分する二種類の概念形成につながる現象であろう。」p252

冒頭に述べた、二つの時代区分のズレに関わっては、次のように指摘される。

「時代区分上の相違点やズレの原因は「学校教育」と「一般社会（民間の動き）」という二つの場で、どちらが時代をリードしていたかといった両者の関係性の推移として理解されよう。というのも明治期の学校教育は、一般的な社会（俗的なもの）から距離をとり、「教化」や「啓蒙」の機能をもつものとして、かなり特異なスタンスにあった。その意味で明治期については、学校教育が明確な意志のもとで全面的に沖縄社会を方向づけ、牽引していた時代だったと総括できる。したがって当時、学校教育現場における唱歌の教授をはじめ、そこで教授された「歌う」という行為そのものを身体の中刻み込ませ、そして唱歌という文化そのものを社会に定着させ、普及させるための機能が国家的祝賀の

場であり、さらには証書授与式や運動会などの学校行事だったと考えられる。(中略)これらの演奏の目的を極言すれば、沖縄人を日本国民として「教化」することだった。これを洋楽受容の観点から捉え直すならば、洋楽の「直接的な摂取」の段階にあり、そこではもっぱら近代的な(均質の)身体性の獲得がめざされた。

ところが、明治末以降の展開においては、学校教育がリードしたそれまでの時代から一転して、学校教育が一般社会に歩み寄り、さらには一般社会の動向に学校教育のあり方が後押しされるまでになった。そのことを端的に示しているのが、唱歌・音楽教育の実態に着目した時代区分上の第3期(1911-30)である。したがって第3期以降になると、学校が主催した演奏会プログラムにも琉球古典音楽が導入されるようになったが、その前提として、明治30年代なかば以降の沖縄の旧支配層が、琉球文化に対する自意識をすでに覚醒させていたことが、その後の学校教育のあり方にも少なからずの影響を及ぼしたと考えられる。つまり明治年間を通じて、学校教育と一般社会とは、しだいに両者の距離感を縮める方向で推移し、国民教化がひととおり遂行されたと考えられる明治末ごろには、両者の立場は、ある意味で逆転していた。その背景には、明治年間にわたる国民教化の成果として、明治国家がイメージした国民が育成され、社会の構成員となっていたため、もはや初期のように徹底した教化をはかる必要性が薄らいでいたことが考えられる。そして、これまでのように洋楽(唱歌)をそのままに摂取することだけでは、日本人として、そして沖縄人としての精神文化を築きあげることが、もはや不可能だということを、当時の教育者たちは実感していたのだろう。」P263-4

このように優れた分析がすでに提出されている。この分析を基盤にして、新たな研究課題が多様に浮上するだろう。

思いつくままに、並べてみよう。

- 1) 戦後70年近くの音楽と音楽教育の関係、音楽をめぐる学校と社会との関係の分析
- 2) 戦後著しく伸長し、音楽世界に学校を越える影響力を保持するようになったマスメディアを、こうした研究のなかで、どう位置付けて分析をすすめるか
- 3) 「社会音楽」などと呼ばれる学校外音楽を支持促進させる社会的基盤の研究 とくに、大正期以降、「音楽を享受できる・する層」人たち、たとえば、旧支配層&県外者&商工業者など裕福な層&地方役人層、ないしは、中等教育進学層、あるいは、大正期「市民文化」享受層、広く言うと「市民社会」にかかわる分析。そうした層と、大正デモクラシー(大正新教育)とのかかわりの検討。古典を担う層と、民謡を担う層の分析。
- 4) 沖縄のなかに歴史的社会的に蓄積保持されてきた「豊かな音楽基盤」という角度からの学校音楽への問題提起。そうした角度からの学校音楽構想
- 5) 洋楽と学校音楽の結合・分離・協同・対抗関係についての分析

6) 沖縄では、音楽と芸能演劇は歴史的に深い関係を築いてきたが、学校音楽はそうでもない。そのことにかかわる史的分析和課題提起

7) 古典・民謡、そして洋楽以外の多様なジャンルの広がり——ポップ・ジャズ・ロック……——を視野に入れた研究展開

8) 音楽と並んで、学校での芸術教科を構成してきた美術（図画工作）との比較検討研究

※ 海外では広く見られるが、ダンス・演劇といった芸術教科について、沖縄での展開の検討などなど、キリがないほど存在している。

9. 音楽教育における内容・方法の史的検討 2014年02月09日

この連載7で述べたこととかかわるが、教えることを意識化することは、教育内容教育方法における意識化ともなる。

教育内容でいうと、教育プログラムとかカリキュラムとかの登場となる。それらには、近世においては、中国式・日本式と沖縄独自のものの創出と活用に焦点が当たる。それらには、教科や教科体系が必要となってくる。その上に立って、どんな教材を用意するかが話題となる。その教材の一つとして『教科書』が登場する。

19世紀に入ってから王府の学校での教育内容、さらに19世紀末になって天皇制政府が沖縄に対してどんな教育内容を用意するのか、その分析が必要であろう。

連載6で紹介した増井論文の記述から拾うと、次のようなことが検討対象となる。

唱歌用教材として、外国民謡などに日本語歌詞をあてたもの、「文部省唱歌」のような日本人作曲のもの、軍歌、『発音唱歌』のような現場教員作曲のものといった4種が挙げられている。また、儀式唱歌として、兵式体操と合わさった軍歌、地理教育における鉄道唱歌、体育唱歌などがあげられているが、それらの実際はどうだったろうか。

『尋常小学唱歌』は「文部省編」ではあるが「国定教科書」ではなかったため。各学校ではこれ以外の民間発行の検定教科書を使用することも可能であり、その裁量は現場に委ねられていた」P14と書かれているが、現場がこれらを選定していく実態はどうだったろうか？ 学校単位、担当教員単位、地域単位、県単位といったことはどうだったろうか。さらには、師範学校での科目「音楽」は、どうだったろうか。

また、明治末から大正初め、宮良長包が、沖縄のわらべ歌を授業の導入場面で入れ込む例を、「子どもの実態に応じて教材を自ら開発し提供した例は、沖縄県においては先駆的な例であると言えよう」p27と評価されているが、さらにそれを掘り下げてみる必要があるようだ。

さらに、国民学校では「器楽や鑑賞を含むようになった」と書かれているが、それ以前では、唱歌以

外のものが存在したのだろうか。

こうしたことの研究が求められる。

教育方法の特質ということを、集団教授としての授業に絞って言うと、それが成立する以前と以後では違いが大きい。まずは教育方法として登場してくるものを並べてみよう。

講義 自習とそれへのサポート 一斉授業型 対訳式 実物教授法 ヘルバルト式
5段階あるいは導入—展開—まとめ形式 示範と訓練 集団表現（合奏合唱 集団制作など）
ドリル型（反復練習型） 討論型 共同制作型

近世にあつては、個人教授訓練型と学校型（中間形態としての塾型 筆算稽古所型）などが並存していた。学校型には、国学・平等学校・村学校・明倫堂など学校種別による教育内容方法の差異があり、その分析が求められる。また、身分階層による内容方法の差異も研究対象になろう。

時代転換期における、とくに近世から近代への時期における、教育内容教育方法の継承断絶は、全般にわたる研究課題だろう。

増井論文のP13には、「口授法」（歌詞は暗記させ、曲は譜を使わずに耳で覚えさせる）が紹介されている。そこでの「予備—範唱教授—練習—」という流れをどう評価するか、あるいは、「児童を三分して・・・批評」ということが行われているが、これをどう評価するか。そして、その授業は戦意発揚を主眼として指導を展開しているが、そこには、音楽的指導も展開していたことをどう評価するか。

さらに、P29に、天妃小学校で大正2年に教師矢野が「拍子の教授」をしている例が紹介されているが、なぜ、メロディなどではなく、拍子なのだろうか。沖縄（の子ども）の音楽特性がかかわるのか、それとも、当時の指導法傾向がかかわるのか、それとも矢野の特性なのか。といったことを検討するとどうだろうか。

導入—展開—まとめ、という一般的なスタイルから、音楽特性にもとづくスタイルへの展開がどうであったか、なども検討されてよいだろう。

そのあたりは、たとえば、久万田晋が「沖縄の民俗芸能論」（ポーターインク2011年）が、臼太鼓やエイサーなどにかかわって展開している、表現の地域による多様性についての分析なども一つのヒントとなろう。

さらにまた、近世末期ではあるが、安富祖正元の「歌道要法」では、
「歌をうたうの道」「形容端正」「折ふしの情を心におもふてうたへば、おのづからその情、音声に彰る」「歌を学ぶの道他なし、只放心を求るのみ。」「師伝を受る事、辛勞しみづから工夫を加へて、漸次に増長して終に其奥を得る。是下学上達の理なり。」「こころを歌にとどめて、全くうたひ終れば、おのづから其妙いづるものなり。これ歌をうたふも要法なり。」といった学習論が展開されているが、それを教育方法論としてどう分析したらよいだろうか、という研究展開も存在してよいだろう。

この論は、教育論指導論の形ではないではなく、学習論としての展開として書かれている。しかし、曲や詞の選定などや「師伝を受る事」という表現が示すように、指示（指導）を行っている事実が垣間

見られる。指示・指導をしている事実がありながら、それを指導論として意識化せず、学習論として書くことに特質があるといえよう。事実と意識の乖離とでもいいえよう。

こうした特質は、他の分野でも一般的であり、長い期間続いている。今日まで続いていそう。そのことが、音楽教育として意識化することを妨げてはいないのか、などと問うてみるのもいいだろう。

10. 時代区分 2014年02月12日

沖縄音楽教育史における時代区分をどうするか、という課題があるが、その前に、ここでは拙著『沖縄県の教育史』を素材にして、沖縄教育史の時代区分について考えたい。昨年9月の芸大授業の初回に、この拙著の検討課題として話題提供したが、その時のものをここに掲載することにしよう。

「本書は原始・古代（中世）、近世前期、近世後期、明治前期、明治後期という五章構成で、教育史固有の時代区分ではなく、これまでの歴史研究、なかでも政治史研究の時代区分に依拠したことにみられるように、教育史研究としては開拓途上の性格を有している。」P9と書いた。

では、沖縄教育史としての時代区分をどうしていったらいいのだろうか。それは、同じように、たとえば、「沖縄音楽史」として、あるいは「沖縄音楽教育史」としても求められる課題である。

「教育史」では、まず一つとして、教育と言う営みの意識化の成立、いいかえると「教育の発見」という視点がある。類似の問題として、「子どもの発見」（大人との区別）、ないしは「子ども時代の成立」がある。それを音楽にひきつけていうと、わらべ歌とか童謡とかいったものの成立の問題である。このあたりは、ヨーロッパにおいて、その問題を追求したアリエス論が一つの示唆になる。

「教育の発見」は、意識的（意図的）教育の展開ということにつながる。その際、それ以前とそれ以後とを区分しなければならないが、それ以前は、教育という営みが、次のような営みのなかに埋め込まれていたと、言う事ができよう。

親の躰、産育、生産技術、職人技の訓練（「正統的周辺参加」、「ワザを盗む」といった言葉もそれらにかかわる）。

なお、教育論と学習論とは相対的に区分される必要がある。教育論が未成立段階においても、学習論が成立していることが多い。たとえば、「ワザを盗む」などがそうである。

教育論の成立は、教える側、指導する側が、教える内容を意識化し、教え方つまり教育方法を意識化し、教育内容・教育方法の意図的構築を行うと言う事である。

それは、属身的知識・ワザから独立して、教えるものとしての知識・ワザが成立すると言う事である。別の言い方をすると、文化とは区別された形での教育内容が成立すると言う事である。

たとえば、15世紀に展開したと推理される、沖縄語の仮名表記は、まずは文化創造として展開した。それらが一定の安定化体系化を見た時に、それを継承していくために、継承者にたいして意図的

計画的に教えていくということが、どのように成立したかという事である。それは、他の諸技芸についてもいえることである。

海外からの移住や海外との交流として、文化受容創造が盛んに展開された15世紀以前にあっては、受容過程において、教育の営みの前駆的形態が見られたであろう。なかには、たとえば、中国の学校ないしはそれに準じたところで学習した（ないしは教育された）ものが存在するだろう。そこに、教育の営みの前駆的形態が見られたということもできるかもしれない。それが沖縄内部で展開したという点では、久米村での展開、また沖縄に設立された寺院における展開が、「教育に近い」ものということができよう。

だが、それらは、師匠に個人的について、「習う」と言う形態を中心にしており、意図的計画的で組織的な教育の展開、「教える」ことの展開と言うには、まだ到達していないと言えよう。その点で、本書P15で指摘したように、「教える」という言葉が登場せず、「ナラスン」（習わせる）という言葉でまかなわれる段階にあったのだろう。

こうした視点から、教育の成立を、時期区分の一つにすることを考えてみよう。

まずは、士族とくに上級士族に焦点をあててみよう。王府の施策として、大和文化・儒学・諸技芸の組織だった習得が、上級士族全般にわたる課題となるのは、羽地施策が展開する17世紀後半であろう。士族身分の確定を意味する系図作成がそれに並行する。士族とりわけ上級士族の子弟はそれらの文化の習得が当然のこととなり始める。下級士族においても、そうした動きが広がり始める。

17世紀後半のスタートからしばらくして、蔡温治世が展開する18世紀半ばには、これらが半ば制度化されていく。中国に派遣される官生ならびに私費留学生などがその頂点にいるだろうが、士族子弟の全般的な課題となる。なお、これらは男性士族を対象としていることに留意しておきたい。

それらの中で、各々の文化体系とは相対的に分離した教育内容が成立しはじめ、教育プログラムのようなものが構想され始める。そして、それらを教える師匠の職業化が進む。それは、教育方法の意識化を伴うだろう。

それらを基盤にして、教育書が作成され始める。蔡温の『御教条』が代表的なものである。また、家族内で、親が子どもに対して行う子育て（教育）も意識化されていく。蔡温の著書にもそうしたものがあつたし、家訓とか遺言書と言う形で残されているものがある。

そうしたことをうけて、計画的組織的教育、つまり学校が成立し始める。歴史的背景があつて、久米村でそれが先行するが、それ以外の士族にあつても、18世紀には前駆的形態が広がる。それらを受けて、18世紀末から19世紀前半にかけて、男性士族を対象とする学校が設置される。

なお、それらにしても、学習論的契機が強く、教育論としての意識化は高くはない。

とはいえ、教育を意識的に追求する動向、ならびに組織が成立し始めると言う事では、17世紀後半の羽地施策後、または18世紀半ば蔡温治世、または国学などの設立がみられる1800年前後を、時代区分として設定することが可能だろう。

一般民衆層では、士族とは異なる状況に在つたが、次の区切りでは、彼らも舞台上に上り始める。

時代区分の次の区切りは、成立した教育の変容をめぐるものだ、その一つとして天皇制政府による国民教育の成立への動向がある。まずその試みをはじめた1879年、そして、試行錯誤過程を経て、一般民衆子弟男女全員を対象に施策を展開する19世紀末から20世紀初頭を区切りにすることが考えられる。

それらは、国家による教育の登場という政治的なものだけでなく、共同体の「教育」的機能の再編縮小、家族による「教育」的機能の拡大といった過程と並行する。それはまた、それ以前の身分差・階層差の「教育」の再編ともなる。同じころ、商品金銭経済の浸透が強まり、それとかかわっての教育へのまなざしが広まり始める。

と同時に、支配的潮流とのせめぎ合い関係をもつ動向を生みだし、多様なものの矛盾的展開に、特質をみる事もできよう。近世における旧来の教育は、これらのなかで陰を薄くしていく。にもかかわらず、それらがその後も伏流になっていったかどうかの検討も必要だろう。

その次は、いつを設定するのか、敗戦・米軍統治や日本「復帰」などを区切りにすることもありえようが、教育家族の大規模成立という意味での1980年代を設定することもありえよう。さらには「個人化」と言われる事態が、沖縄でも登場するが、それを視野に入れた区分が成立してくるかもしれない。

※ では、音楽史ではどうだろうか

私は全くの未学習だ。関心を持つこととしては、たとえば、次のようなものがある。

宗教的生活、生産作業からの音楽の相対的独立

趣味・余暇としての音楽の成立

職業的音楽人の登場 奏者と聞き手の分離

外来音楽の吸収と沖縄独自音楽の形成

※ さらに、沖縄音楽教育史としてはどうだろうか。これも、私には未着手の課題だ。関心を持つこととしては、たとえば次のようなことがある。

音楽教育専門者の成立

学校音楽の成立

教育の場での、外来音楽と沖縄独自音楽とのせめぎ合い・協同の展開

1 1. 20世紀初頭における沖縄の市民社会成立拡大と音楽 2014年02月14日

20世紀初頭以降の沖縄社会は激動期に入る。土地整理に伴い、村々にまで金銭商品経済が浸透し、それまで例外的であった人々の移動移住も広がり始める。シマ共同体や家族にも変化が起こり始める。就学も拡大し、明治末には小学校レベルまでは一般化する。

そうしたなかで、市民社会的なものが成立拡大し始める。それらが、人々の生活および文化のありようの変化をもたらす。たとえば、読書、児童文化といったものも、士族層富裕層のなかに広がるだけでなくそれ以外の層にも見られ始める。雑踊がつくられ広がり、観劇も広がる。都市だけでなく農村地域のシマにも、そうした文化芸能が広がる。

それらは、音楽の世界にも、従来とは異なったありようを作りだし始める。そうしたことが、音楽をどう展開したのかという史的研究も求められるだろう。そうしたものが、学校唱歌・学校音楽として展開してきたものと、どうかかわるのか。また、従来の古典音楽・民俗音楽にどのような変化を生みだしたが。それらと学校音楽との確執・からみ合いはどうか。

それらは、久万田晋「沖縄の民俗芸能論」のなかに書かれている「大衆芸能」の成立拡大と関連する。

そうした大衆芸能は、それまでの古典芸能・民俗芸能のありようにも変容をもたらす。それと並行して「民謡」の新たな展開がある。その中で、音楽・音楽教育にかかわって、次のような問いが生じてくる。

これらの音楽芸能が、地域社会、さらには個人の娯楽・趣味として成立することの史的研究

それらにおける、教育的教師的指導的なものの研究。たとえば、歌三線などの諸流派が開設する道場・研究所・稽古場などの研究。そうしたものと、学校音楽とのからみ。

(※ しばしば無意識的に、教育＝学校教育という把握が登場する。学校教育は、教育のなかの一部なのだ。)

古典芸能・民俗芸能、そして学校教育とは相対的に独立して入りこんでくる大衆芸能、あるいは学校教育外における洋楽的なものについての研究。

こうした動向と、大正デモクラシー・大正新教育などと言われていることとのからみあい。さらには、金銭商品経済の浸透とのからみ。世界的な市民社会成立拡大とのからみ。などの研究も求められてこよう。

さらには、社会の深層で展開する人口変容とのかかわり。富裕層における「教育家族」の成立と音楽文化の家族単位展開とのからみ。

また、明治期までの学校においては、国民形成（沖縄の日本国民への統合）と軍事的色彩が濃厚な音楽教育・唱歌教育が展開したが、それが沖縄アイデンティティ問題を強烈に押し出した。

(※ 明治期、とくに中期あたりにおける人口増をどう読むか。多産多死から多産少死へ。そのことが、家族観・子ども観・子育て観・教育観にどのような影響をもたらし、文化・音楽にどうかかわるのか。

加えていうと、その前の近世初めの人口増についても検討が必要だろう。そしてその次の転換は、1970～80年代というべきだろうか。それとも、それより早く50～60年代というべきだろうか。いずれにしても、少産少死へは緩やかに進行したというべきだろうか。

それらが、1980年代以降の「教育家族」化を強力におしすすめ、また「個人化」を生みだしてい

く。そうしたことの研究も期待したい。)

大正期末から昭和期になると、人々の音楽にかかわる生活・文化状況に大きな変貌がもたらされたと推察される。それは、音楽享受のための媒体の広がり、メディアの関与が広がり、大衆芸能的なものの比重の高まりともいえよう。それを学校教育にひきつけていうと、国民形成だけでなく、沖縄においても大量生産・大量消費社会に対応する労働者・消費者の形成という色彩が出てくると推察される。海外移民のみならず大都市工場への出稼ぎ激増がその一つの象徴であろう。そのことが、「大衆」における音楽芸能への対応の変化を作り出す。

こうした変化は、20世紀初頭における変容を含んで、沖縄における市民社会形成（あるいは大衆社会形成という様相を含みつつというべきかもしれないが）という視点を要求するだろう。そうした課題意識に立つ研究は、全体として未着手というべきだろうが、研究を志す人の活躍に期待したい。

こうした検討は、この時期についての三島論文の音楽史・音楽教育史についての提起をより深化させるものとなっていこう。そうした検討への基盤を三島論文は、沖縄アイデンティティ形成に焦点化しつつ、次のような記述を用意している。

「このように明治末の沖縄社会では学校における音楽教育のあり方が転換点を迎えており、あわせて沖縄の人々が抱いた音楽観や音楽評価のあり方も、同時期に転換点を迎えていた。そこではあわせて、時代を牽引する人的な側面での転換もはかられていた。沖縄での音楽教育や音楽文化をリードした人々は、明治末を境として従来の県外出身教員から沖縄人教員へと、その主体を転換させた。つまり、この時期における音楽教育ならびに音楽文化的な実践の数々は、もはや政府による上からの一方的な働きかけとしてではなく、下から台頭し、そして湧きあがるような個々人の力に支えられたものだった。その意味で、一人一人の顔のみえる個性的な実践が多かった。沖縄人の主体性はみずからのアイデンティティを誇るべく、明治末のこの時期に自発的に開花したといえる。

日本の近代化が西欧諸国とは異なり、当初、上からの施策として進められてきたとはいえ、ちょうど明治末のこの時期には、上と下の両者の力のバランスが拮抗していたと考えられる。そしてこの時期は、洋楽受容の進展における「直接的な摂取」の段階から移行し、「反転現象」そして「クロスオーバー」という新たな局面の到来を告げるものだったと考えられる。ここでいう合致点は、「摂取」から「創造」へと転換をはかろうとする沖縄社会の地殻変動期であり、そこには、新たな文化の創造をめざした近代沖縄の内なるダイナミズムが感じられる。

そのなかで、洋楽的な能力や思考をそなえた近代沖縄人の主体性は、ほかでもない沖縄の伝統音楽へとひたすら向けられ、発揮された。そのなかで彼らは沖縄の伝統音楽を近代社会によりよく再編するために、さまざまな試行錯誤を繰り返していった。

そういった数々の実践を支えたのは、洋楽を受容していくなかで身につけた近代的な身体性であり、そして音楽観や思想であり、さらには洋楽理論に支えられた合理的で客観的な方法だったのである。」 P 264

12. 戦前と戦後 断絶と連続 音楽・教育・政治 2014年02月17日

三島論文は、最後に以下のことを書いて閉じている。

「従来の日本の戦後史は、戦前と戦後とを断絶したものとして捉える傾向が強かった。そのため、それらの多くは歴史的連続性の視点に乏しく、戦前に培ってきたすべてのものを戦後の社会があたかもリセットしてしまったかのごとく描かれてきた。ことに沖繩の戦後史の叙述においては、歴史的連続性という態度が希薄だった。(中略)

米国側の占領地政策の操作も加わって、この時代の郷土文化の復興に対する解釈は厄介であり、一筋縄にはゆかない。そのうえ従来の研究では、近代沖繩社会における郷土の音楽文化の位置づけの推移を、音楽文化史という観点から通史的に見渡されることがなかった。そのため沖繩の音楽文化史は、戦前そして戦後の文化潮流に対する変遷を含めて、いまだ総括的な評価がなされていないのである。

(中略)

以上に述べたように、近代沖繩そして近代日本における戦前戦後の音楽文化史を、歴史的連続性という観点で再考するためにも、本研究はその前史を担うものとして大いに貢献できよう。」P265-6

この分野の研究展開にとって不可欠の視点だ。私も、沖繩教育史研究において、戦前と戦後との間の断絶と継続という視点での分析の必要を書いてきた。

本論文をふまえた今後の三島さんの研究に期待したい。

これらに絡んで、研究課題をいくつか並べておこう。

1) 近世と近代 両者の対比検討 継続と断絶

士族音楽 町方百姓音楽。田舎百姓音楽 学校音楽 市民音楽 これらのからみの研究

2) ここで、戦前と戦後、近世と近代といった時代転換における断絶継続の検討の前提として留意したいことを書こう。

まず教育にかかわって、おうおうにして見かける学校＝教育ではなく、地域・家族・職場・学校などといった多様な教育場面の一つとして、学校が存在すること。同様に、多様な音楽のなかの一つとして、洋楽とか学校音楽が存在すること。同様に、政治にしても、国家権力を掌握しているものだけが政治にかかわるのではなく、それに反対・抵抗する勢力、さらには多様な政治勢力を支えたり反発したりしながら、自分たちなりの政治行動を展開する住民などと多様なのだ。

研究の初期的段階においては、往々にして、学校教育、学校音楽、政府の展開と、それらの受容を軸に叙述をすすめることが見られる。三島論文はそれを突破して研究を大きく前進させた。

沖繩での洋楽の展開が、明治政府の政策をもとにして、洋楽的色彩を多分に含む学校唱歌を浸透さ

せることを眼目にした動向に先導されたとしても、実は多様な動向が存在している。とくに沖縄の中で、歴史的に継承されてきた音楽を基盤にし、自分たちなりの音楽を享受する歴史的に分厚い動向、しかもそれ自体が多様なものをもっている。そうしたからみの中で、「洋楽受容」活動が展開した。このことを明らかにした三島論文に刺激されて、多様な点での研究がすすめられることを期待したい。

3) 学校音楽経由とは異なる洋楽受容、あるいは洋楽創造の展開がどうなのか、という研究課題が存在する。

4) 歴史的に分厚い沖縄音楽が、明治以降の学校音楽に対して与えたもの。ないしは、沖縄音楽が関与して作り上げた学校音楽の有無。あるとすれば、どのようなものなのか。

5) 音楽教育の当事者としての一般教員・生徒の動向

6) こうしたことが、政治支配の大転換として生まれた戦前と戦後との区切りにおいて、どう展開したのだろうか。

7) 洋楽受容過程は、いずれは逆方向の展開、つまり音楽の創造発信過程を含むものへと転換していく。実際、沖縄の人々は、音楽によって沖縄内外に多くのものを発信してきた。それには洋楽を豊かにした沖縄音楽というものが含まれていよう。それらについての研究が期待される。

8) 学校以外の音楽展開の多様な場における音楽活動の展開。マスメディア・(音楽) 諸組織・地域・家族での展開と学校音楽とのかかわりの史的展開の検討

9) 社会構造の史的展開が、音楽にかかわる史的動向とどうからむのか。社会の中の多様な階層相互の関係の分析も必要だろう。20世紀前半まで強く残っていた士族系と非士族系との分離と相互関係などもその一つだろう。

近年では、世代間ギャップの問題、あるいは拡大しつつある社会的経済的格差の問題などが音楽においてどうなっているのかの研究が期待されよう。

13. 音楽・音楽教育と身分階層、およびそれらの移動 2014年02月20日

歴史的にみると、階層・身分に対応した産育・教育というものが長く存在してきた。さらに、地域・職業に対応した産育・教育ということもいえるが、ここでは、階層・身分について考えていこう。産育・教育というだけでなく、階層・身分に対応した文化・音楽・音楽教育ということも言えるだろう。

身分制度が存在した近世以前ではわかりやすい。にもかかわらず、しばし前までは、それらを見

したり、士族など、その時代を支配した身分におけるもので、その時代の文化を叙述する歴史書を見かけたりした。といった状況をふまえて、拙著の「沖縄県の教育史」は、身分階層の差異に着目して叙述することに一つの特徴をつかった。

しかし、近世沖縄では、他府県における士農工商間の身分差ほどに、スパッとした身分間分断ではなかったことにも注目しておく必要がある。経済的に困窮し田舎で農業を始めた士族が多い。また、巨額な寄付で士族身分を取得するものさえいた。また、民衆芸能を宮廷芸能の中にとり入れること、その逆もかなりあったようだ。

さらに、19世紀後半の近世身分制の廃止以降も、公的表記に「士族」「平民」といったものが残され、また、士族文化・平民文化といった前代からの文化を継承する傾向も強く残った。昭和戦前期まではそれがかなり見られた。

と同時に、20世紀に入るところから、金銭商品経済の浸透などにつれて、階層移動が激しくなる。そしてそれが、近代沖縄の人々の生活・職業・文化に特徴的なものを作りだしていく。

久万田晋「沖縄の民俗芸能論」が分類している古典芸能、民俗芸能、大衆芸能ということであろう、それらにない手の階層的特質があらわになるとともに、階層間交流階層移動も激しくなる。洋楽受容をめぐることも、そうしたことがみられるだろう。

だが、そうした検討研究は未開拓に近い。

さらに、戦後の社会激動と並行する音楽芸能の展開も激動と言うべきだろう。また、1960～80年代における教育家の成立・一般化と並行しつつ、音楽芸能展開の単位としての家族が大きく浮上する。親がもつ文化特質が子どもにも継承され、親の勧めで特定の音楽ジャンルを親しむといった例が多くなる。

その際、1980年代後半に相次いで出版された著書で登場する、ブルデューの経済資本と文化資本という概念を使って、沖縄での状況を分析するとどうなるか、ということが出てくる。とくに、近年格差拡大が著しい沖縄社会にあって、そうした検討が求められるだろう。制度的にまた社会通念的には「平等原理」に立つ現代だが、実質的に階層的格差、ないしは階層分断状況が広がる事態に注目しないわけにはいかない。こうしたなかで、音楽・音楽教育がどうなっているだろうか、そうした視点を持つ研究展開が期待される。

14. 職業としての音楽教育者

2014年02月25日

アマ指導者ではなく、職業（プロ）としての音楽教育者について考えてみよう。それには、史的にいくつかのタイプがある。

1、近世士族の専門職。家業として継承する場合と、下級士族で精進して指導専門職になる場合とがある。

2、20世紀初め以降の学校での音楽教員。音楽専科教員だけでなく、小学校・幼稚園・保育園などでは、学級担任など音楽を指導する教員は多い。また、戦後になると、高校大学で音楽を専門的に指導する事例も増える。さらには、学校以外の公的機関で音楽指導を担当する人も出始めている。

3、歌三線教室指導者。いつごろ始まったか、私は知らないが、遅くとも大正期には広がり始め、とくに戦後の1960年代以降、至る所、と言っていいほど多くの教室・研究所などが開設される。主として自宅の一角などに開設され、多様な世代の「生徒」が参加する。

4、ピアノ教室など。洋楽が普及するにつれ、ピアノ・バイオリン・声楽などの教室が開かれる。指導専門でなくても、プロ演奏者などが、「副業」として有料で指導することも広がってきた。そうした人も音楽指導者の一角を占める。

こうした多様なタイプの音楽指導者について、以下のような研究視角が存在する。

- a. 職業的地位。公務員的、自営業的、会社員の、などなど。
- b. 専業か副業か
- c. 収入額
- d. 「生徒」が支払う「授業料」額。公費などによる補助の有無
- e. 「生徒」の特性。年齢、趣味かプロ志向か、当人の文化環境。
- f. 指導者養成システム。指導者選考システム。
- g. 指導のカリキュラム、ガイドラインやテキスト・参考書など
- h. 指導スタイルの特性。
- i. 練習と発表、継承と創作といったことの関係
- j. 指導者自身の音楽実演と音楽指導とのかかわり。
- k. 上記1～4の相互関係。歴史的展開。

現実に多くの人が携わり、増加傾向がみられるにもかかわらず、その検討研究は未開拓状態にあるといえよう。

15. 歌詞と曲、楽器と歌唱といった対概念

2014年02月28日

連載6で述べたように、音楽には伝達継承と創造創作という対になった二つの側面がある。同じように、歌詞と曲、楽器と歌唱といったように、対になったもので構成されることが多い。たとえば、歌三線は、歌詞と曲、さらに楽器と歌唱の組み合わせだ。

同じ歌詞のなかにも、即興詩と既成歌詞という対があり、楽器演奏にも、既成曲のもとづくものだけでなく、即興演奏という対になるものがある。また、歌詞と曲は、組踊のような音楽を多分に含んだ劇表現の場合、脚本と音楽という関係にもなる。さらにいうと、歌詞と曲においても、プロによるものアマによるものという対、あるいは演奏者自身によるものとそうでないものという対、また、個

人演奏（制作）と集団演奏（制作）という対もある。

こうした対概念相互の関係は、音楽ジャンルなどいろいろな条件で変化する。学校音楽、マスメディアが主導する大衆音楽、音楽愛好者自身が作り出す大衆音楽といったことでも、大きく異なる。そこで、これらの概念を組み合わせ、音楽・音楽教育を検討することは、一つの重要なアプローチになるだろう。

たとえば、思想価値表現とからめて、歌詞と曲をみると、歌詞の方が、より直接的に思想価値表現が反映しやすい。とはいえ、曲・演奏にも、たとえば、行進曲が作りだす感性的行動的機能を多分に活用する軍歌やスポーツイベントでの音楽などで反映している。

その点では、日本における明治以降の音楽教育史を見ると、直接的に思想価値表現を含む歌詞に、より焦点化して音楽教育が追求されてきた例が多い。学校教育だけでなく教訓歌という形で活用されるものも、歌詞に強く焦点化されている。そのあたりは、「言霊」思想もからむという指摘にであったこともある。

そのためもあってか、学校音楽において、曲とか楽器とかにかかわっての探求には、未熟な発想がぬぐいきれない傾向にしばしば出会う。たとえば「長音階が優れている」といった発想もそうした類だろう。そうした点で「音楽内的」という概念を使つての、三島論文の分析は大変刺激的だ。

そして、戦前沖縄では、「洋楽受容」とのからみで、「伝統音楽の拍子を五線譜でどう記述するか」、あるいは「拍子取りの難点がある子どもが多い」などという発言が、戦前沖縄の音楽関係者によってなされていることをどう分析するのだろうか。また、曲における、掛け合い形式、ハーモニー形式といったことも、そうしたことと関連があるかもしれないので、検討を期待したい。

16. 多様なジャンルの交流協同としての音楽 2014年03月05日

音楽には多様なジャンルがある。沖縄でいうと、学校音楽時間で歌う曲、メディアを中心に流れてくるポピュラー、ジャズ、ロック、歌謡曲、そして古典とか民謡とか言われる歌三線、歌曲、ピアノ、バイオリンをはじめとする洋楽の楽器・・・あげていくときりがないほどだ。

さらに、踊り・演劇・朗読話芸などと音楽の組み合わせも多い。

また、同じジャンルののものであっても、地域の差異が音楽の差異として表れることもしばしば目にする。それら多様なものが接触しあうことで、多文化交流共同となり、新たなものが生まれることもある。

沖縄には、そうした多様な接触交流協同が生まれ育まれてきた史的豊かさが存在する。それをチャンプルー文化と呼んだりもする。

そうした史的展開を研究することも重要な課題となる。三線・三味線楽器の研究などもかなりの蓄積がある。

そうしたことにおいて、教育は多様な異ジャンルのものを伝達継承するという点で必要なだけではなく、多様なジャンルから新たなものを創造創作する過程にも深くかかわる。

それとは対照的に、特定の音楽を伝達しようとする営みも展開された。明治期以降の学校音楽には、そうした色彩が強い。その傾向は、現代にまで及んでいる。それは地域としての、個人としてのアイデンティティにもからむことがしばしばだ。

そうした「外来」的動向に対して、地域色をもつ音楽をからめて対応する動向も根強く存在してきた。そうしたことをめぐる動きの研究の先駆的なものとして三島論文があり、増井論文もそうした志向性を強くもっている。そうした先駆的なものを基盤にして、さらなる研究の深化発展が期待されよう。

多様なジャンルを協同させる創造的活動を促進するような音楽教育についての研究も必要になってこよう。

そうした試みは、学校音楽でいうと、教科としての音楽の枠だけでなく、多様な教科、さらには行事・部活動・総合学習など、多様な場で追求されていることを踏まえた研究も期待される。

さらにいうと、音楽芸術関連のホールは、以上述べてきたことを推進する絶好の場となる。無論、貸館事業に偏ったところでは、その機能を果たす比率が下がる。創造的な事業展開をするところでは、多文化協同の動きを豊かに作り出している。南城市文化センターシュガーホールもその一つとして著名になっている。そのあたりのことは、中村透「愛されるホールのつくりかた 沖縄シュガーホールとコミュニティ」(水曜社2012年)が詳しい。これらを踏まえた創造展開と、それを支える研究展開が期待されている。

17. 音楽活動の組織

2014年03月10日

音楽活動には、個人として行うものと組織として行うものがある。その組織としての活動にも、組織を構成する全員が参加するものと、その一部の特定のものが行うものがある。

全員のものは、たとえば住民全員、社員全員、集会参加者全員といったもの、学校でいうと、全校生徒全員、あるいは学級全員といった形になる。通常の生活においては全員で行うより、特定のものが組織を形成して音楽活動を行うことの方が多そう。たとえば、合唱団、聖歌隊、オーケストラ、バンド、村芸能における「じかた」といったように、である。

ところが、学校においては、教科音楽の授業にみられるように、全員参加で行うことが多いことに特性がある。そこでは、音楽の好き嫌い、得意不得意、声の質・量といった差異は無視されることが通常だ。強制的ないしは義務的なものだ。

こうした組織のありようの違いは、音楽活動、音楽表現に重大な差異を生み出す。

また、組織内の人間関係のありようも大きな違いを生み出す。特定の指導者・リーダーがいて、その指導統制に従って展開するのと、相互の支え合い、助言のしあいなどを基本にして展開するのとでは

大きく異なる。その点で、学校の音楽活動の大半が、一人の教師の指導・主導で展開されていることの歴史的特質に注目しないわけにはいかない。そして、そのスタイルが、ここ100年間で学校外にも広がっている。

こうしたことを歴史的に検討してはどうだろうか。たとえば、学校とその他の組織との間でのかわりあいや差異はどう変化してきたのだろうか。

以上は、沖縄に限られることではなく、地域を問わず研究対象となる。とはいえ、沖縄における音楽組織に焦点化して検討することは、それ自体として一つの研究課題となる。いいかえると、沖縄の地域特性が音楽組織としてどのように表れているか、を検討するということだ。

そこには、沖縄音楽のジャンル特性、沖縄の風土特性と音楽、沖縄における生産生活組織の特性と音楽の関係の検討ということが出てこよう。

近年に焦点化していうと、マスメディア媒介の大衆音楽の広がりや、音楽組織にどんな影響をもたらしたのかの検討が必要だろう。冒頭で述べた個人としての音楽活動の展開が劇的に広がったことがあげられよう。それは「個人化」時代の特性と結び合った検討を求めよう。また、これまでの伝統音楽、学校音楽にも強い刺激を与え、それらでの音楽活動組織の変容さえ作り出している。それらの検討も求められよう。

18. 音楽の場（物的環境）

2014年03月17日

音楽を演奏し聴く場には、多様なものがある。

モー（毛野原のこと） 御嶽 田畑 集落広場などの屋外の自然環境で

家 公民館 宴会場といった人々が集まる場

個室など、個人としての場（ヘッドホンやウォークマンなどによる視聴も）

ホール 劇場 スタジオなど、音楽などの芸術を演奏視聴することを主目的、ないしは一つの目的にして設置された場

一般教室 視聴覚教室 音楽教室 講堂・体育館 野外・運動場など、学校教育の場

これらの場特性が、音楽の特色を作りだす。その逆に音楽特性がそれにふさわしい場を求める。

それらを考える際に、次のような探究課題が浮かび上がる

自然と音楽

人々と音楽

演奏者と聴衆との関わり

個人としての演奏視聴

教育機能の特性と場 一斉訓練型と創造型

音響効果

多様なジャンルとの共同表現と音楽

庶民を対象とする近代学校と音楽との関係の特殊性

以上のことは、沖縄に限らないことだが、これらが沖縄でどのような特性をもっていたのか、そのことが沖縄音楽のどのような特性を生み出したのか、人々と音楽との関係においてどのような特性を生み出したのか、など探求価値のあるテーマが並ぶ。

19. 多様な音楽媒体の登場普及

2014年03月21日

音楽をめぐるここ100年の大変化は、生演奏だけでなく、ラジオ・テレビなどのメディア、レコード・CD・コンピュータなど多様な記録再生表現媒体が次々に登場し、人々の音楽に接する機会が、大量伝達大量消費的なものへとなくなっていったことがある。音楽創造にもそれらの媒体が深い影響を与えた。

それらは、音楽の普及、音楽の制作・創造などに量的増大をもたらすだけでなく、質的变化をもつくりだす。そして、音楽も市場化の渦の中に巻き込まれていく。消費型音楽とでもいえる現象が一般化する。大衆音楽といわれるものは、これらと深いかかわりを持つものが多い。

それらは、音楽の普及・創造に新たな局面を作り出すとともに、音楽を楽しむ（消費する）人々が、受動化個人化することを促進する。そのなかで、音楽消費をめぐる市場的格差が表れ広がる。

これらの動向は、音楽教育にも強い影響をもたらす。子どもたちにとって、音楽と接する場としての学校音楽の役割と地位の相対的低下があらわれる。反比例するかのように、子どもたちは「おけいこ事」に分類されるような音楽とのかかわりを増やしていく。そのなかで、音楽教育がどのような対応をしてきたのか、していくのかが問われる。

これらに関わる研究はどう展開されるのだろうか。

すでに三島論文は、次のような指摘をし、三島さんはこの分野で研究を精力的に進めている。

「洋楽の「大衆化」に大きく貢献したものは、ひとつにレコードやラジオなどのマスメディアの存在だったと考えられる。大正デモクラシー以降、音楽産業の社会進出にともなってレコードやラジオは登場し、とりわけ各種音楽の普及面で効果を発揮し、ひとつの画期をもたらしたといえよう。さらにはレコード制作にまつわる諸側面（企画や制作、販路、購買層など）が録音の対象となる音楽の様式を規定していったことなどを考えあわせるならば、これらのメディアを考察する意義は、たんに普及の面にとどまらないものがあるだろう。したがって洋楽受容について考えるうえでの今後の課題として、レコードやラジオに焦点をあてることも必要だろう。」P265

今日では、こうした媒体は、大量生産大量消費的な側面をもつだけでなく、音楽のいわゆる「個人化」としての側面を加速するものとしても存在する。そのなかで多品種少量生産に対応する動きが広

がる。それだけに、その「個人」が音楽消費だけでなく音楽生産・創造にかかわることの広がりも注目される。また、個人化が深まると、逆に共同・協同・協働への渴望・模索の動きを広げる。

こうしたなかで、音楽の変容が大規模かつ急速に進む。こうした時代的転換に、音楽教育はどうコミットし、コミットしていないのだろうか。

教育界、身近な沖縄教育界が、旧来の流れ・枠組みにとられるあまり、こうした時代的变化にかかわっては、受身的というか、それ以上に旧慣墨守的になっている事態をどう考えたらよいのだろうか。

研究分野がひろがり、研究課題が山積しているのが実情だろう。

20. 音楽における沖縄独自性と音楽教育

2014年03月25日

自然・生活と結ばれた音楽が、地域の独自性を生み出すのは当然なことである。加えて、地域外との多様な交流協同がさらにその独自性をより豊かにする。そうした営みを鮮明に示す地域の一つとして沖縄がある。

独自性とは、孤立的なものや本質主義的なものではなく、創造創作として展開することにも注目しておきたい。また独自性が、地域としての個人としてのアイデンティティとからんでいることにも着眼しておきたい。

そのことについて、音楽教育がどのようにかかわってきたのか、その歴史的検討は重要な課題だ。たとえば、沖縄の独自性を抹消する方向の音楽教育なのか、それとも促進充実させる方向なのか、そうしたことを明らかにしていく課題がある。と同時に、その音楽教育自体も沖縄という地域特性をどのようにはらんできたのか、ということも問う必要がある。

沖縄史を振り返ると、海外との交流、海外から沖縄への移住のなかで、文化・教育の移出入だけでなく、異なるものを出会わせるなかで新たな独自のものを創造してきた歴史が顕著にみられ、それはチャンプルー文化と表現されてきた。対照的に、日本化（部分的には中国化）の推進のなかで、沖縄独自のものを抑え込み消去しようとする歴史もある。

この促進と抑圧の両者のせめぎ合いが、時代ごとの特性をもってあらわれてきた。拙著「沖縄県の教育史」で書いた、沖縄における文化・教育の歴史的変化の事例のいくつかをあげておこう。

・古琉球時代 沖縄式表記の創造 歌謡

・羽地、蔡温政治を含む近世期 文化技芸の多分野

P 1 2 0 沖縄語の発音による訓読

・明治前半期 旧慣温存と日本化の両刀使いの政策 それへの対応。 宮廷芸能の地方への広がり

P 1 7 4 比嘉春潮の体験 郷土史

P177 1893年国頭小学校新築落成移転開校式 地域伝統行事の棒遣ひ・獅子舞・角力・躍

・明治後半期以降

明治末の商業演劇の隆盛。沖縄独自音楽であるが、それに注目して学校音楽に組み込むことは、宮良長包まで待つのか。潜在的、ないしは伏流があるのか。これらについては、三島論文参照。

郷土教育の動向とその特質

方言論争

・米軍統治期

日本式と沖縄式のなかでの揺れ・対立は、近世以降広汎に強く見られる。その際に、文化芸能と教育とでは流れに大きな差異ができていくことにも注目したい。全体的傾向としては、教育においては日本式の強調が、文化芸能においては沖縄独自の強調をみることができよう。この文化と教育との差異をめぐっての解明が求められる。

こうしたことの研究の開拓的なものとして三島論文がある。

21. 沖縄独自の音楽の創造へ 2014年03月27日

沖縄は、音楽にかかわる歴史的蓄積が、身分・地域を問わず分厚く存在してきた。近世における音楽に対する抑圧統制が、歴史的蓄積を窒息させるほどには展開せず、多様な文化交流がより豊かな音楽を作り上げてきたといえるかもしれない。

しかし、圧倒的に学校を通して展開された明治期における洋楽導入は、当初、沖縄独自の音楽を抑圧しようとする傾向を濃厚に持っていた。

それに対して、沖縄独自の音楽を盛りたてつつ洋楽を受容し、両者の豊かな関係を育み、沖縄音楽の発展を築き上げる課題に挑む動向が、明治末に生まれ広がり、質的にもより豊かなものを創造する流れが形成されていく。

こうしたことをテーマにして追究したのが三島論文だといえよう。その三島論文のなかで、重要な役割を果たした人物として、山内盛彬が次のように提示される。

「学校教員として教育界に根ざしながらも、そういった教育界の価値観にとらわれることなく、琉球古典音楽そのものを見つめ、音楽そのものに切り込んだという意味で初の沖縄人だった。」 P74

「楽曲面の特性を根拠として、その音楽的価値を論じることができた人物は、沖縄の近代を通観するかぎり、後にも先にも山内以外には存在しなかった。」 P75

「山内は、西洋近代の合理性を導入しつつも、合理性からはみ出してしまう沖縄音楽の特性が何であるのかを明確にさせたいと、沖縄音楽独自の五線譜化の方法を編み出そうと試行錯誤した。そういった意味で山内は、五線譜のシステムを全面的に受容しつつも、西洋近代の合理性に完全に屈してしまうこともなければ、あっさり妥協することもなかったと評価される。」 P122

このように高く評価される山内をはじめとする沖縄独自の音楽を創造する動向を生み出した基盤は何だろうか？

それは、明治末から大正期へと続く沖縄独自の歴史・文化などを重視する流れの広がりとは無関係ではないだろう。代表的には伊波普猷がいる。教育界でも、大和人の圧倒的な支配状況から沖縄人の活躍が広がる動向がある。照屋信治「近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方」(溪水社2014年)によると、代表的には親泊朝擢がいる。

こうした人物の多くが、旧士族出身であることも注目される。大和勢力との対抗的意識ないしは距離を置く意識があり、また沖縄をどうするのかという課題意識も強かったのだろうか。

また、大和人でも、東京音楽学校を卒業して沖縄師範学校に赴任した園山民平の刺激が三島論文では次のように書かれる。

「園山が沖縄にもたらした発想は、すぐさま当時の沖縄の音楽教育者たちを感化した。すなわち園山の創作は、琉球古典音楽を「伝統」として保存する意義とともに、それをもとに「創作」することの意義を沖縄の音楽関係者たちに実感させるものとなったのである。」 p 183

明治44年の沖縄音楽会(第二期)についての山内盛彬の回想では、「洋楽畑の園山先生が『西洋人が洋楽を尊ぶように、吾等も自国の音楽を尊ぶ』と叫び、当局の反対を押し切って、神聖な講堂に洋楽邦楽と肩を並べて琉楽を出したので、県民は皆肩幅の広がる想いがした」とのことである。P 234

沖縄独自のものの追求は、沖縄内での地域的に独自のものの追求ということとを並行させる。

たとえば、『八重山古謡』の編纂目的として、三島論文は次のように述べる。

「同書の編纂において、日本のいにしえの言葉を南島・八重山の内に見いだそうとしたのが當壮であり、ひとしく、日本のいにしえの音楽を南島・八重山の内に見いだそうとしたのが長包だった。そこで発見された言葉や音楽は、南島・八重山という、あたかも切り取られたような時空のなかで体系化され、日本の中央に向けて発信されたのだった。とりわけ音楽に関しては、士族によって節歌化される以前の民謡、言い換えれば首里の影響を受けていない八重山の農民層の古謡こそ、日本文化の源流をたどるうえでの価値が見いだされていた。当然ながらそこには、大陸文化の影響が色濃い沖縄本島の芸能が除外視され、また同様に、三線伴奏をともなった節歌としての八重山民謡も含まれていないのである。」 P 103

「大正11(1922)年以降の宮良の音楽実践は、八重山民謡を近代沖縄社会に再編するものであり、その再編は同時に日本本土の文化人の立場からすれば、日本の原郷を八重山民謡の内に見だし、それを近代日本社会へと再編するものだった。明治末における琉球古典音楽の再評価と、それにともなって生じた再編の動きと同様に、ここにも八重山社会と日本社会という、双方向からの力学が働いていたことを指摘しておきたい。結果的にいえば、八重山民謡の再編は「琉球アイデンティティ」とは異質な「八重山アイデンティティ」の確立をうながすと同時に、八重山人の心に日本人としてのアイデンティティを確立することをもうながしたと結論づけられる。」 P 260

三島論文は、こうした動向が広がっていく場として公開演奏会が重要だったとして、次のように書く。

「近代沖縄人は、琉球古典音楽をみずからの旧国家の誇るべき音楽として再認識し、これこそが近代沖縄の「社会音楽（社会楽）」だという自覚に至った。それは明治末のことだった。その後も、近代にわたって琉球古典音楽は新たなる場としての公開演奏会という場を受容し、そして琉球古典音楽そのものが近代社会に再編されるためにも公開演奏会という場を必要としたのだった。（中略）

さらに沖縄人は昭和初期に入った頃から、沖縄各地の「民謡」に対して近代日本のアイデンティティを発揚する対象として認識し、あわせて公開演奏会のプログラムを飾るものとして「民謡」を位置づけたことも指摘しておきたい。

このように公開演奏会という場は、沖縄人であることを沖縄県民に自覚させるとともに、なおかつ日本人であることをも沖縄県民に自覚させた。近代における洋楽受容の一つの産物といえる公開演奏会は、沖縄人であり日本人であるという、この双方のアイデンティティを発揚する場として、きわめて重要な機能を果たしたのだった。」 P 244-5

こうした動向は、沖縄独自音楽の継承創造への動きをひろげるのだが、それは「音楽外的側面」とは関わらずに「音楽内的側面」においても展開したことに注目し、三島論文は次のように書く。

「明治末には、沖縄の内側で生成された琉球民族としての自覚と、沖縄の外側から「社会音楽」の確立をもとめる機運が生じ、そこには双方向からの力学が働いていたといえる。そういった過程のなかで、明治30年代以来の琉球古典音楽に対する価値観や評価も見直され、改められていったと考えられる。ここで特筆すべきは、琉球古典音楽に対して再評価をはかろうとする動きが、旧支配層を中心として沖縄の内部から自発的に生じた点であり、外来者の啓発を発端としたものではなかった点である。この点にこそ、まさに近代沖縄人の「主体性」を見るのである。」 P 258

これらの過程で、政府施策の枠内で動かざるを得ない教育界と沖縄独自性の追求が相対的にしやすい文化芸能界との微妙な差異・ズレが注目される。その点で、当初教育界にも身を置いた山内を教育史上でどう位置付けたらいいのだろうか。

昭和初期の「郷土教育」動向も、沖縄の独自性にかかわって考えると重要な意味をもつ。

「郷土」という概念は、その曖昧さゆえに地域性（ローカルなアイデンティティ）を束ねるうえで、ひじょうに都合の良い便利なものだったと考えられる。しかもこの概念は、前述したような沖縄各地にみられる地域的な音楽性の差異をひとつに束ねただけでなく、さらには沖縄と日本本土の音楽性の差異や言葉の差異をもひっくるめて束ねるうえで有効だった。つまり日本各地のローカルなアイデンティティは「郷土」という概念を介して、ひいては日本人としての単一のアイデンティティ形成へと収束される可能性があったと考えることができる。その意味で「郷土」という概念にそなわる曖昧さ

には、格別に注目すべきものがあることを指摘しておきたい。」P263

「郷土」は、中央施策に対抗して地域を押し出すという願いをもって語られ、地域アイデンティティのよりどころになる一方で、地方から国家への「自発的」動員、つまりはファシズム的性格をはらんだものとして展開され、日本アイデンティティにつながるという二重性をもつものだった。

このように「日本」と「ローカル」が対立していないどころか、一体化している点に特性を見ることが可能だった。日本の「縮図」「源流」「原郷」と言う表現も、独自性を出すことに力点があるのだろうか、日本であることの強調になるのだろうか、微妙かつ重要な問題をはらんでいる。この発想は、20世紀末どころか今日まで主流でさえある。

こうした分析は、新たな問題群をもちつつ展開する戦後沖縄音楽のなかでは、どのように分析していけばよいのだろうか。今後の研究に期待したい。

2.2. 音楽教育史研究 2014年03月31日

長くなった連載も、いよいよ最終回だ。芸大授業も、最後の振り返りの会を我が家で持って、終えた。私自身も、強い刺激を受け、多くのことを学んだ。その成果の一端をこの連載で示したといえるかもしれない。

ところで、音楽教育史研究は、一般史研究、音楽史研究、教育史研究といった関連分野とのかかわりのなかで進められる。そのため、一般史の音楽教育分野での展開とか、教育史の音楽分野での展開とかのようなタイプのものであるし、音楽教育の歴史的検討といったタイプのものもある。さらに音楽史のなかの教育分野といったタイプのものもある。

したがって、音楽教育研究を進めるとき、それらのなかのどういうタイプなのかを意識的に鮮明にすることも重要だと思う。それは、研究者が自己規定をどうしているかともかかわる。教育史研究者と自己規定して、音楽分野を対象にして研究をおこなうのと、音楽研究者として自己規定して、歴史的問題に挑むのでは、研究のありようがずいぶん異なってくるだろう。

それは研究方法論の差異としてもあらわれようだろう。研究資料・史料として、どういうものを収集分析するのか、ということの違いとしてもあらわれるだろう。たとえば、音楽関連の物的遺産、歌詞・楽譜、AV記録媒体、視聴、インタビュー、文献資料、参加関与といった多様なものなかのどれを選ぶのかということがある。無論、資料収集の可能性や容易さの問題も存在する。

研究論文成果の公開にあたっては、文章を軸にしたものだけでなく、音、および視覚という、音楽特有の素材を基軸に据えたものがあってよいだろう。

また、音楽教育というからには、現実の音楽教育実践とのかかわりを直接間接に意識することが求められよう。それは、どういった音楽教育実践を創造していくのか、という課題と結び合うということでもある。

久万田晋「沖縄の民俗芸能論」(2011年ボーダーインク)を読む

1. 注目の本

2014年02月13日

店頭で見つけた本だ。この間、関連分野の書を乱読してきたが、そこで得られた知識が、私の頭のなかで雑然と並んでいた。それらを体系だったものにしてくれた本だ。

焦点は、神祭り・臼太鼓・チョンダラー・エイサー・八月踊りなどに当てられているが、それらが成立するころから現代に至るまでの、地域差分析などを含めた歴史的構図を、まさに図を描くように示してくれる本だ。とくに、ここ数十年の変容創造にまで視野を入れている点で、私にはとてもありがたいものだった。

この分野は、私は専門外なので批評評価ができるものではないが、恐らく優れた研究書として高く評価されているのではないかと推察する。

では、何回かに分けて紹介しつつ、私なりの関心事についてコメントしていくことにしよう。

まず第一章のなかの「沖縄の民俗芸能の分類」にかかわっては、次のように書かれている。

「琉球・沖縄の伝統芸能を大きく分類すると以下の三種に分類できる。

①古典芸能

近世琉球を通じて首里王府の士族層によって育まれてきた芸能を指す。主に中国からの外交使節である冊封使を歓待する芸能として成立発展した。組踊(演劇)、古典舞踊、古典音楽に大別できる。さらに、王府の諸儀礼において歌われた王府オモロや、江戸幕府との外交的な場(たとえば江戸上り)において演奏された中国由来の路次楽、御座楽も含まれる。

②民俗芸能

沖縄各地域の村々に暮らす庶民の間で生まれ、特にムラの祭りの場を中心として発達した諸芸能を指す。地域の民俗行事(船漕ぎ、綱引きなど)、舞踊や音楽(民謡を含む)、演劇、さらにそれらを包括したムラ踊り、ムラ遊び、豊年祭などが含まれる。沖縄本島周辺や八重山諸島では近世末期・近代を通じて古典芸能からの影響も大きい。

③大衆芸能

明治以後の商業演劇を通じて成立した芸能および昭和期以降レコードやラジオ、テレビといったマス・メディアを通じて成立・流布した芸能を指す。前者には、地方の民謡を伴奏に庶民の風俗を振り付けた雑踊や、台詞を民謡旋律にのせて劇が進行する沖縄歌劇などがある。後者には昭和初期以降、レコードを媒体に創作されていった新民謡や、一九七〇年代以降ポピュラー音楽の様式において沖縄

の民族アイデンティティを表現した沖縄ポップなどがある。

これらの三領域は、互いに密接に交流しながら歴史的に展開してきているのである。」P29—30

よく論じられる①と②とは別に③を設定し、分析を進めている点が興味深い。その明治期における成立だけでなく、それ以降、とくにそれが隆盛を極めているといえるほどの現代まで視野に入れて分析がされている点に強い関心を抱いた。それは、近年のエイサーについての分析のところ、連載の何回目かで、もう一度みてみたい。

著者は、この三つの相互関係に注目して述べているが、ここでは①と②の関係についての叙述を紹介しておこう。

「A. 古典芸能と民俗芸能の交流

沖縄本島各地に伝わる臼太鼓（ウスデーク、ウシデークなど）には、琉球古典音楽と共通する旋律が数多く伝承されている。これは本書の第三章で検討するように、古典音楽の成立において臼太鼓との間に密接な関係が存在したことを暗示している。また、沖縄における最古の三線楽譜とされる『屋嘉比工工四』（一八世紀成立とされる）には、沖縄各地の民謡曲が掲載されている。このことは、地方の民俗芸能としての民謡が王府の音楽家の手によって古典音楽化される過程を示しているとも考えられる、

その一方、近世琉球期に首里の士族層において成立展開した琉球古典舞踊や組踊が、近世末から近代にかけて沖縄の各地に広く伝えられ、ムラ踊りやムラ遊び、豊年祭など地域の祭りの中で、すなわち民俗芸能的脈絡の中で演じられるようになってゆく。これなどは、古典芸能から民俗芸能への伝播・影響を示す事例である。」P29—31

歴史分析の際、階層身分関係にも着目してきた私には、大変興味深い指摘だ。このことについては、この連載でまたいくつか紹介することになる。

2. 「第二章 神祭りと芸能」 沖縄における旋律など 2014年02月16日

第二章は、私にとっては、出会うことがほとんどない「縁遠い」ものと感じるのだが、沖縄把握にとって重要だと思う。しかし、ここでは、2カ所のみを紹介にとどめる。

「沖縄本島および周辺離島地域には、首里王府が主導した農耕祭祀としてウマチー（御祭）がひろまっている。」P43

いまでも、暦にはよく記載されているウマチーが首里王府が主導したものとは知らなかった。

次の記述は、全くの専門外の私には、理解の枠をこえるのだが、それにしても興味深い。紹介文の

冒頭に出てくる小島は、小島美子さんのことだが、今から20年以上前に、小島さんの日本音楽に関するNHK講座本を読んで衝撃を受けたことがある。小島論を含んだ次の指摘も刺激的だ。

「小島は、主に旋律の音組織の観点から、地方の祭祀で歌われるウムイやキューナについて、琉歌に代表される抒情的歌謡と共に隆盛した沖縄（琉球）音階の後世的影響も受けつつも、基本的にはそれ以前の性質（律のテトラコルドや律音階の変種）を保持しているものと考えている。この考え方は、こんにちの沖縄の民俗音楽研究においても基本的には踏襲されているとあってよい。しかし、この「後世的影響」を具体的にどのような過程として考えるかが問題となってくる。また、地方のウムイやキューナが、琉球文学歌謡史における呪禱的・叙事的歌謡の段階を示しているのは疑いえないとしても、それを単純に古層や基層として考えてよいかについては検討が必要である。

音楽学者の金城厚は、沖縄本島各地に伝わるウムイやキューナの中には、軽快で単純な旋律だけではなく、一方で非常にゆったりと歌われる長大な旋律が存在することを指摘し、それが王府に伝わるオモロ唱法ともなんらかの関係があるのではないかとしている（中略）。つまり地方のウムイやキューナは、たしかに沖縄音楽の古層・基層の要素を濃厚に残しつつ王府の祭祀歌謡オモロとも根源では繋がり、さらには十五世紀以降の琉球国成立以後の歴史的展開の過程においても、地方のウムイやキューナと王府オモロの間に相互的な関係があったと考えられるのである。」 P 77-78

これらの、音楽とくに旋律など曲にかかわるものの由来・歴史的変化、そして王府と地方とのからみの記述は興味深い。従来の政治史制度史社会史を中心にした一般史ではなかなか登場しない歴史の深部とも言うべき点での探究は興味深い。社会的政治的影響が読み取りやすい歌詞に比べて、曲の方は社会的政治的なものが読み取りにくい。それだけに、私は関心をもつ。

三〇数年前のことだが、著者が属していた東京芸術大学のゼミの教師である小泉文夫さんの沖縄での講演に強い刺激を受けたことを思い出した。小泉さんが、ハーモニーが美しいアフリカの部族の歌を聴きに行ったが、期待に反して、強烈なユニゾンで聴かされてショックを受ける。しかし、首長が帰った後で、部族の人々は美しいハーモニーを聴かせてくれたという。

この講演で、当時、教育の世界で、支配とか権力とかに対抗するハーモニーのようなことを探究していた私には強い刺激になり、小泉さんの本を2、3冊読んだりもした。

3. 「第三章 沖縄の女性の踊り歌 臼太鼓」 王国支配との関係

2014年02月18日

臼太鼓について、私は、2、3年前に奥武島で拝見した以外、ほぼ無知だった。本章を読んで、臼太鼓について知るだけでなく、大変重要な示唆を得ることができた。

私に関心を抱いた主な点だけを紹介しよう。まず章はじめに概観が次のように述べられる。

「かつてムラに生まれた女性は一定の年齢になると必ず臼太鼓に参加したことから、女性の加入儀礼としての意味も持っていた。また「恩納節」、「宇地泊節」など、節名が古典音楽と共通する曲が多く旋律の働きも共通していること、また歌詞は琉歌形式（八八八六）が多く歌われることなど、琉球古典音楽の源流と成立を考えるうえで重要な芸能である。また、神祭りの場での舞踊的所作と、舞台芸術として発達した古典舞踊の間をつなぐものとして芸能史的にも大きな意味を持っている。」 P 9 1

各地の村々で一定年齢以上のすべての女性を対象にしたもので、その一部が今でも残っているということだ。私が住む近辺では奥武島以外に残っているところは珍しい。そして、古典舞踊とかかわるとなると、宮廷つまり王権とのかかわりを推理させる。そのことにかかわって、次のような記述がある。

「注目したいのは、それが定期的なことなのか、あるいは稀な機会なのかは別として、庶民の女性の踊りである臼太鼓が、国王の前で演じられる機会もあり得たということなのである。」 P 1 0 3—4

「王権との関係、さらにはそれ以前からの全沖縄的な名所旧跡に関する叙事的内容の歌詞が歌われることが臼太鼓の曲の大きな特徴となっているのである。」 P 1 1 4

そして、本章の「おわりに」では、次のような注目したい記述がある。

「もし、臼太鼓の成立が、琉球国以前の三山時代やグスク時代にまで遡るのであれば、当然北山文化圏のような領域内での文化的まとまりや共通性を、臼太鼓という芸能も反映しているということになるであろう。

もう一つの課題としては、沖縄本島全域に分布する臼太鼓は、はたして中央（首里）から地方へ伝わって行ったのか、それとも地方から中央（首里）へ伝わったのかという問題である。もし中央（首里）から地方へという流れが優勢であるとすれば、首里の王権にみられる聞得大君／三平等アムシラレ／地方ノロという宗教組織の階層構造とも何らかの関わりがあるのではないか。こうした首里王府から各地方のノロへという、王権を支える祭祀の階層的なシステムを通じて、臼太鼓のレパートリーも中央（首里）から地方へと伝播していったという伝説が成り立つかもしれない。沖縄本島各地の臼太鼓の旋律同系曲においては、「宇地泊」（中山の要港）や「首里天じゃなし」（国王）など、国家にとって重要な事跡を歌う曲が本島各地に伝播しているという事実は、この仮説を裏付けていると思われる。」 P 1 3 8—9

となると、王権が地域支配として、神組織整備とからんで臼太鼓を広めたということになる。そこで、それ以前に村々にあった臼太鼓の「前身」的なものの存在があるのかどうかを検討点として登場する。それは、冒頭引用にある「神祭りの場での舞踊的所作」という指摘とからんでくる。そうしたものを、王権が再編して臼太鼓として整備し、村々に広めたのだろうか。それは、王権がノロを軸にする神組織整備と並行するということになる。

そうした「前身」的なものがないとすれば、王権は、どこから導入したのか、ないしいかにして創作したのかが問題になってくる。

いずれにしても、大変興味深い話だ。研究の進展に期待したい。

最後の引用の冒頭の「北山文化圏のような領域内での文化的まとまりや共通性」といった地域特性に関わる問題については、次回紹介しよう。

4. 臼太鼓の地域差異など 2014年02月24日

前回に続いて、臼太鼓だ。著者の調査分析には、注目すべき点が大変多い。その中でも、地域差異にもとづくものが興味深い。並べていこう。

「沖縄本島および周辺離島の臼太鼓の様式を大きく分けると、テンポが速く体の動きがダイナミックな北部様式と、テンポが相対的に遅く体の動きもゆるやかで、扇や四つ竹など小道具を使う中南部様式とに大別できる。北部様式には二組で歌を掛け合う地域もあり、奄美諸島北部に広く分布する八月踊りとよく似た芸能を持っている。一方中南部様式は、近世琉球期において首里の士族層によって育まれた琉球古典舞踊とのなんらかの様式的影響関係を想像させる。この北部様式と中南部様式の対比は、芸能史的には北部の方がより古く、奄美諸島の八月踊りととの身体的共通性を伺わせる（もちろん女性だけの踊りと、男女で踊るという根本的な違いはあるが）。中南部の動きのゆっくりした、採物（四つ竹、扇など）を使用する踊りの様式は古典舞踊などとの影響関係を思わせることから、比較的成立時期が新しいのではないかと考えられる。」 P 110

この地域差は色々な面で表れるが、まず「文化圏と歌詞の詞形」について紹介しよう。

「北部琉球圏対南部琉球圏の対比は次のように示されるだろう。

- ・琉歌形式（八八八六）の歌詞で歌う（即興的な歌の掛け合い）

←→

長歌形式で数十番以上の詞章を歌う（長々とした物語を歌い継ぐ）

この対比から逆に言えば、踊り歌の中に八八八六の琉歌を主な詞形として歌うという要素は、おそらく一六世紀初頭よりもかなり以前からの北部琉球圏内における歴史・文化的蓄積と交流によって育まれてきた歌の文化だということである。

奄美諸島北部の詞形に見える七七七五形は、薩摩藩の奄美侵略以降、薩摩経由で日本本土の歌詞形式（近世小歌調）が伝わったものである。ただ、八八八六の琉歌形式とは各句が一シラブルしか違わないため、同じ旋律で両方の詞形を歌うことはそれほど困難なことではない。」 P 131

また、使用する太鼓の地域差についての歴史的視点をもった分析が興味深い、紹介は割愛させていただきます。

次に、「性別の問題」を紹介しよう。

「本来沖縄本島地域にも他の島々と共通して男女で歌い踊る芸能が存在していたところに、歴史上のある時点で首里王府（あるいはそれ以前の王権）による政治社会的な命令・強制によって女性の芸能に転換させられた。そのことによって今日の女性のみの臼太鼓が成立したとは考えられないだろうか。

沖縄本島各地では、いまでもムラ踊り、マール遊び、豊年祭など、その地域の夏の大きな折目に行われる重要な祭りにおいて、組踊や琉球舞踊といった古典芸能が演じられている。こうしたレパートリーの地方への伝播は、近代からそれほど遡れないようであるが、男性中心主義的な儒教文化の影響のもと、すべて男性だけで演じられてきた（近現代から女性も演じられるようになった）。これが女性だけで踊られる各地域の臼太鼓と著しい対比をなしている。ここには演じられ始めた時代の差、すなわち琉歌形式の成立よりもさらに遡りうる臼太鼓と、近世琉球の後期から近代にかけて地方に伝播していった古典芸能との間の時間的落差がある。しかしこの「男性：舞台での芸能＝古典芸能 ←→ 女性：庭・広場での芸能＝臼太鼓」という対比の図式は、沖縄の各地域における民俗芸能のあり方を考える上で重要な問題である。」P133-4

その次は、「歌唱形式」を紹介しよう。

「各事例について歌唱形式の面からみると、全体的に交互唱あるいは音頭一同（リーダーが一節を歌ったら一同がそれを繰り返す）が多いことが分かる。奄美から沖縄、宮古、八重山に至る島々では、交互唱あるいは音頭一同という二つのグループでの歌の掛け合いが基本的な歌唱形式であると言えそうである。この中にあって、沖縄本島中南部臼太鼓の斉唱というのは異例である。沖縄本島北部の臼太鼓に交互唱も見られることから、ある時代、おそらく琉球国時代のどこかの時期に交互唱から斉唱へと変化したのではないかと想像できる。沖縄本島中南部の臼太鼓は、踊りの採物（扇や四竹など）の使い方や、腰の上下動をあまり行わずなめらかに旋回することなど、近世琉球期以降に発展した琉球古典舞踊（特に女踊り）との影響関係を強く想像させる。こうしたことから、斉唱となることで南島の島々の踊り歌に一般的な歌掛けのな性格が失われたのは、比較的新しい近世琉球期以降のことかもしれない。」P134-5

この「交互唱から斉唱への変化」については、1970年代後半に聴いた小泉文夫さんのアフリカ部族の事例紹介を思い起こさせてくれた。支配が人々の歌形態に決定的な影響をもたらす、ということなのだ。

さて、これらの紹介を、並行して連載している沖縄音楽教育史のなかで紹介している三島わかな論文の「音楽内」と「音楽外」というカテゴリーを転用して、「芸能外」「芸能内」というもので考えてみた

くなった。「芸能外」的なものから強い影響を受けた中南部と、それほどでもない北部ということになる。

とすると、中南部では、「芸能外」的なものの受け入れをどのようにし、その際の抵抗がどうだったのか、また受け入れたとしても、部分的にせよ、地域独自なものをどうつくりだしていったのか。

さらに「芸能外」的なものの受け入れが少なかった北部では、どのようにして受け入れを少なくする形でやり通してきたのか、また「芸能内的」のものをどのようにして継承ないしは創造してきたのか、そういった点へと分析はすすむだろう。

しかし、今日の時点で、史料制約のために、その研究は極めて困難だろう。とはいえ、そういった問題関心だけは持ち続けたいものだ。

5. チョンドラー

2014年02月27日

今回は、「第四章 遊行芸人チョンドラーの足跡」の紹介と、私なりのコメントだ。

本書は、チョンドラーについて、以下のように興味深い叙述を繰り広げる。

「彼らはいつどころか日本本土から沖縄の島々に渡り来て、五穀豊穡と子孫繁栄を言祝ぐ万歳や死者を供養する念仏を唱え、フトウキと呼ばれる人形を遣い流浪して歩いた。もともとは京の都から来たという言い伝えもあり、京太郎と書かれる。彼らが長い時をかけて沖縄の島々を歩くうちに、各地域の青年達に念仏歌を教え伝え、それが今日のエイサーの原形となっていた。沖縄本島エイサーの基本的楽曲である「七月念仏（継親念仏）」はチョンドラーからエイサーに伝えられたと考えられる。つまりチョンドラーはエイサーの源流といえるのだ。」P144

「日本本土の操り人形系芸能と人形劇の研究者である宇野小四郎」の研究を次のように紹介する。

「沖縄のチョンドラー（京太郎）は日本本土の浄瑠璃以前の人形劇史を解明する上でも貴重な存在であるとしている。チョンドラーの伝承する念仏系歌謡に関しては、「沖縄各地に分布している念仏系の歌謡について、これらをすべてチョンドラーの関与があると考えerことは適当でない」とする。さらに袋中上人が琉球に伝えたという説を採って、「京太郎が持ち込んだという考えは一応ご破算にしてよいと思う」としている（宇野一九八四、二七頁）。」P159

「チョンドラーの伝える「継親念仏」は、沖縄において祖先供養・儀礼の始まりを説く起源説話としての性格に留まらず、日本中世の説話や物語と共通の性格を有する物語歌謡であると位置づけることができよう。」P168

玉城金三が、「大正初期から昭和前期にかけて広範囲にわたって、舞踊を始めとして数々の芸能を指導・伝授していることが分かるのである。こうした芸能の中でも、チョンドラー系の芸能を沖縄本島

北部の各地に伝授したという点で、玉城金三は近代沖縄の芸能史の中できわめてユニークな役割を果たした芸能者であったといわねばならない。」P178

「もともと日本本土から琉球にたどり着いたチョンダラー達が伝承していた念仏系歌謡が沖縄各地域の青年達に伝わり、盆の時期に青年達が地域の家々を念仏歌を歌って回る習俗となった。沖縄本島南部に伝承が残る念仏エイサーや、八重山各地のアンガマー（中略）がこれにあたる。芸能研究者の宣保榮治郎によれば、こうした念仏歌を歌いながら家々を回る習慣に、若者達のモーアシビ（野遊び）での流行り歌（民謡）が徐々に加わり、手や足の舞踏的所作も徐々に華やかなものとなり、現在のエイサーの原形となったという。」P181

「沖縄の念仏系詞曲と本土の浄土系仏教思想との影響関係も解明してゆかねばならない。今のところ直接の原典は指摘されていないが、たとえば「春咲花」、「花ぐだん」などに表現された死後の肉体の朽ちゆく過程の描写は、『来迎寺六道絵』に表現された死生観などと何らかの関わりが想像される。また「継親念仏」に見られるような、後生を訪問して再び此世に帰還するという世界観は、本土の説教節『小栗判官』等の異界訪問譚に現れた世界観と全く無関係ではないと思われる。こうした中世日本の思想や世界観との関わりについてもよりいっそうの追求が必要である。さらには、チョンダラー念仏系の中では儒教的色合いの強い「長者流れ」が、中国由来の「二十四孝」からどのような過程で沖縄の念仏系テキストの中に受容されたのかというような思想史的な問題も今後解明されてゆくべきであらう。」P190

チョンダラーやエイサーの芸能をめぐっての注目点を私なりに並べよう。

- 1) 本土各地、そして中国も含めて、地域的に、そして中世近世など時代的に、多様な文化表現と思想の流入交流の中で、展開されてきた。
- 2) スピリチュアリティにかかわる考えを多分に含んだ民衆の活動のなかで展開されてきた。
- 3) チョンダラー、玉城金三のような人々と、青年を中心とする地域の民衆たちとのかかわりの中で展開してきた。

6. 第五章 民族芸能エイサーの変容と展開

2014年03月01日

エイサーについては、多くの論究があるが、本書の面白さは、ここ100年ほど、特に戦後の、さらにとくに近年の変容について詳述し、かつ鋭い問題提起を行っているところにあるだろう。まず戦前までの論述をいくつか紹介しよう。

「エイサーの起源については諸説あり、（中略）しかし、盆を中心とした先祖供養の芸能としてのエイサーの中核をなすのが、「七月（継親）念仏」、「仲順流れ」、「親の御恩」などの念仏系歌謡であること

ははっきりしている。これらを沖縄各地に伝えた存在として、チョンダラー（京太郎）と呼ばれる流浪芸能集団がいる。（中略）彼らが沖縄の島々を歩く長い時間のうちに、ムラの若者達に念仏系の歌謡を教え伝え、それがこんにちのエイサーの原形となったと考えられるのである。」P196

「(2) エイサーの近代における変遷

小林幸男（「エイサーの分類」, 一九九八）に従って、明治以降のエイサーの大まかな変遷を辿ってみると、以下のような流れになる。

明治中期から昭和初期には、念仏歌を歌い踊りながら門付をする念仏エイサーが沖縄全島に広く広がっていたが、既にその頃曲数を増やし振付けをするなど芸能的性格を強めたエイサーが本島中北部に混在していた。本島北部の女エイサーや素手の素朴な手踊りエイサーも、少なくとも明治半ばには基本的な形を整えていた。こうしたエイサーに一般の民謡曲が流れ込み曲数が拡大した背景には、次のようなことがあった。

- ・近代化・風俗改良などで野遊びの伝統が崩れ、野遊びで歌い踊るエネルギーがエイサーに転化集中した。
- ・ムラの青年の年齢階梯制が近代的な青年団、女子青年団に再編されるとき、芸能再編の機運も盛り上がった。
- ・那覇に商業演劇が生まれ、民謡を洗練・アレンジした雑踊りや歌劇や京太郎芸などが流行し、新たな民謡ブームがおこった。

明治末期の太鼓エイサーの状況は、先頭の太鼓打ちは人数もそれ程多くなく、「太鼓を手にした手踊り」といった所作で踊っていた。今日のような手踊りエイサーと太鼓エイサーとの明確な区分はまだそれほど大きくなかった。」P201

モアシビのことだと思うが、野遊びが崩れ「エイサーに転化集中した」という指摘は興味深い。では、シマにある他の民俗芸能は、影響を受けなかったのだろうか。あるいは、どんな影響を受けたのだろうか。

「沖縄本島中部では、トゥイケー（取り替え）といって、近隣の地域と年毎に交代で訪問し、エイサーを披露し合う習慣もあった。たとえば現沖縄市諸見里では、一九三七年頃まで近隣集落の胡屋、上地、大工廻で披露し合い、さらにそれ以前には越来ともエイサー交流を行っていたという。また、読谷村内でも同様のことが行われていた。これらは、ムラ遊びにおいて集落間で芸能を交流鑑賞するアシビトゥイケー（遊び取り替え）の習俗の影響を受けているとも考えられる。

こうした習慣によって、ムラの人々が近隣他地域のエイサーに触れることで、各地域のエイサーの技や演出に注目し互いに比較論評するなど、人々のエイサーに対する関心をかきたてる要因となつたであろう。」P206

各シマ固有の伝統的なものに閉じこもるのではなく交流協同するところが興味深い。それが、マス

メディア媒介ではなく、青年たち自らの取り組みとして大衆芸能的要素を生み出していく点が面白い。それは、次回紹介するが、戦後、コンクールのなものへの抵抗を示す伏線になるのかもしれない。

「本来エイサーは、戦前期には男だけで踊る集落と男女で踊る集落があった。(中略)男だけで踊る地域は基本的に士族系の集落で、男女で踊る地域は庶民(百姓)系の集落だったといえる。しかし戦後の青年会においては、青年男女が共に参加して青年会活動を盛り上げるために、もともと男だけで踊っていた集落においても従来の慣習を改めて、女性もエイサーに参加するようにした地区が多いのである。」P211-2

士族系集落の特性とその変容を示して注目されよう。

これらの叙述は、戦前までは、おおよそにおいてエイサーは民俗芸能として位置づけられるとってよかろうが、その変容のなかで大衆芸能的要素を含みこんでいく過程を示唆している。では、エイサーと、そのほかの棒とか村芝居とかの諸芸能とはどんな関係・からみあいがあるのだろうか。

複数の芸能を有しているシマでは、それら相互の関係はどのようなのだろうか。担い手、時期などの関係はどうか、また、地域差はどうか。興味をそそる問題が多くありそうだ。

また、ヤードイの大量増加に象徴される明治前半の社会変化、土地整理・金銭商品経済の圧倒的な流入・徴兵制実施・就学率の上昇などに象徴される明治後半の社会変化、金銭経済の浸透とともに景気変動の強い影響下におかれ村からの大量の人口流出などが生まれる大正期から昭和初期の社会変化などが、エイサーをはじめとするシマの民俗芸能にどのような変容をもたらすのか。逆に、民俗芸能の変容を、社会変化に何を投げかけるものだったのか。

こんなことに、興味津々になる私だ。こうした音楽芸能は、社会変容を時代先端的に示し、かつ時代変容を誘導するという事態さえありそうだからだ。

しかし、こうした問題についての史的研究は、史的研究だから当たり前といえれば当たり前なのだが、ひどく「後追い」になりがちだ。そんななかであって、著者のまなざしは、時代創造的にエイサーなどの民俗芸能を見ていこうとする鋭いものを感じさせる。

それは、戦後のエイサーの変容分析に鋭く表出されている。次回に紹介しよう。

7. クラブチーム型エイサーと青年会エイサー

2014年03月07日

エイサーの戦後展開の記述で、私が注目した4か所を紹介しよう。

「五〇年代から六〇年代にかけて、コザ市全島エイサーコンクール(一九五六年)、沖縄青年エイサー大会(一九六四年～)によって、エイサーが不特定多数の観客にアピールする、「見せる芸能」として大きく展開して行った。(中略)

沖縄ではエイサーが、必ずしも今日内外で語られがちな「伝統的」な「民俗芸能」として認知されていたのではなかった。エイサーは、コンクールの始まった五〇年代当時、太鼓の大幅な増加、戦後の

新民謡（すなわち創作音楽）の導入、新たなエイサー衣裳の確立、マスゲーム的な隊列の創出など、現代的な創作芸能の色彩がきわめて強かった。」P216

「エイサーの芸能はコンクールの場を通じて大きく変化してきた。そしてこの後、コンクールはさらに転機を迎える。コンクール審査員の評価に対して各エイサー団体が不満をもらし、大会運営に支障をきたすような事態が頻出した。これについてスポーツ社会学者の岡本純也は次のように述べている。

シマのエイサーの評価基準とコンクールの評価基準のぶつかりあいであったと考えられる。そして、その衝突の激化が競い合いのない＜まつり形式＞へこのイベントを移行させていった。

こうした状況から、一九七七年以降は全島エイサーコンクール、青年ふるさとエイサー祭り共に、コンクールからまつり形式へと移行していった。これは今から振り返れば、現代の沖縄らしさ（民族的アイデンティティ）を表現するにふさわしい「民族芸能」エイサーとはどうあるべきか、という新たな価値観を確立する産みの苦しみの道すじでもあった。」P213

「クラブチーム型エイサーの創作芸能としての性格が強調されることで、それに対抗して本来戦後の現代的芸能として創作性を持っていた青年会エイサーの伝統的性格や地域に根ざす民俗芸能としての性格が強調されるようになってゆく。沖縄市の全島エイサー祭りの方が、その観光誘致的性格などにより比較的早くからクラブチーム型エイサー（琉球国祭り太鼓）を参加させていたのに対して、ふるさと青年エイサー祭りの側では、平成六（一九九四）年に至ってようやく「創作芸能の部」という部門の設立に至る。沖縄ホップに主導される沖縄ブームの中で、クラブチーム型エイサーを参加させざるを得ないほど、クラブチーム型エイサーが沖縄の中で社会的に認知される状況になっていたということでもある。

平成一五（二〇〇二）年に、全国エイサーフェスティバルがヤングバンドフェスティバルと並んで設定された背景には、昭和五七（一九八二）年の琉球国祭り太鼓の結成以降、こうしたクラブチーム型エイサー団体が台頭し、さらに学校現場を通じて子供達へ爆発的に浸透し、沖縄県を超えて県外、海外にひろく波及して行ったことがある。今やエイサーは沖縄という範囲を超えて、全国的（あるいは世界的）に広がるメジャーな文化となったと言っても過言ではない。つまり八〇年代以降、こうしたクラブチーム型エイサーを通じて、青年団（会）によるエイサーというイメージとは異なるエイサーのイメージが、沖縄を超えて全国的に爆発的に広がりを見せた状況を背景としているのである。」P218-9

「よさこいソーラン系は、毎年音楽も踊りも新作を発表するというのが通例となっている。それに対して沖縄発のクラブチーム型エイサーは、固定的なレパートリーを上演するという芸態上の違いもある。」P239

これらの記述から示唆されたことを並べておこう。

1) 芸能の当事者自身が創造にかかわりやすいかどうか強い焦点になっていることである。その傾向は近年とくに目立つように感じる。それを、私は肯定的にとらえたい。

2) 多数の観衆が集まる場とかマスメディア活用とかいった大規模なプレゼンテーションが、これらの動向に強い影響をもたらす。とくに、1950年代後半から目立つようになった。とはいえ、近年では、それに陰りがみえているかもしれない。規格品の大量消費から距離を置き、「親しい関係のなかでの自分らしさの追求」といったことが、音楽芸能の世界にも大きなトレンドになりつつあるようだ。このことがエイサーにどういう軌跡を生み出しているのだろうか。

3) 音楽芸能の世界でも、アソシエーションとコミュニティとのからみが一つの焦点となっており、旧来の地縁的コミュニティの比重低下のなかで、アソシエーション的な要素を多分にもったコミュニティの模索動向が強まっていそうだ。

4) 大衆芸能的色彩をつよめることで、民俗芸能の再生産再創造がすすんできている。ついでにいうと、創作組踊の試みなど伝統芸能にもそうした傾向があらわれている、といえるのかもしれない。

5) こうした動向は、著者による伝統芸能・民俗芸能・大衆芸能という三つの分類枠組みに、新しいものが生み出されつつあるといえるのだろうか。さらにこの枠組みそのものを変えていく動向がすでに存在していることを示唆しているのかもしれない。

8. 奄美の民俗芸能論 男女ともに円陣で踊ることの歴史分析

2014年03月13日

「第六章 奄美の民俗芸能論」では、奄美の八月踊の、沖縄本島の同類のものとの比較での叙述が興味深い。

「城前田の八月踊りの舞踊的局面について、その特徴をいくつか列挙してみることにする。

- ・八月踊りは参加者で円陣を組んで踊る。参加者が三〇～四〇人になると、子供達を中心に、中にもう一つ輪を作って二重の輪になって踊る。さらに参加者が五〇人を超えると、太鼓（若い女性）が輪の中に列になって入って踊ることがある。」P298

「奄美諸島北部の八月踊りは、琉球列島の他地域の芸能とも深い関係を持っている。特に沖縄本島の臼太鼓とは芸能構造的に類似しており、芸能の源は同じ処にあると考えられる。芸能構造上の両者の共通性としては、以下のような点があげられる。

- ・踊り手が円陣となり、太鼓を叩きながら自ら歌い踊る。
- ・南島の夏正月において、集落の重要な折目の行事に踊られる。

(中略)

奄美諸島の八月踊りと沖縄の臼太鼓の異質な点としては、臼太鼓は女性のみで踊られるが、奄美の八月踊りは男女の掛け合いで歌い踊られるという点である。(中略)

ではこの異質性の発生は、いったいどれほど時間的に遡れるのだろうか。この異質性の発生は、古琉球期に沖縄本島を中心としてノロをはじめとしたムラの女性による祭祀体系が確立し、それが北部琉球文化圏全域に広められた時期と、何らかの点で関係があるのではないかと考えられる。それは沖縄における聞得大君を頂点とする祭祀制度の確立や、シヌグ・ウンガミ（海神祭）などの祭りの成立とも密接に関わるだろう。単純化して言うと、奄美にはノロ祭祀は伝わったが、男女の八月踊りは女性の踊りに変わらずに残った。そして奄美の八月踊りも沖縄の臼太鼓も、その後の時間の中で独自の展開を積み重ねてゆくのである。」P301-2

円陣で男女ともに踊るといふ、伝統芸能のかなり基層に存在するものが、王朝支配によって変化させられたことに、地域偏差があるなど、見事な分析推理がなされている。

現代では、八月踊、臼太鼓を継承している地域は減少傾向にあるが、にもかかわらず継承保持されている地域には、それを支えるどのような基盤があるのだろうか。

そして、今後それはどう変化・不変化していくのだろうか。

とくに私が強い興味をもつ男女の円陣踊がどうなっていくのだろうか。

それらには、継承ということだけでなく、現代的再創造ということがあるのだろうか。

途絶えていた地域で、現代的再興ということがありうるのだろうか。

今日人気を得ている大衆芸能は、こうした伝統芸能とどうからんでいるのだろうか、どうからんでいくのだろうか。

興味は尽きない。

これにて、本書の紹介コメントを終える。

三島わかな「近代沖縄の洋楽受容」の書評会

2014年02月23日

21日、県立芸大で書評会がもたれた。音楽・音楽史・一般史・教育史など多様な分野の方々が集って、いろいろと語り合う大変有意義な会だった。

ここで、私が語ったことの主ポイントをかいつまんで書こう。詳しくは、現在連載中の沖縄音楽教育史をご覧ください。

沖縄および沖縄人は、音楽について豊かな歴史的蓄積と、豊かな音楽習慣・能力・意欲・感性をもってきた。そこに、明治期に、まずは学校唱歌という形をとって「洋楽」が、権力的色彩をもちつつ導入され、それを沖縄人に浸透させようとする動きがあった。それは「近代」を主として「国民統合」という主題で展開したものであった。それに対して、単に「受容」という事ではなく、独自に対応し、その中で、沖縄なりの「近代」音楽を作りだす動きの先駆的なものが、明治末期以降生まれてきた。そこにおけるドラマを描きつつ、その特性と構造を解明しようとする著書である。そして、そのことを

通して、沖縄音楽の創造が、日本全体の「近代音楽」(いや世界音楽というべきかもしれない)の創造、ないしは「近代音楽」からの卒業ないしは再編の中でいかなる位置と役割を果たしているのか、果たしていくのか、という問いの基盤を作りだしている。

そうした極めてメッセージ性が強く、チャレンジングな著書である。そこをどう読みとるかと言う事は、著者だけでなく、読者側の課題、そして沖縄音楽界、さらには沖縄教育界の課題でもある。

ということで、本書の続編作業がどう展開していくのか、私は深い関心をもって見つめていきたい。

黒島精耕「ダートゥーダー探訪の旅—小浜島民俗歌舞の源流をたどる—」(2012年沖縄自分史センター刊)を読む

2014年01月12日

書店で見つけた本だ。著者とは40年前からの知り合いだ。数年前に、久々に八重山訪問した際に、20～30年ぶりに再会し、小浜島を案内していただいた。その時、彼の故郷小浜島にかける思いだけでなく、諸活動への熱を感じた。しかし、その際、このダートゥーダーの話は私の記憶には残っていない。

ダートゥーダーは、何百年にわたって小浜島でおこなわれてきた民俗歌舞であるが、70年間ほど途絶えてきた。そして、彼も含めて多くの人の活動のなかで再興されるようになったものだ。しかし、その「源流」がわからないものであり、その源流を探訪するなかでの発見を物語風に綴ったものが本書だ。

結論的にいうと、熊野の修験道とのかかわりのなかに、源流を見いだしたということだが、詳しくは同書をご覧ください。

ライフワークに近い情熱的取り組みの末の発見であり、こうした民俗歌舞がもつドラマ性は魅力的だ。

ところで、近年、この他にも、長期にわたって途絶えていた民俗歌舞を再興する動きが目立つ。

沖縄における民俗歌舞の多くは、近世ないしはそれ以前のグスク時代に起源を持ちながらも、19世紀後半から20世紀はじめにかけて、激動の嵐にさらされる。

19世紀中ごろより、首里士族がもつ芸能との交流が盛んになるなかで、それらを村芸能として取り入れていく動きが広汎に行われる。それらのなかで、それまでのものの活発化ないしはその逆の衰微といった、激しい動きがみられる。

そして、中央政府の統治、近代学校が、それらに変容をもたらす。さらに時代が下ると、マスメディア登場による変化も作られていく。

また、産業構造の変化を伴うシマ共同体の変化に伴う変化も生まれる。

こうした変化の嵐の中で、さらに戦争・戦後米軍統治という嵐による強い圧迫などを受けて衰えていくもの、にもかかわらず、なお逞しく生き残るもの、そして、嵐があるがゆえに、そうした芸能にアイデンティティや生きるエネルギーをえていく動向も生まれる。

しかしながら、1960～1970年代には、これらの民俗芸能を支える構造が弱くなり、弱体化し途絶える例が増える。産業構造の変化にともなうシマ共同体の弱体化、マスメディア活性化により、地域芸能の果たす娯楽役割の比重低下、さらには、学校などによる方言（沖縄語）を含む「沖縄的なもの」を抑圧する動きの強まりがある。

にもかかわらず、民俗芸能的なものを再創造しようという動きが潜在的に継承されたところも多く、そうした動きが、90年代～00年代に表に出て、沖縄的なものを復活、ないしは新たに創造しようとする動向を作り広げていく。

こうした流れの中で、ダートゥーダー復活、そしてそれにかけてきた黒島さんのエネルギーを、歴史的にどう評価していくのか、そしてまた今後の創造活動がどう展開されていくのか、興味は尽きない。

そんな意味で、黒島さんたちの活動に声援を送りつつ、見守っていきたい。

小熊英二「＜日本人＞の境界」（新曜社1998年）を読む 2013年11月16日

700ページを超す大著だ。著者は、他にも何冊かの大著を出している。以前から他の書籍などで著者の論が気になっていたが、初めて読む。

副題が「沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで」とあり、帯には「近代日本の100年にわたる「植民地」政策の言説をつぶさに検証し、＜日本人＞の境界とその揺らぎを探求する」とある。

読むと、沖縄近代史についても、知ってはいることが著者のような視点から見直すと新しい視野が開ける個所、初めてお目にかかる個所などが、目白押しだ。

また、私自身が、40年余り前から考え続けてきた、「日本とは何か」「沖縄とは何か」「民族・エスニックとは何か」「国民国家とは何か」といった問題が、著者なりの探究で明らかにされる。その点で、興味深い著書であった。大著であり、問題提起が深いだけに、今ここで直ちにコメントすることは難しい。時間をかけて受けとめ考えたいことが、これまた目白押しだ。

また、本著には、複数の私の著書も注記されている。もし本著が、1972年ごろまでではなく、1980年代までを対象としていたら、当時の私の主張あたりも論及されそうな感じさえする。

それらの点で、改めて、沖縄・日本把握をめぐる、私の認識を深化させる手がかりにもなりそうだ。私自身は、「日本とは何か」「沖縄とは何か」「民族・エスニックとは何か」といったテーマにかか

わって模索していた1970~80年代を経て、80年代末から90年代にかけて、「異質協同」という用語を軸にして、それらをとらえ始めるようになった。それは「国民国家」的発想を相対化することと並行していた。

だが、1990年代から10年余り、沖縄から離れ沖縄についての思考を保留していた。その時期に、本書が出版されたのだ。そして、近年、沖縄について考える事を再開している。その思考にあたって、刺激溢れる本著だ。改めて考えていこうと思う。

梅木哲人「新琉球国の歴史」(法政大学出版局2013年)を読む

2013年10月18日

店頭で見つけた新刊本。グスク時代から始まって、土地整理にいたるまでの琉球国の歴史的特質をとらえるうえで有益な書籍だ。とくに、著者が鹿児島島の大学で研究したおられたこともあってか、薩摩を一つの焦点にしつつ、時の日本の政権との関係、そして中国をはじめとする諸外国との関係で琉球史をとらえる点で、興味深いことが多い。

そんな点について、いくつか書きとめておこう。

・地割制、つまり土地の共有制があり、「本州地域に見られる土地支配と主従関係を契機とした封建社会への進化の契機を、沖縄琉球はまったく持たない社会構造であったのである。」P5

・琉球王国成立をめぐる、近年新説を提起している吉成直樹氏の見解について、「国家成立とその後の歴史展開についての想定がない。国家成立とはすべての人々が結びつくことでもあるが、在地勢力との関係が視野がなく、拠点的な国家形成論として意識されているようである。」P16と論評している。

・17世紀における家譜作成をめぐる、徳川氏や島津氏と比較しながら論じ、「琉球における王家の系図編纂は近世日本の家秩序の整備ということとは別に、国王の冊封にかかわる面を持っていた」P31-2と指摘する。

・近世における耕地面積の増加について、本州を中心とした日本と近世琉球とを比較検討している。

・明治に入ってから「旧慣温存」政策について、「何らかの政府の意図をくもうとする見解があるが、実際には(中略)改革できなかったものであり、温存というより史料にあるように存置であったのである」P213という見解を提示している。

これらについて、当否にかかわるコメントを書くほどの用意は私にない。ますます興味関心が深まるばかりである。

上里隆史『海の王国・琉球 「海域アジア」屈指の交易国家の実態』 を読む

1. 港湾都市那覇を軸にした琉球王国成立という新鮮な学説 2013年07月14日

書店で見つけた上里隆史『海の王国・琉球 「海域アジア」屈指の交易国家の実態』（2012年洋泉社）を読む。

まず結論の章、『第六章 古琉球とは何か』冒頭箇所を紹介しよう。

「本書では「海域史」という視点から、古琉球の歴史をみてきた。国境を越えた海の世界の動向が南西諸島の歴史にいかに関与を与えたかが実感できたであろう。

その交流のメインステージとなったのが港湾都市・那覇であった。南西諸島にはほぼ唯一形成されたこの港湾都市は、十四世紀中頃以降の中国内乱による日中間航路の変更という予期せぬ事態が契機となり、南西諸島間を航行する民間商船の停泊・居留地として使用され始めたと考えられる。

そして那覇が居留地として選ばれた要因にはサンゴ礁に囲まれた沖縄島の自然環境があった。沖縄島で外洋航海の大型船が安定・恒常的に使用できる港湾は限られていた。こうした動向は本来、琉球の地元権力とは別個のものであったと考えられる。

南西諸島内部の「異国空間」といえる港湾都市形成が端緒となり、現地権力の介入・整備が図られ、那覇を中核として沖縄島における国家形成が加速したとみられる。

「シマ（集落）」と島嶼を単位とした南西諸島社会のなかで、政治・経済・文化的拠点が一極集中する港湾都市の那覇、付属する政治都市の首里が形成され、そこを中心に海上ネットワークでつながる「琉球王国」の成立が、南西諸島社会の上に覆いかぶさった。

王国誕生の最大の要因は、沖縄島那覇における港の形成であったといえる。

もちろん沖縄島内部で展開した歴史がまったく関与していなかったわけではない。十四世紀には沖縄島中部に、後の「王統史観」の系譜につながる浦添グスクを中心とした強大な政権がすでに存在しており、グスク時代以来の伝統社会とそれらに立つ首長層・按司たちの発展が王国形成の前提となっていたことは確かだ。しかし国家形成の動きが急激に現れてきたのは、那覇登場と同時期の十四世紀中頃以降のことである。

対照的に、奄美や先島地域では沖縄島と同じく首長層が各シマを束ねる社会であったが、後世伝承されるような広域支配の「王」あるいは対外的に認知されるようなかたちで王権が成立していない。

とくに奄美は「キカイガシマ」と呼ばれグスク時代成立に大きなインパクトを与えた当時の先進地

域であったにもかかわらずである。これは南西諸島社会が本来国家を形成する段階にまで到達していない状況下で、国家形成の急速な進展の要因が沖縄島における港湾都市形成という、外からのインパクトによって生み出された変化にあったことを示唆する。」P211~3

「従来の」というか、私が第一次沖縄史学習をした一九八〇年代までの支配的な諸説とは大きく異なる。このブログでも何回か紹介した一九九〇年代以降の目覚ましい研究進展の成果を著者なりに総括したものであり、旧来の説からみれば、大胆な説である。「政治・経済・文化的拠点が一極集中する港湾都市の那覇、付属する政治都市の首里」という論などは、首里中心に考えてきた人にとっては青天の霹靂に近いものだろう。

おおまかにいうと、琉球王国成立の主軸として「内発的展開」ととらえるのではなく、「外在的刺激」、ないしは、くだきたいい方をすると、外在と内発との「チャンプルー」によるものととらえるのだ。

無論、そうした新説にも、いくつものバリエーションが生まれてくるだろう。それらの中にあっても、重要な一説になるだろうと推測される上里説だろう。

2. 「外」から刺激で『早過ぎ』の『琉球王国』成立 2013年07月18日

前回紹介した記述をさらに進むと、次のような記述に出会う。

「港湾都市形成にともない琉球の王国形成と交易国家としての成長に決定的な影響を与えたのが、周知のように明朝との冊封・朝貢体制への参入であった。琉球優遇策は、明朝が海域世界の秩序化を図り、倭寇をはじめとした民間交易勢力の「受け皿」として琉球を有力な交易国家に育てる目論見があったと考えられているが、これは換言すれば、琉球の港湾拠点・那覇の民間交易勢力をいかに明朝のオーソライズする現地王権内部に取り込むかという試みであったといえる。実際、琉球王国の外交・交易活動は那覇の外来勢力にほぼ依存するかたちで進められたことがそれを裏付ける。

そして沖縄島の三つのグループにまとまっていた現地権力は、「世の主」という在来の支配者観念に加え、明朝から対外的に「三山」と認知され、朝貢体制のなかの「王」観念が輸入されることで新たな王権意識が芽生えることになった。くわえて「王」の名のもとで行われる朝貢貿易は莫大な富をもたらし、「三山」に求心力を集めることになった。

対外的に「三山」と認識された、按司を基礎とする三大勢力の実態は「“王国”に君臨する王」という外からの認識とその実態に齟齬があったが、むしろ現地権力の「世の主」たちは外からの認識を自ら受け入れ、「三山」という政体を実体化していったのである。

やがて那覇を擁し華人勢力と強く結び付いた中山が沖縄島を統一し、「琉球王国」を誕生させた。」

P213-4

外的刺激によって、過剰に早く作らされた王国だったのだ。

そして他国との付き合い方も、相手に合わせた多様さをもつことが本書のなかで紹介されているが、その理由として次のようなことが書かれている。

「琉球王国はまさに他国の外交ルールを《我がものとして利用》することで成り立つ交易国家だったといえよう。“名を捨てて実を取る”この方法は、小国が他国と渡り合うための最善の手段であったといえるかもしれない。」P216

なるほど、と思う。

このような事情のために、列島内部における国家整備をすすめ、「国家」らしくなるのは、数十年後の第二尚王朝に入って、一定期間かけた後になるのだ。それまでの間、『内戦状態』が頻発するが、それは、統一されきった国家内部での内戦というよりも、国家統一過程での戦闘状態というべきなのだろう。

私にとって、示唆に富む記述が続く。

3. 15世紀後半からの対外交易縮小と第二尚王朝による国家整備

2013年07月21日

前回『早すぎた琉球王国の成立』について書いたが、本書によると、それには外的事情が強いということだった。しかし、15世紀後半になると、事情が変わってくる。そのあたりについて、次のように書かれている。

「国内政治と外交・交易に強い影響力を持つ華人勢力が、十五世紀中頃以降の貿易衰退によって彼らの求心力が衰え、代わって琉球人の主導による政治・交易体制の再編が行われたことが想定できる。

朝貢貿易が決定的な下降局面に入った一四六〇～七〇年代に成立した第二尚氏王朝も、背景に外来勢力の求心力低下と琉球地元勢力による既得権益の奪取があったのではないだろうか。王となる金丸が「御物城御鎖之側」という那覇行政と貿易を掌握する役職に就いていたことも示唆的である。(中略)

琉球は対外貿易を前提とした社会を作り上げていたが、朝貢貿易が衰退する状況で従来のシステムが円滑に機能しなくなった。そこで王府は各島嶼からの貢納制をより強化し、より安定した再分配構造を再構築する試みだったのではないかと指摘されている。つまり「外向き」から「内向き」の仕組みへと転換することで王国の求心力を維持しようとする動きとみることができる。

王府軍による一五〇〇年(弘治十三)の八重山征服戦争(アカハチ・ホンガワラの乱)は、沖縄島各地に割拠する按司層を動員して王府中央組織(ヒキ制度)に取り込むためのテコ入れになった可能性もあり、離島への軍事行動が沖縄島における王府の中央集権化を達成する役割を果たしたと考えることもできよう。」P174-6

こうしたなかで、外との交易の占める比重低下とは対照的に、内での農業生産の占める比重が高まり、それに見合う国内体制の整備もすすみ、内側において国家らしく、ないしは農業国家らしくなっていく。

そして16世紀に入るとますます外との交易での不振が進むが、その背景には、当時の東アジアの海上世界の変動がある。それには後期倭寇やヨーロッパ勢力の動向がからむ。

それらについて、次のような叙述がある。

「十六世紀の銀をめぐる交易ブームの主役となったのが、民間の交易勢力、いわゆる「倭寇」である。この時期の倭寇は十四世紀頃の倭寇と区別され「後期倭寇」と呼ばれる。「倭寇」とは一般的に「日本の賊」を指しているが、その実態は「武装した民間の多国籍商業集団」といったほうがよい。

倭寇は日本人のみならず、中国・朝鮮、またはポルトガル人など、海域世界で生きるさまざまな民族で構成されていた。とくに十六世紀の倭寇は中国出身者がその大半を占めていたとされるが、民族や所属が必ずしも明確ではなく（中略）。

海商らは自衛のため武装して交易活動を行っており、海賊なのか一般の商人なのかを区別するのは難しかった。彼ら武装海商は、普段は通常取引をしていますが、ある場合には略奪・暴力行為を働き、海賊に変身することもあった。

（中略）

十六世紀の浙江省・舟山群島（双嶼など）では、福建商人がヨーロッパからインド洋を越えて進出してきたポルトガル勢力（彼らは明朝から新種の倭寇とみなされていた）を引き入れて拠点とし、中国人や日本人なども入り交じって大規模に私貿易活動が行われていた。

彼らの活動範囲は実に日本から東シナ海、東南アジア海域にわたる。」P178-80

こうして琉球王国は激しく動く東アジア海上世界での存在感を低下させていく。17世紀に入ると幕藩体制下の薩摩藩による実質支配下に組み入れられる。対外交流も、薩摩管理下の限定的なものになっていく。一般民衆の生活レベルでの直接的な人的海外交流は希有のこととなる。

4. 内外の様々な組み合わせから琉球・沖縄ができてきた 2013年07月25日

本書は、沖縄・琉球把握をめぐって、以下のように注目すべきものを提起している。

「そもそも現代の我々の認識のように、この当時、琉球の地元民と外来者を「自己」と「他者」とに区別する明確な意識があったかも疑問である。海域世界に生きる人々は曖昧な帰属性、多様なアイデンティティを持っていた。琉球はそのただなかであって、彼らが活動する場でもあった。「他者」を活用するのは、たとえば室町時代に京都に居住し対明貿易に活躍したムスリム出身の楠葉西忍、薩摩島津氏の側近だった華人の許儀後や郭国安、徳川家康に仕えたウィリアム・アダムス（三浦按針）など、

実は日本も例外ではない。ただ琉球の場合、海域アジア有数の交易拠点であったことから、その度合いが日本より色濃く表れていた。P217-8

「「出自」や「起源」を強調する議論には大きな陥穽が潜んでいる。たとえ琉球・沖縄文化が日本と同系・同質の側面があったとしても、それは「日本の古層」が外界と遮断されまるでタイムカプセルや真空パックのように営々と保存・純粋培養され、近現代の観察者の目に届いたものなのではない。数百年の時間のなかで、「日本」的ではない要素、そして新たに「日本」から入ってきた要素とも絶え間なく習合し、変質をとげ、本来のそれとは似て非なるものとなったことは、これまで述べてきたことから明らかである。」 P226

『日本の古層』といわれるものさえ、グスク時代以前の多様な移住・交流のなかで形成されてきた、とも言えよう。

そして、東南アジアの事例を参照しながら、次のようにも指摘する。

「琉球の政治・文化・社会のあらゆる事象は「内」「外」のさまざまな要素を組み合わせ、総合することで全体として初めて機能したのであって、そこに内在する日本・中国どちらの純粋な《原理的要素》を抽出したところで、それらは全体のなかのバラバラになったパーツにすぎず、そこに琉球の「本質」を探るうとしても、すでに琉球のものではなくなっている（そもそも日本の歴史・文化も本当は《原理的》なものではありえず、外からの借り物を総合して成り立っているのだが）。

「日本」か「中国」かという《原理的オリジナリティー》を抽出し、起源や出自で琉球の歴史をはかることがその「本質」を見出すことである、という考えはもうやめにしたほうがいいのではないだろうか。どのような文化が流入し、どのような人々が来ようとも、南西諸島に住む人々は数百年の歴史の過程でそれらを選択的に受容、自己流に改造し、「琉球」と呼ぶしかない主体を自らの手で作り上げた。それこそが琉球の独自性、「本質」なのである。

沖縄の個性を軽視し、観念的な「日本」に画一的に塗りつぶすのではなく、歴史的に形成されてきた現在の「日本」社会のなかに「琉球・沖縄」という独自の歴史的経験を持つ地域があった事実を知ること、それこそがより多彩でバリエーションある豊かな日本の社会を構想することにもつながるのではないかと思う。」 P229-231

このような指摘は、近年の私の捉え方と響き合うものがある。

中国とか日本とかを「標準」にして、それに追いつけという発想でもないし、かといって、昔から沖縄独自の世界があるという本質主義的はとらえかたでもない。内外の多様なものとのかかわりのなかで、沖縄・琉球的なものが生まれ、それは現在進行中のものでもある。

そうしたことを、私は異質協同という概念を使用して述べてきた。あるいはまた「沖縄の教育は、先進国か途上国か沖縄独自か」という討論を行う時でも、そうしたことを、多様な人と多様な主張を重ね合わせながら考えてきた。とはいえ、いまなお、とくに沖縄教育界では、『日本標準に追いつく』こと

を至上命令にさえして思考する傾向が強い点が際立っている。私が繰り返し言ってきたことだが、芸能文化界の動向とは対照的でさえある。

沖縄・琉球史の全体像形成をおおまかに見ると、王府時代の「王統史観」、「日琉同祖論」的なもの、あるいは明治政府支配以降の「本土追いつけ」論ないしは、それへの「抵抗」論的なものでなされてきた経緯がある。

そして今、「内外の様々な組み合わせから琉球・沖縄ができてきた」論が勢いをえつつある。それらには一長一短がある。といっても、それなりに歴史認識を深化させてきた面を持っている。だから、各歴史像は、現在もなお一定の支持をもっている。

では、今後20~30年後には、現在の沖縄歴史把握がどうなり、さらに、どのような沖縄歴史把握が登場し支持を集めるだろうか。歴史把握は、その時代の置かれた状況を反映する。今後20~30年後までには、地球規模も含めて、さらに変動する予感が広がっている。

5. 日本中国などの強い影響を受けつつも沖縄独自の宗教・文化形成

2013年07月29日

沖縄の文化・教育形成にかかわって、次の外来宗教受容に関する指摘は示唆に富む。

「那覇から流入した外来信仰は全てが受容されたわけではなく、熊野信仰や観音信仰など、琉球在来の信仰（他界信仰・女性の霊的信仰）に親和性の高い信仰・宗派がとくに選択され、琉球に定着した。対照的に東南アジアや中国経由で接していたはずのイスラム教は、琉球にはまったく根付かなかった。つまり琉球の人々は外来宗教に対して全てを受け入れたのではなく、主体的な選択がなされていたのである。

仏教などの外来宗教は王権の庇護もあって那覇から付属都市の首里に広まり、王府官人にも受容されていった。そのみならず在来のノロ（神女）信仰にも影響を与え、日本の神仏をノロが琉球の天上世界から降臨させ、聞得大君の祭神が荒神と習合した宇賀弁財天となったように、琉球世界のなかで外来信仰が解釈され、習合していった。港湾拠点を中心に展開された外来宗教はやがて地方に波及し、ティラ・グンギン（寺・権現）のように仏教・権現信仰が在来の霊石信仰と習合し御嶽化するかたちに変容した。

「琉球に仏教は根付いていない」という時、我々は日本の仏教を無意識のうちに大前提、絶対の基準としてしまっている。しかし日本の仏教は、インドから中国を経由して伝来した宗教が「日本化」すなわち土着化したものである。同じように、主に日本経由で伝わった仏教は、中世日本の権現信仰とも交わり琉球の精神世界・宗教観にマッチするかたちで選択・受容され、独自の「琉球化」を遂げたのである。だから、より正確に言えば「琉球では仏教が日本と同じようなかたちで根付かなかった」のだ。」P223-4

この「琉球では仏教が日本と同じようなかたちで根付かなかった」という指摘は、鋭い。明治以降も、日本型仏教の移入が、新たな形で精力的になされたが、「日本と同じようなかたちで根付かないまま今日に至っている。キリスト教の場合は、事情が少々異なるようだが、上記引用のような視点で検討してみるのも興味深いことになるう。

外来文化については、上の引用文に続いて次のように指摘する。

「外来の文化についても同様である。王府儀礼は中華式をベースにしながら日本の陰陽道・真言系信仰が取り入れられ、仏僧が同席していたように、外来のさまざまな要素が混在していた。国内の公的文書には主に平仮名が使用されたが、中世日本とはまったく異なる方法（日本では和様漢文）で使用されたうえに、中国伝来の押印や年号などが採用され、同時代の中世日本のどこにも存在しない様式を作り上げていた。

政治機構についても中国の「王府制度」を模倣しながら、組織編成は「ヒキ」という航海体制をモデルにした独自の制度を採り入れ、中国からは「王相」や「長史」、「通事」などの官職用語を、中世日本からは「奉行」や「番」、「御屋形（親方）」「下司」などの輸入された語が混在していたが、それらは日中本来の語とは異なる用法で使われ、すでにオリジナルとは別のものに変化していた。同じ用語を使っていたからといって、実態は一緒ではないのである。」P224-5

最近、私は、「沖縄の教育は先進国型か、途上国型か、沖縄独自型か」というフレームを使用して、いろんな場で問いかけているが、その構図を参照して、この引用文を考えてみるのもいいだろう。

おおよそでいうと、日本・中国という当時の「先進国」およびその他の多様な文化移入のなかで、「先進国」を含む多様な地域との交流に対応できるように、「先進国」に「追いつけるように努力する途上国」的課題を追求しつつも、移入された多様な文化と沖縄地域特性に基づき、「沖縄独自」の文化創造への試みが多様に展開した、と表現できるだろう。

それらには、文化創造的契機が強く、文化支配的契機が弱かった点も注目できよう。しかし、薩摩支配以降、わけても明治政府支配以降、支配的契機が強力に強まって行く。それに対して、沖縄独自の文化創造と言う歴史的水脈がどうなってきたかという視点から検討するのも重要になるう。

こうした文化創造継承には教育がともなう。それらがどう展開したのか。徒弟制・個人教授・親子伝授という形態において、それらがどうなっていたらうか。本格的なものとはいえないが、小規模な形にせよ組織的教育を営む、学校に準ずる場ではどうなっていたらうか。中国で教育を受けた官生が帰国後、教育面でどのような活動をしたのかも、一つの焦点とならう。それらを探るうえで、近世以降では家譜研究が一つの手がかりになるかもしれない。

19世紀以降の王府の学校、さらに明治以降の近代学校へのつながりの視野をもって、こうした検討を行いたいだが、史料的限定があまりにもあり過ぎるためか、戦前研究以降の展開蓄積が乏しいのが実情だろう。

6. ヒキという同一組織で行政・軍事・貿易を担う 2013年08月03日

連載最終回になる。私にとって新鮮な「ヒキ」についての記述を紹介しよう。

「ヒキ」の特徴は、この組織が単なる行政組織にとどまらず、軍事・貿易業務も兼務するフレキシブルな組織であった点である。通常は行政組織だが、緊急時にはこの「ヒキ」が一つの部隊となり、軍事組織として機能した。また海外貿易の際には、「ヒキ」のチームを単位に貿易船に乗り込み、そのまま航海組織となったようだ。

(中略)

「ヒキ」制度は十六世紀初めにはすでに成立していたが、十五世紀後半の第一尚氏王朝期には首里城に交替で出仕する「ヒキ」の原型が確認できる。おそらく首里王府を中心とした原ヒキ制度に、第二尚氏王朝の中央集権化で各地に割拠していた按司層たちが吸収され、完成したものと推測される。

このように琉球王府は同一組織で行政・軍事・貿易をローテーションで行う体制を敷いていた。琉球に日本の武士のような軍事を専門とする組織が一見確認できないのは、こうした組織形態によるところが大きい。琉球に武士はいなかったのではない。文官が武官をも兼務する組織形態だったのである。」 P118-20

「ヒキ」は少なくとも一〇〇〇人存在しており、琉球の軍事組織は王府直轄の「ヒキ」軍と地方役人「おゑか人」らの間切軍とで編成されており、1609年(万暦三十七)の島津軍侵攻では沖縄島で三〇〇〇人程度の動員が確認されている。この軍勢が敵軍来襲の際に三隊に分かれ、それぞれ《首里城》《那覇市中・那覇港北岸》《豊見グスク・那覇港南岸》を守備したのである。

十六世紀半ば、琉球王国は拠点中枢である首里・那覇を、複数の要所・グスクによって連携守備する王都の軍事防衛体制を完成させた。この一大防衛網は沖縄島全域を守備するのではなく、港湾都市の那覇、そして王都の首里を海側から集中的に防備する性格を持っていた。」 P122

こうしたヒキの成立過程、とくに統一王朝体制ができる以前ではどうなっていただろうか。引用文でいうと、地方役人「おゑか人」らの間切軍の前身が存在したであろう14世紀から15世紀半ばごろまではどうであったろうか、興味をもって研究をみていきたい。たとえば、尚巴志による佐敷統治ではどうだったろうか。その際、行政・軍事・貿易に加えて、農業生産にかかわってはどんなになっていたのだろうか。

もう一つ私の関心は、「ヒキ」組織での、新人教育をどう展開していたか、ということにある。沖縄における教育システムのかなり古い形態を探るうえで重要になろう。

教育にかかわっていると、当時の文書作成運用にかかわる教育システムがどうなっていたかが、重要になる。その点にかかわって、次の記述は注目される。

「古琉球の文書は日本と中国の文化双方を取り入れ、日本の平仮名をベースにはしているが、日本のものとは似て非なる「琉球のもの」としかいえない形式であった。平仮名を使用しているから琉球は日本と同じと主張するのであれば、中国の文字（漢字）を使用している日本は中国と同じ、という論理とまったく一緒になってしまう。

（中略）

琉球は日本僧をはじめとした外来者の伝えた日本の文字をほかの外来文化である中国的な要素とミックスしてアレンジし、独自の文化として昇華させたのである。」P169

こうした「独自の文化」の形成と、その継承伝達には教育が深く関わる。

教育にかかわっては、多様な文化や技能の交流のなかでのその展開にも関心がもたれる。

私が書いた『沖縄県の教育史』では、端緒的な記述にとどめてあるので、その具体的な記述ができるような研究の進展が望まれている。

本書は、大きな刺激を与えてくれた。著者たちの研究のさらなる発展を期待したい。

沖縄教育史での新しいステージへの芽 我が家での研究会 2013年07月16日

15日午後、我が家で6人のメンバーが集まって研究会。旺盛な研究活動を展開している40代を中心にした集まりで、全国から集まる。実は14日の沖縄文化協会研究発表会で問題提起をした方々が、この機会に論議を深めようということで集まったのだ。

開始前、お二人を、近辺の史跡などへ案内した。

佐敷上グスク、馬天御嶽、民政府跡、タマグスク、糸数グスクを訪問した。

写真は民政府跡。戦後の重要な『史跡』だが、今ではこの碑のみ。とても分かりにくい所で、訪問者も滅多にいない印象。

この民政府で文化行政に携わっていた川平朝申は、参加メンバーの共通関心人物だ。

研究会では、私が討論材料を提供したのだが、さすがプロ研究者とうならせる発言が続く。そのなかで、私自身が発見・再確認したことを一つだけ記そう。

沖縄教育史研究は、1970年ごろま



では、戦前からの継続的な印象が残り、首里王府中心のものだったり、「近代化」を賛美的に綴るものが多かったが、1970年前後より、そうしたものを批判的に検討し、たとえば、上からの政策展開とそれに批判的潮流とのせめぎあいを明らかにしていくというような、構造的な研究提起が広がって行く。

そして、1990年代に入り、研究の量的増大、質的な広まり深まりが見られるようになり、今日に至っている。その際に、質的な広まり深まりは、新たな研究ステージを構築しつつあるのだが、それがどのように意識的にされているかと言うと、まだ見えにくい状況がある。そのあたりに関わって、意識的な作業をおこない、そのステージを明瞭にしつつ、新たな研究を進展させる作業が求められているといえよう。

終了後、奥武島海産物食堂での語り合い、さらに我が家で開花したサガリバナ鑑賞、星空鑑賞が付属した。

世代が異なる方々と研究討論していると、多様で強い刺激があり、私の脳が活性化し、研究したい事がどんどん増えてくる。

興味津々の学際的研究に参加 文化芸能と教育 沖縄・台湾・日本・アメリカ

2013年06月11日

齋木喜美子さんを代表者とする科学研究費による共同研究に連携研究者として参加することになり、9日の初研究会に出る。

教育学、児童文化、音楽、歴史学、文化人類学、社会学、美術といった多彩な分野の第一線の研究者たちが集う研究会で、新鮮で興味津々の発言が続く。

沖縄出身で、戦前台湾で活躍し、戦後沖縄に戻り、民政府・軍政府・放送局など、とくに文化行政で活躍した川平朝申さんに焦点化した共同研究だ。

無論、個人の背景にある、沖縄、日本、台湾、アメリカといったからみ、また、教育と文化芸能とのからみ、など流動の時代の中で、多様な問題が渦巻く。

私自身は、川平朝申さんについては、全くの初心者だが、その背後にある多様な問題展開に強い興味関心を持っている。そして参加者たちの多様で鋭い研究視角には、刺激されることが大きい。

ここしばらくは予備的学習をしながら、焦点を絞って行く作業をしたい。そして、共同研究が続く何年かの間にどれだけ掘り下げられるか、不安と期待とが入り混じる気分と書くところだが、今は、新鮮さが前面に出る段階だ。

ここ百数十年、今日にいたるまでの沖縄における教育史と文化芸能史とは対照的といってよいほど

の展開をみせたが、それをどう把握するのか。

多様な外の世界と交流しながら沖縄独自の世界を追求するのか、どこかに合わせる追いつくことを追求するのか、といった沖縄史の底流にある問題の解明。

こうしたことを入り口にして、人々の暮らし、暮らしのなかの文化・教育の歴史的把握と、沖縄の教育と文化芸能の今後の展開を追求するうえで、大変有益な共同研究になりそうだ。

私なりに関わって掘り下げていきたいと思う。

研究討論の場は、生活指導学会以来久々だ。若い方々の集中的議論に、私の頭は久しぶりに限界一杯だった。何せ、休憩ほとんどなしに4～5時間続いた。

疲れたが、こうした研究討論に参加できることの喜びが疲れを打ち消してくれた。とはいえ、頭が普通に戻るのに、3～4日かかりそうだ。若い方々は会終了後も、立て続けに研究展開のメール発信をどんどんしている。「すごい」の一言だ。

沖縄文化協会2013年度公開研究発表会 2013年07月15日

14日、県立芸術大学で開かれた会に出かけた。知人が何人か発表すると聞いたからだ。この会の名前は随分前から知ってはいたが、参加は初めてだ。

約20本の発表があり、聴衆は100名ぐらいか。随分盛況だ。それだけ「沖縄文化」研究が盛んだということだろう。全国各地の若い大学院生の発表が多い。研究の裾野が広がっているということなのだろうか。中には、開始したばかりの研究報告で、聴衆から情報を得たいという感じのものもあった。と同時に重厚な研究もある。

1990年代ごろから多くの学会で、大学院生の増大に伴うためか、研究方法はしっかりしているが、課題意識の掘り下げが弱く、他の先行研究をもとに対象を変えて応用してみる、という印象をもつ発表に出会い始めた。それでも研究スタートとしてはかまわない、ということだろうが、研究の質を深めるという意味では、今後の課題を残す例がある。

この研究会は、初参加なので事情はよくわからない。それにしても、研究を志す人の量が増加しているように思う。それが質的发展につながることを期待したい。

「浅野誠沖縄シリーズ3 沖縄の歴史民俗」完成 HPに掲載

2013年05月01日

過去のブログ記事をカテゴリー別に集約整理し、HP (<http://asaoki.jimdo.com>) に掲載してファイルをダウンロードできるようにする作業を精力的にすすめている。

今回、完成したのは、「浅野誠沖縄論シリーズ3. 沖縄の歴史・民俗2003－2013」だ。2003年から2013年にかけての記事だ。2006年以前は、当時のホームページに掲載したものだ。

大部分が、沖縄の歴史・民俗にかかわる数十冊の研究書を読んだ上での紹介とコメントだ。私が沖縄を離れていた1990年～2003年は、沖縄研究が飛躍的に展開した時期だ。かつての定説が大幅に変更されたこともある。それらの成果を学習して、私なりに整理したものが多い。そうしたことを反映して、2003年ごろの記事と、2010年ごろの記事では、私のコメント内容に発展変化したものもある。

私の興味関心で本は選んでいるので、先史時代やグスク時代、移民問題や沖縄アイデンティティ問題などが大きな比重を占めている。

目次を紹介しておこう

30. 概観

沖縄史・沖縄教育史研究のための基礎作業

西原町史執筆関連記事

松島泰勝「沖縄島嶼経済史」(藤原書店2002年)を読む

鹿児島＝薩摩からの沖縄の見方

石川市史(改訂版 1988年石川市発行)を読む

南城市地域の共通性の探求 「南城市史総合版(通史)」を読む

31. 先史時代

高宮広土「島の先史学」(ボーダーインク社2005年)を読む

『琉球縄文時代の謎』シンポジウム

自然 遺跡 三千数百年前 南城市史3

漁撈と交易 二千年～千数百年前ころ 南城市史4

約2000年前の沖縄史の大胆な仮説の連続 木村政昭本を読む

高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹「沖縄文化はどこから来たか」(森話社2009年)を読む

岡谷公二『原始の神社をもとめて 日本・琉球・済州島』を読む

アマミキヨが複数・多数いる、という見方

来間泰男「稲作の起源・伝承と“海上の道”」を読む

32. グスク時代

刺激的な新説の提案――安里進「琉球の王権とグスク」山川出版社2006年を読む

安里進「グスク・共同体・村」を読む

7, 8世紀にはグスク的遺跡が登場したという新説

吉成直樹・福寛美『琉球王国誕生——奄美諸島史から』を読む

田中史生「越境の古代史」(2009年ちくま新書)を読む

谷川健一編『日琉交易の黎明』(2008年森話社)を読む

グスク時代の人々 集落とグスク 兵士と農業 子育てと教育

吉成直樹「琉球の成立—移住と交易の歴史」を読む

グスク時代の中城湾岸 「西原町史第一巻通史編」を読む

玉城の史跡——玉城ユンタク第四回での話

久米島文化財巡りツアー

内田晶子ほか「アジアの海の古琉球」(榕樹書林2009年)を読む

上里隆史「琉球古道」(河出書房新社)を読む

33. 近世

沖大地域研究所編「薩摩藩の奄美琉球侵攻四百年再考」

久米島文化財巡りツアー(近世)

ペリー艦隊乗組員が新原玉城仲栄真にきていた

オモロ あきみよ ペリー艦隊 新原 ジュゴン 南城市史

34. 近代

沖縄近代史と沖縄おこし・人生おこし 「沖縄県史近代」を読む

階層ごとの行動特徴 「沖縄県史近代」を読む

明治期の「沖縄おこし」と公会運動 「沖縄県史近代」を読む

旧士族層以外と沖縄おこしのからみ 「沖縄県史近代」を読む

上杉・岩村県令期の教育政策の揺れ 「沖縄県史近代」を読む

士族・地方役人層・就学 「沖縄県史近代」を読む

明治期「エリートたち」 「沖縄県史近代」を読む

教育界と教育会 「沖縄県史近代」を読む

婦人会と女性教員 「沖縄県史近代」を読む

戦前の教育労働者組合 「沖縄県史近代」を読む

大事件——戦前玉城の分教場設置問題

人口爆発 「沖縄県史近代」を読む

近代沖縄における人口概況と移民・移住、暮らし、産育・教育など

昭和初期のソテツ地獄への対応策 「沖縄県史近代」を読む

『日常の食糧』としてのソテツ ソテツの復権 「沖縄県史近代」を読む

米不足 労働力の供出 国家総動員 「沖縄県史近代」を読む

たまぐすくの民話

戦争とユタ 火葬場 西原町史

35. 沖縄・日本・同化教育・・・

国民統合と「異法域」、そして教育 「沖縄県史近代」を読む

同化 皇民化 沖縄おこし 「沖縄県史近代」を読む

同化論 太田朝敷 「沖縄県史近代」を読む

伊波月城と沖縄教育界 「沖縄県史近代」を読む

屋嘉比収『<近代沖縄>の知識人 島袋全発の軌跡』を読む

戦前における『郷土研究』 「沖縄県史近代」を読む

照屋信治『「沖縄方言論争」と『沖縄教育』誌上の「標準語」教育論——「混用」という可能性——』を読む

1970～80年代の私の沖縄教育論を思い出させる照屋諸論

南島研究と沖縄学 方言論争 「沖縄県史近代」を読む

36. 移民

移民の原因・背景 人口過剰と経済 「沖縄県史近代」を読む

移民と出稼ぎ 「沖縄県史近代」を読む

移民 海外雄飛 「沖縄県史近代」を読む

移民 土地整理 徴兵忌避など 「沖縄県史近代」を読む

戦前の移民 西原町史

移民 土地整理 徴兵忌避など 「沖縄県史近代」を読む

シマ共同体と市民社会組織 コンパニー 「沖縄県史近代」を読む

小林茂子『『国民国家』日本と移民の軌跡—沖縄・フィリピン移民教育史—』を読む

教育 台湾移民 「沖縄県史近代」を読む

職種と沖縄人集落 台湾移民 「沖縄県史近代」を読む

満州移民 「沖縄県史近代」を読む

満州移民 教育界・教育の関与 「沖縄県史近代」を読む

37. 軍事・戦争

徴兵忌避と沖縄戦以外は、軍事記述が少ない 「沖縄県史近代」を読む

「近代沖縄の軍備—軍事施設を中心に」 「沖縄県史近代」を読む

中城湾臨時要塞・船浮臨時要塞 「沖縄県史近代」を読む

「惨劇」を準備した日本軍作戦 「沖縄県史近代」を読む

「沖縄住民不信の日本軍部」 「沖縄県史近代」を読む

軍と沖縄県民 西原町史

沖縄・沖縄県民を道具化する日本軍と米軍 西原町史

石原昌家「沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕」集英社2000年を読む

38. 戦後

石川での戦争直後の学校づくり 石川市史を読む

戦後沖縄教育の歩みと「伊波常雄教育資料」展

戦後移民 沖縄おこし 西原町史

古波蔵剛さんの琉米文化会館論文を読む

数十年前の沖縄のシマの暮らしの再現——「聞き書き」を読む

「米軍支配と大衆運動のダイナミズム」 与那国暹著書を読む1

沖縄における近代化をめぐる——与那国暹著書を読む2

39. 民俗—沖縄の精神・神々—

神々・自然との対し方、アイヌ・沖縄人・古代日本人

沖縄と神々

南島地名研究センター「地名を歩く 増補改訂 奄美・沖縄の人・神・自然」ボーダーインク200

6年を読む

渡邊欣雄『世界のなかの沖縄文化』（沖縄タイムス社）を読む

外間守善「海を渡る神々」（1999年角川書店）を読む

外間守善本2 伊江島 ポリネシア ノロとユタ 海神と稲作

外間守善本3 竜宮 斎場御嶽 アラ神

神々をめぐる、支配の争い 「神々の琉球処分」

オー アーマン 「沖縄文化」本4（余談）

中山史へのヒント——仲松弥秀「神と村」（梟社1990年）

オソイとクサテ「神と村」本2

首里王府支配と「神と村」——「神と村」本3

太陽・テダ・オボツカグラ——「神と村」本4

殿 神アシャゲ——「神と村」本5

門中と村落 火の神——「神と村」本6

藪薩御嶽と「ヤブサ」

母たちの神——比嘉康雄展

ユタ史研究への期待 浜崎盛康編著「ユタとスピリチュアルケア——沖縄の民間信仰と

スピリチュアルな現実をめぐる——」ボーダーインク2011年

風俗改良運動 ユタ 洗骨 改姓 「沖縄県史近代」を読む

門中 家 ユタ 儒教 「沖縄法律事情」を読む

グスク時代を英雄で語ること 庶民を語ること 2013年04月14日

沖縄の書店では、最近グスク時代や古琉球時代といわれるころの本が山積みになっている。何冊か読んでみた。なかには、大胆な推理・仮説で書かれたものもある。それらの本の多くが、尚巴志とか百十踏揚などといった、王・按司やその妻・娘といった英雄や高貴な人に焦点化されていることに特徴がみられる。

それにしても、そうした大胆な推理・仮説を呼び込む時代ではある。それには、定説を生むような文献資料が乏しいこともある。と同時に、その時代が激動の時代であり、対抗する英雄たちでもって語りやすいからでもある。何世代にもわたって沖縄に住んでいた人々の子孫だけでなく、九州や奄美諸島、さらには朝鮮半島、中国大陸、さらには、倭寇ないしは交易による移動集団などが沖縄を舞台に活躍し、それらの多様な人々がつくる諸集団で、沖縄が構成される時代である。

だから、王や按司たちの出自について、九州から島伝いで移住してきた、中国大陸から移住してきた、交易集団だ、などという伝説や仮説が登場するのだ。たとえば、尚巴志について、伊平屋から移住してきたという伝説があるが、伊平屋以前は、どこからきたかでの仮説も登場する。

そうした多様な出自をもつ英雄をリーダーとする集団が各地に割拠し、相互に対抗・連携し合っ、て、当時の時代を作っていたのだ。対抗は戦闘に至ることが多い。それだけに、戦闘に備えたグスクを各地に構築したのだろう。そして、一定規模以上のグスクごとに、按司を取り囲む集団が存在してであろう。人々の多数が、いずれかの集団に属することになり、グスク内、あるいはグスク近辺に居住することになる。そして、普段は、農業ないしは交易にかかわる仕事に従事しながらも、いったん事があれば、戦闘できるような態勢をとっていたのだろう。専門的戦闘従事者はそれほどいずに、「皆兵」状況にあったのではないか。それらの集団は、集団ごと、どこかから移住してきた可能性もあるだろうし、一定人数の戦闘集団が移住してきて、先住者を支配統治しながら、新たな集団を形成することもありえただろう。それゆえに安心安全が保障されにくい時代であり、どこかの集団に所属せざるをえなかったともいえよう。

こうした状況にあるから、集団リーダーである按司＝英雄の焦点があてられやすいのだろう。

こうした状況は、当時の東アジア一帯に広く見られたことだろう。それにしても、東シナ海周辺が、交易ルートであり、かつそれだけに利害対立が激しく、戦闘がおこりやすい状態が強かっただろう。交易ルートとして重要な南西諸島はより一層様々な勢力の関心と呼ぶところだったろう。

そうした対立抗争の激動の時代に一区切りつくのは、15世紀末から16世紀初めにかけてであり、それ以降「英雄」は登場しなくなる。そして、17世紀前半に再編が行われる。そのあたりの時代になって、相対的安定期が生まれていく流れとなるのだろう。

こうした時代、英雄に焦点化されやすい時代にあって、一般庶民がどんな暮らしをしていたのか。

そのことへの関心が薄いのが気になる。当時の時代は、英雄がリードしていただろうが、農業を軸とする諸集団の活動、そして諸集団間の交流・交易を実際に担った膨大な庶民たちがいたから英雄は存在しえただろう。

だから、この時代を描き語るには、英雄たちだけに焦点をあてるのでは、限りなく不十分である。庶民生活、庶民の物語を語りたい。それは、21世紀の現代を語るのに、トップレベルの政治家で語るよりも、庶民レベルに焦点をあてて語ることと同じである。首相や知事などよりも、「チュラサン」物語のような朝ドラとか、「寅さん」のような庶民が登場してくる物語を、グスク時代についても語ってほしいと思う。

當眞嗣一「琉球グスク研究」（琉球書房2012年）を読む 2013年04月04日

500ページを超す研究書なので、読み終えるのに時間がかかった。

本書に登場するグスクは72あるが、そのうち私自身が訪問したことがあるのは、19ヶ所だ。しかし、グスクだと知って訪問したのは、わずかだ。たとえば、西原の津記武多グスクのように、当時の我が家から100メートルしか離れていない所に十数年も住んでいながら、グスクであることを知らなかったところもある。

グスクだと知っていて訪問したところ、たとえば今住んでいる玉城にある糸数、玉城、仲栄真の各グスクも、本書で初めて知った事が一杯だ。本書を手引きにしながらあらためて訪問したくなった所ばかりだ。

タマグスクでいうと、米軍によって壊された二の郭、三の郭、また石積みの特徴、一の郭の内部構図。

壮大な糸数グスク、島添大里グスクも、なんとか訪問していて、本書で書かれている場所を思い返すことができることが多いが、本書の記述に沿って現地を見るとまた新たな発見がありそうだ。

ところで、島添大里グスクについて次のような記述がある。

「ミーグスクは貿易港の抑えと佐敷グスクの動向を伺うために築かれた島添大里グスクの出城だったことがわかるのである。さらに言えることはミーグスクを介した島添大里グスクと佐敷グスクのありようは、両グスクが勢力的に対置したというよりむしろ島添大里グスクが本城であり、佐敷グスクが支城だという関係で見た方が解り易い。それはミーグスクを介してより一層鮮明になるのである。

(中略)

島添大里グスクはその規模において首里城に匹敵するほどのグスクであること、さらに宇西原の琉球石灰岩の丘陵全体を利用して縄張りがなされ、嚴重な軍備を備えた城郭だということなどが判明した。石垣を二重に張り巡らし、随所に雉城をつくるなど徹底した防御線が構築されていることは圧巻

である。とくに、大手の虎口の防御は嚴重で左脇に大きな陥没地（チチンガー）を取り込むことで右からの横矢を有効に効かす造りは目を見張るものがある。」P326

佐敷から出た尚巴志が首里に出て覇権を握って行くうえで、南山支配にかかわる島添大里との関係を解くことが不可欠になるが、その点での示唆となろう。

こうした示唆的な記述があちこちに見られる本だ。

歴史に興味を持ち、グスク巡りをする人々が増えているそうだ。本書を読むと、ますますグスク巡りに駆られるだろう。

※ 次の二つは、「沖縄の歴史・民俗2003－2013」への掲載漏れ記事

移民 差別と同化教育 「沖縄県史近代」を読む21 2012年1月26日

移民先社会では、「日本人」との差別事態が見られ、その対処策として同化教育がすすめられた。南洋群島社会については、次のように書かれている。

「南洋群島社会には、「一等国民日本人、二等国民沖縄人／朝鮮人、三等国民島民」という暗黙の差別があったことも看過することはできない。貧しさゆえに十分な教育を受けられなかった親たちは、自分たちの苦労を繰り返させたくはない、と無理をしてでも子供たちに教育を受けさせた者が少なくない。」P352

ハワイでも同じような状況があった。

「(アルフレッド・トツアの研究は——浅野補足) 他府県人二世の間から「オキナワケンケン、ブタカウカウ」といったような蔑称が生まれ、二世間にも差異感を引き継がれていたことを示した。トツアは両者の亀裂が生活細部に浸透していたことを指摘した。例えば互いの医者などの専門家、社交クラブ、商店の利用を拒み、それは宗教、すなわち信者となる教会・寺にまで及んでいた。

こうして琉球処分以降形成された「ヤマト」と沖縄の関係は移民先ハワイにも持ち込まれ再現されたといえよう。ここで一つ述べておくと、実際には戦前の沖縄系移民社会は出身の市町村別に細分化された結束が中心で、それらは互いに排他的で独立性が強かった。ちなみに「オキナワ」全体の組織ができるのは戦後まで待たなくてはならない。」P389～390

この後段の記述にも注目しておきたい。

同化教育については、次のように記述されている。

「移民先の他府県人による沖縄県移民に対する差別や偏見に対し、沖縄では「大日本帝国臣民」となることを奨励し、移民先での差別の原因は移民側にあるとして渡航前に教育が行われ、一九二四年（大正十三年）には「移民地における沖縄的なものを排除する」ことを目的に沖縄県海外協会が設立された。次々に移民先に支部が置かれ、一九二六年には布哇沖縄海外協会が設立された。このように、沖縄系移民の間でも差別への解決策として他府県人への同化が進んだ。」P390

「海外協会の方針は沖縄的な生活習慣、伝統文化を捨て、「日本的なもの」を身につけることであった。（中略）

米本土の沖縄系一世も他府県人による否定的な態度について語った。「私はしばしば沖縄人が、侮蔑的なトーンで『りゆうきゆう、りゆうきゆう』と呼ばれるのを聞いた」。

こうした差別の原因を多くの沖縄系移民は沖縄文化の「後進性」と「野蛮な」生活態度に見出したのだった。海外協会の同化の観念は沖縄系移民社会のリーダーたちによって積極的に共有され、メンバーは日本人らしくふるまうことが奨励され、受け入れられた。例えば、夏のピクニックでも、沖縄の踊りや音楽ではなく、日本舞踊が披露された。メンバーの一世は海外協会の同化の方針を「沖縄」＝「恥」と理解した。他方、指導者たちの「同化」思想の背景には社会的上昇志向と階級主義があった。ゆえに指導者たちは日本人らしく振舞い、他府県人との親交を深めた。指導者とメンバーの沖縄系移民の溝について次のような指摘がある。「彼等は少しばかりお高くふるまっていた。すべての沖縄系移民は下にみえるらしかった。だから彼らはヤマトウンチューとだけ仲良くした」。

このように、海外協会で採られた同化の方針は琉球処分以後、ヤマトによる同化政策の延長線上にあった。その構造が、海外移民社会で再現されたのだった。ゆえに海外協会の方針は移民社会でも極めて当然と受け入れられた。この海外協会は当時の沖縄系移民社会を代表する組織であり、その協会方針をメンバーの沖縄県移民は共有していたわけだが、まもなく協会に対抗する存在が出現した。在米沖縄青年会であった。」P395-396

同化教育・同化施策が沖縄内だけでなく、移民先でも行われたことは注目されるが、むしろ移民先経験が沖縄内での同化教育を、県人自身が追求する契機にもなったのだ。そうした中で、同化政策への批判対抗は注目すべきことだ。

武智方寛「沖縄苗字のヒミツ」（ボーダーインク2011年）を読む

2011年7月17日

かねてから関心があったテーマだが、きちんとした書物などがなかった。
そんななか出た本で、私が知らなかったことがかなり多い。
いくつか学んだこと、読んで考えたことなどを書こう。

1) 戦前から戦後にかけて改姓が多かったのだが、朝鮮半島などにおける「創氏改名」とは、事情がかなり異なる。

どこかで、『創氏改名』に似た権力的なものが働いたという指摘を読んだ記憶があり、私もそういう面があるのかな、と思っていたが、本書によると、そういう構図とは異なるようだ。

沖縄差別を体験するなかで、沖縄住民ないしは、沖縄出身者の「自発的」改姓が多いようだ。無論、改姓を容認促進する行政措置が取られたことがあることは本書に記されているが。

2) 改姓をめぐっての活発な論議があった点が注目される。方言論争のように、県の行政機関などが、方言撲滅推進派そのものであるという構図とは異なっていた。伝統を残すということと、生活の必要上の改姓ということのなかでの葛藤が、興味深い論議を巻き起こしたようだ。

3) 大量の改姓が、戦前前後、とくに戦争直後に起きたことが興味深い。

私が住む中山でも、戦前はすべて当山だったが、戦争直後に改姓によって、主として門中単位に、当山、中山、宮平、井上という四つの姓に分かれたようだ。

それにしても、日本の姓制度は、明治期に作られたスタイルを維持してきたため、人々は、昔からそうだったと思込みやすい。大多数の人は、明治期に初めて姓をつけた。沖縄ではほとんどが地名から選んでつけたが、屋号をつけた人もいたようだ。

沖縄ではないが、私の浅野も、明治に入って親戚がそろって浅野を名乗ることにしたようだ。

夫婦同姓夫婦別姓も、国によってさまざまだ、ということを知らない人は多い。

また、姓と名の組み合わせが普通と思っている人も多い。だが、ミドルネームのように、三つの名前の人、四つ以上の名前を持つ人が、あちこちにいる。考えてみれば、沖縄の士族も、いくつも名前を持っていた。

これまでの出会いのなかで私が驚いたのは、一つだけもっていて、姓と名に分けられない人がいることだ。でも、明治以前の日本もたいていの人がそうだった。

事のついでに書くと、名前を自分で付けられない、選べないことは、大変不合理だと思う。無論、ペンネーム、芸名などはできるが。

以上書いてきた事情には、近代国民国家の深い影響が影を落としている。次の時代にはどうなっていくのだろうか。人々はどうしたいのだろうか。